

西条古墳群

—兵庫県加古川市神野団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査（1963～1964年）の成果—



2022年3月

東播磨地域史懇話会

序文

当町内には古くから人々の生活した足跡が残されております。中でも城山の南斜面では数万年前の旧石器が採集されています。また城山の南側丘陵では弥生時代終わりころから古墳時代後期にかけての墳丘墓や多くの古墳がつくられました。

しかし、今から約60年前に神野団地造成に伴い行者塚古墳や尼塚古墳、人塚古墳、西条廃寺を除き約40基の墳丘墓や古墳が発掘調査され消滅しました。

私が小学5年生の時、ミイラが発掘されたと聞き、急いで現場に駆け付けました。20歳前後の女性であるとのことでしたが今でもその姿を鮮明に記憶しています。

当町内会の「西条会館」には、その時の発掘調査で出土した須恵器や土師器、埴輪、鉄器などの遺物を2階ロビーや倉庫に保管していますが、これら遺物は、発掘調査終了後も歴史的位置づけのないまま今日に至っていました。

このたび、平成30年度から「東播磨地域史懇話会」の方々により、これら遺物の整理や実測作業などが始まり、歴史的位置づけも行われ令和3年度には「発掘調査報告書」が発刊される運びとなりました。

この報告書を通じて、西条地域の歴史的位置づけが行われ、私たちの祖先の姿がよみがえることになります。

当町内には国指定の史跡である行者塚古墳や尼塚古墳、人塚古墳、県指定の史跡である西条廃寺跡が保存されております。また、西条4号墳から出土した家形石棺の蓋が塚脇公園に保存されています。これ以外にも城山園内に家形石棺の蓋、寺本地蔵と呼ばれる家形石棺の蓋などがあります。

私たちはこれら貴重な歴史的遺産を大切に保存し活用していきたいと考えております。

関係各位にはこの報告書を通じまして私たちの祖先がつくった「西条古墳群」についての歴史的意義へのご理解を賜りますようお願い申し上げます。

また、今回、調査を行っていただいた「東播磨地域史懇話会」の方々に西条町内会を代表して敬意を表し感謝を申し上げます。

令和4年3月31日
加古川市神野町西条
町内会会長 佃 千雄



ガラスケースに展示保管された土器（西条会館2階）

はしがき

加古川市神野町西条の丘陵には5世紀前半には国史跡に指定されている行者塚古墳、尼塚古墳、人塚古墳の大古墳が築かれました。これらは加古川下流域の王の墓と考えられています。

今から約60年前、城山に続く丘陵上の神野団地造成に伴って存在が確認されていた西条古墳群の調査が昭和38年12月から昭和39年3月末日まで行われました。当時の発掘調査で出土した遺物は西条町内会の「西条会館」に管理、保管されています。

これら遺物は、調査終了後も「発掘調査報告書」としてまとめられることなく今日に至っていました。そこで私たち「東播磨地域史懇話会」のメンバーは、「西条町内会」様のご了解を得たうえで、当時の発掘調査を担当された是川長先生や地元永昌寺前住職中原敏定氏に、これら遺物の取り扱いについて相談し、種々のご助言をいただきました。その上で、当時の発掘調査に携われた方々に手紙をお送りして、ご意見をお聞きしました。その結果、「東播磨地域史懇話会」が「西条古墳群出土遺物調査報告書」としてまとめ発刊させて頂くことについてのご了解を頂くことができました。

私たちは調査者のご意思を受け継ぎ、何とかこれらの遺物、遺構を加古川下流域の歴史の中に位置付けたいと考え、兵庫県教育委員会、兵庫県立考古博物館のご指導、ご意見を賜りながら遺物整理を行ってきました。

またこれら遺物整理作業中に、発掘当時の遺構の実測図や調査日誌、写真などを保管されていた調査者のお仲間を通じて発掘調査時の図面や写真、日誌のご提供を頂くことができました。私たちは平成30（2018）年3月から、「西条会館」と「陵北小学校」の教室をお借りして作業を行ってきましたが、令和3（2021）年3月には「加古川市教育委員会文化財調査研究センター」と連携することが出来、この報告書の発刊につながりました。関係各位にはこの報告書を通じて「西条古墳群」についてのご理解を賜りますようお願い申し上げます。

なお、今回の報告書作成にあたりご指導とご協力を頂いた方々は次の通りであり、お名前を記してお礼を申し上げます。（敬称略）

是川長・加藤保子・浅岡俊夫・中原敏定・中濱久喜・中村信義・松本智子

西条町内会 佃 辰雄・奥村正人

県立考古博物館 和田晴吾・藤田 淳

神戸市立博物館 山本雅和

加古川市立陵北小学校 高田万樹・堀之内健志・辻 浩樹

令和4年3月31日
東播磨地域史懇話会
会長 上月昭信

例言

1. 本報告書は調査の経緯で述べるとおり、1963～1964年に発掘調査された西条古墳群の発掘調査報告書である。
2. 当時結成された発掘調査団が主体となり、地元町内会（西条地区）の協力の下、発掘調査されたもので、以後、当該町内会管理の「西条会館」および一部の調査担当者により保管されていた資料（発掘調査時実測図面・写真・調査日誌・出土遺物等）を広く公開する目的で、有志（後述）により、地元西条町内会、加古川市教育委員会文化財調査研究センターおよび市民協働部市民活動推進課の協力を得て作成したものである。
3. 遺跡の現在所在地名は加古川市西条山手である。
4. 本報告書については、執筆・編集を通じて主に有志5名（岡本一士・上月昭信・友久伸子・森内秀造・山本祐作）による合議の下を行い、主たる担当・執筆については目次および各章末・各節末に記した。編集については主に友久が行った。
5. 調査時遺構写真・図面・日誌については主に調査団関係者より託されたもので、遺構図整理・製図は主に上月が行った。
出土土器接合および実測については有志5名の他、田中幸夫・中島愛理・奥村孝子・萬代和明の協力を得て行い、製図は主に友久が新山王諒太・中島の協力を得て行った。
出土金属製品実測については平尾英希・岡本、製図・執筆（第6章第4節）は平尾が行った。
拓本・遺物撮影は上月が行った。
6. 遺物番号の表示は各遺構・遺物の単位ごとに付し、本文・図版・写真図版を通して統一した。
7. 遺構図については、調査当時の原図に忠実に表し、未記載の事項（方位・座標・標高等）についての加筆を控えた。不備があることをお許しいただきたい。
8. 本文中の参考文献等の注記については各章・各節の執筆者単位で示し、各文末に記した。
また、本文中挿図についても必要があるものについて、各章・各節の執筆者単位で示した。

目次

序文

はしがき

第1章 実測調査の経緯と経過1	(山本)
第2章 周辺の歴史と環境2	(岡本)
第3章 加古川下流域の古墳群と西条古墳群4	(山本)
第4章 西条古墳群発掘調査の経緯と経過7	(上月)
第5章 西条古墳群の各古墳について		
第1節 A群の古墳8	(上月)
第2節 B群の古墳13	(森内)
第3節 C群の古墳20	(山本)
第4節 D群の古墳23	(上月)
第6章 古墳群出土の遺物		
第1節 土器（須恵器・土師器）25	(森内)
第2節 墳輪47	(山本)
第3節 陶棺49	(上月)
第4節 金属製品52	(平尾)
第7章 弥生時代の遺物57	(友久)
転載：「西条52号墓出土品」の共同研究『兵庫県立考古博物館研究紀要』第7号より62	

あとがき

図版

写真図版

図版目次

- 図版 1 西条古墳群位置図
図版 2 1～4号墳と周辺の地形測量図
3号墳 石室実測図
図版 3 1号墳 石室実測図
図版 4 2号墳 石室実測図
図版 5 4号墳 石室実測図
図版 6 5・6号墳と周辺の地形測量図
5号墳 石材残存状況図
6号墳 石室実測図
7号墳 石室実測図
図版 7 9・10号墳と周辺の地形測量図
9号墳 主体部実測図
12号墳 石室実測図
図版 8 10号墳 主体部と付設排水路実測図
図版 9 13号墳 a・b 主体部実測図
14号墳 石室実測図
14号墳 墳丘断面実測図
図版 10 21・25号墳と周辺の地形測量図
21号墳 主体部（イ～ヘ）検出状況図
図版 11 21号墳 家形埴輪他出土状況図
21号墳の2小石室実測図
21号墳の3小石室実測図
図版 12 25号墳 主体部（1～3）実測図
25号墳 墳丘断面図
図版 13 31号墳 石室実測図
31号墳 墳丘測量図
32・34号墳 墳丘測量図
34号墳 墳丘断面図
図版 14 34号墳 石室実測図
図版 15 35・36号墳 墳丘測量図
35号墳 石室実測図
36号墳 石室実測図
図版 16 37・38号墳 墳丘測量図
37号墳 主体部実測図
38号墓 壺棺出土状況図
38号墳 主体部実測図
38号墳 墳丘断面図
図版 17 39号墳 石室実測図
図版 18 40号墳 墳丘測量図
40号墳 主体部実測図
51号墳 主体部（箱式石棺）実測図
図版 19 53号墳 墳丘測量図
53号墳 主体部実測図
58号墳 墳丘測量図
58号墳 石室実測図
59号墳 主体部実測図
図版 20 60号墳 墳丘測量図
60号墳 主体部実測図
60号墓 土器棺出土状況実測図
61・61の2号墳 墳丘測量図
61号墳 小型石室実測図
61号墳の2石棺実測図
図版 21 1・2号墳出土土器実測図
図版 22 4・6号墳出土土器実測図
図版 23 7・11・13・14号墳出土土器実測図
図版 24 21号墳出土土器（1）実測図
図版 25 21号墳出土土器（2）・円筒埴輪実測図
図版 26 22・23・25(1)号墳出土土器実測図
図版 27 25(2)号墳出土土器実測図
図版 28 29号墳出土土器実測図
図版 29 30・31・32・33・34号墳出土土器実測図
図版 30 35・36・38・39・40号墳出土土器実測図
図版 31 41・58号墳・無注記土器実測図
図版 32 出土須恵器拓影
図版 33 土師質亀甲形陶棺片実測図
図版 34 出土金属製品実測図（1）
図版 35 出土金属製品実測図（2）
図版 36 出土金属製品実測図（3）
図版 37 出土金属製品実測図（4）
図版 38 出土金属製品実測図（5）
図版 39 出土弥生中期土器実測図
図版 40 出土弥生後期土器実測図（1）
図版 41 出土弥生後期土器実測図（2）

写真図版目次

写真図版 1	1号墳石室	写真図版 11	25号墳第1主体と土器群
写真図版 2	2号墳石室		31号墳石室
	3号墳石室		34号墳石室
写真図版 3	4号墳石室	写真図版 12	35号墳石室
写真図版 4	6号墳石室		37号墓壺棺出土状況
写真図版 5	7号墳石室		39号墳石室
	9号墳主体部	写真図版 13	40号墳主体部
	10号墳箱式石棺出土状況		40号墳主体部鉄器出土状況
写真図版 6	10号墳箱式石棺人骨出土状況		51号墳箱式石棺
	10号墳石棺内鉄器出土状況		52号墓主体部検出状況
	10号墳付設排水路出土状況	写真図版 14	52号墓小石櫛と壺棺
写真図版 7	12号墳石室		52号墓壺棺出土状況
	13号墳箱式石棺		60号墳主体部
写真図版 8	14号墳石室	写真図版 15	1・2・6・14・34・58号墳出土土器
	21号墳主体部	写真図版 16	21号墳出土土器
写真図版 9	21号墳主体部	写真図版 17	21号墳出土家形埴輪・23号墳出土土器
	21号墳土器群出土状況	写真図版 18	25号墳出土土器
写真図版 10	21号墳主体部と家形埴輪出土状況	写真図版 19	29号墳出土土器



土器実測（西条会館） 2018.8.31

第1章 実測調査の経緯と経過

加古川市神野町西条に所在する西条会館には、昭和38年から39年にかけて兵庫県宅地開発課の実施する神野団地造成に伴う発掘調査によって出土した遺物が保存・展示されている。この団地造成地には、かつて40基以上の古墳が存在していたことから西条古墳群発掘調査団が編成され発掘調査が行われることになった。その調査成果は、調査団によって『西条古墳群調査略報』として、昭和39年にその概要が公表された。その後、調査団から古墳群の詳細について調査報告書が出されることがないまま、60年が経過した。発掘調査によって出土した遺物は、遺物整理調査するために調査団の調査員のもとにあったが、様々な経緯を経て、出土遺物のみ西条町内会の西条会館に返却され保存されてきた。

西条古墳群は、加古川下流域の古墳文化を考える上で重要な跡とと考えられている。東播磨地域を中心とする地域史研究を続けている東播磨地域史懇話会の考古部会では、このような貴重な考古遺物が調査されないまま埋もれてしまうことに危惧を感じ、何とか土器実測だけでもできないかと考えていた。平成30年5月に西条町内会に実態把握のための実測調査ができるか打診したところ、西条町内会より「西条会館の遺物を何とか現在に生かしてほしい。」との意向を受け、実測調査に向けての準備を開始することになった。

調査を開始するにあたって、昭和38・39年に発掘調査を担当された方々に、遺物を実測の了承を得る必要があると考え、当時の主な調査員の方々に郵送で確認したところ、多くの方々より土器実測調査の了承を得ることができた。これを受け、考古部会として実測調査を開始することになった。

西条古墳群から出土した遺物は、西条会館の2階のロビーの3つのガラスケースに108点が展示されている。さらに、会館内の別棟倉庫に木箱で42箱の遺物が保存されていた。なお、西条52号墓出土遺物については、現在、県立考古博物館に寄託されている。

調査は、西条会館の展示ケースの遺物実測から始め、未整理の木箱が保管されていた倉庫内の遺物の洗浄・乾燥から遺物台帳づくりを行っていった。その後、台帳をもとに木箱内の遺物の実測を行っていった。各古墳の出土遺物の実測が進む中で、遺物が出土した古墳の遺構との関連を知る必要を感じていたが、その時点では遺構図などの所在は明らかではなかった。その後、各古墳の遺構実測図や写真等の記録が元調査員の自宅に保存されていることが明らかになり、皆様のご尽力により遺構実測図・遺構写真・調査日誌を譲り受けることができた。その結果、出土遺物と遺構図・写真・調査日誌とを照合しながら各古墳の実態を検討することができるようになった。これらの諸資料は、発掘調査時の調査員が詳細に記録されたものであり、唯一当時の状況を知ることができる貴重な資料である。私たちは、出土遺物を実測しながら、当時の遺構図と遺構写真などを照合させつつ、西条古墳群の調査報告書としてまとめることができた。

(山本祐作)

実測調査参加者

東播磨地域史懇話会 考古部会

(岡本一士 上月昭信 田中幸夫 友久伸子 森内秀造 山本祐作)

平尾英希 奥村孝子 中島愛理 萬代和明

なお、その他本報告書作成実務にあたっての外部協力者・協力機関は以下に記す通りである。

兵庫県立考古博物館 加西市教育委員会

永井信弘・新山王涼太・岩本めぐみ(安西工業株式会社) 田中清美

第2章 周辺の歴史と環境

1. 加古川の地域を捉える

地域の歴史の経過を縦軸と横軸の時間で考えれば、地域はその場所で時間が経過していく縦軸と、中心から波紋が広がるような波の横軸との交差点にあると言えるのではないだろうか。地域の縦軸だけに重点を置くと、それは閉鎖性の強い地域史となり、また縦軸の広がりを意識して記述すれば、逆に地域の独自性が希薄なものになる。このように地域の縦と横の時間軸を総合的に把握しなければ、地域史の表現に歴史的相違を生むことになる。とくに古代の地域の動向は、現在にまで及ぶ歴史の原点であり基層でもある記述には難しいものがある。この地域の動的な脈動感を表現することは、加古川についていえば、これは大河「加古川」が育む地域とは何かということにも繋がるものである。

さて「加古川」によって形成される地域は、古代にあってはその川の両岸に多くの遺跡と古墳群が生まれてきた。とくに加古川市域に形成された古墳群は、地域の開拓の足跡を顕著に示している。とくに加古川の東岸に古墳群が集中することは、西岸にいたして歴史的波動の力学が異なっていたとも考えられる。これは、この時に「加古川」を挟む東西という二つの地域が誕生したことである。「加古川」はその下流域を二つの地域に分ける境界であったのである。現在の加古川市は、この二つの地域が合体しているが、その基層には歴史的形成過程が埋没しているのである。この道筋を解明する材料として、西条古墳群の調査研究の意義があり端緒があるといえよう。

2. 旧石器時代から縄文時代へ

加古川が形成した沖積平野には、その複雑な流れと微高地があり、平野部の背後には山地が迫っている。ここに種々な時代の人々の営みの痕跡一遺跡がある。そして今、私はその場所に住んでいる。加古川の平野部が現在のように広くなかった二万年前から、人々は山地とその丘陵先端部を生活圏にし、狩りや木の実採集を中心に日々営んでいた。その場所では人達の使った石器が出土している。これを旧石器時代と呼んでいる。代表的な遺跡には、志方町西新池遺跡、岡山遺跡や平岡町の山之上遺跡がある。時代が経過し、彼らは一つの集団を作つて台地上に定着した。この定着した集落周囲の季節の移り変わりの中で、狩りや木の実の管理と採集を定期的に繰り返し、それらを食用に土器を使って料理し暮らしていた。この時代を縄文時代という。この季節の移ろいとともに暮らす日々の生活は、7000年ほど続いている。加古川市内では、八幡町宮山遺跡に住居の痕跡が残されている（遺跡分布図参照）。

3. 弥生時代から古墳時代へ

弥生時代が始まることが、加古川の二つの地域の誕生である。紀元前500年頃に稲作が伝わり、加古川の西神吉町岸遺跡が初期の集落である。その当時の人々は稲作の水田を作りやすいように、沖積平野部に生活の場を造り、集落を営んだ。今までの山に囲まれた自然環境に依存した生活から、今度は自分達が稲という植物を栽培管理する生活が主になった。それは、春に種をまき秋に刈り取り、次の年もこのサイクルが繰り返されていく。生活の中に季節感がより身近なものになった。

弥生時代の中頃になると、集落の人口も増え、集落の領域も拡大した。この時代の遺跡は、加古川の西側に東神吉町砂部遺跡、志方町東中遺跡、加古川の東側には加古川町美乃利・溝之口、野口町坂元遺跡が代表的な集落跡として知られている。現在の加古川は、これらの集落が基礎となって発展してきたといえよう。

砂部遺跡から出土した器台、これは西の吉備地域に通じる形態が見られる。それに対し、東の溝之口遺跡出土の土器は、壺に線刻を多用し、土器技法に美を見せている。その土器は薄く仕上がり、洗練さ

れた技法で作られている。砂部遺跡の土器は、紋様も少なく器も厚手に仕上げている。そして、ここで注目されることは、それぞれの遺跡からは、この東西の遺跡の土器が混在して出土する状況はない。土器の出土が示すことは、東西の地域色に独自性があったことを推測されるのである。

弥生時代の集落の領域は、弥生時代後期に造られた墳墓から知ることができる。集落では、稲の作付や水路の管理の指示、他の集落との関係調停を行う代表者が選ばれた。彼は、集落の暮らしを順調管理するために選ばれた人である。彼が亡くなると、その人の墓が集落から離れた丘陵上に作られた。墳墓は、西では、神吉山、平荘の山地、東では西条の丘陵に造られた。この墳墓と遺跡の距離は3~4kmであり、これを半径とする範囲、これが一つの集落が管理する領域であったと考えられる。

この時代の墓は円形に盛り土をし、墳丘墓と呼ばれている。加古川西岸では、神吉山5号墓、また都台古墳群や上荘町見土呂の八ツ塚古墳群の3号墓があり、加古川東岸では西条古墳群52号墓である。そして、集落の人達は、自分達の代表への最後の奉仕として、さらに大きな墓—前方後円墳を造り葬った。古墳時代の始まりである。

加古川の東西は、集落で使用される土器に相違があるものの、集落が拡大し墳丘墓をつくるという同じような展開が見られる。しかし、次の古墳時代になると、この東西の地域異相が顕著になる。それは、加古川東岸の日岡山古墳群と西条古墳群が形成されたことである。とくに西条古墳群の研究は、その地域異相を考えるうえでの重要な古墳群であるといえる。

(岡本一士)



加古川市内の主な遺跡分布図 S = 1:100,000

第3章 加古川下流域の古墳群と西条古墳群

加古川下流域で古墳時代になると、日岡山丘陵には、5基の前方後円墳と3基の円墳が築かれる。調査された古墳がないため、埋葬形態など不明なことが多いが、東車塚古墳や南大塚古墳から船載鏡の三角縁神獸鏡や石劍が発見されていることから、日岡山古墳群は古墳時代前期に築かれた古墳群であると考えられている。その中で日岡山の最高所にある日岡陵古墳は、全長99mの規模をもつ前方後円墳で、日岡山古墳群のなかで一番古く4世紀にさかのばるのではないかと考えられている。この古墳については、『播磨國風土記』に記載する景行天皇の后とされる船日太郎姫命を葬った墓に比定されている。このように日岡山古墳群は、日岡陵古墳を最古にして、長期間にわたり綿々と古墳を造り続けてきたことになる。この日岡山古墳群の被葬者たちは、副葬品から大和政権との強い結びつきをもっていたと考えられている。この日岡山古墳群も、北大塚古墳（中期の前方後円墳）を最後に大型古墳は築かれなくなる。

その後、5世紀代になると墓域を移したかのように西条の台地上に行者塚古墳、尼塚古墳、人塚古墳の大型古墳が築かれていく。行者塚古墳は、前方後円墳で、後円部より朝鮮半島などとつながりがある鉄製品が多く出土している。4世紀代の日岡山古墳群が大和政権と強い結びつきをもった古墳群であるのに対して、5世紀代の西条古墳群は、大和政権下で朝鮮半島などの結びつきをもった豪族に変化していることに注目したい。

日岡・西条の両古墳群の被葬者は同族であり、墓域のみを移動させたと考えることもできる。一方、両古墳群から出土した埴輪には、製作技法において継続性はないといわれることから被葬者は系譜を異にすると考えることもできる。このような日岡から西条への墓域を移動したような現象は、加古川地域だけでなく、大和やその周辺地域でもみられ、大和政権における権力構造の変化に連動しながら地方豪族の栄枯盛衰を映しているのではないかと考えられている。

一方、西条古墳群内の埴丘形態にも変化が認められる。行者塚古墳は全長99mの前方後円墳であるが、尼塚古墳、人塚古墳は造り出し付円墳（帆立貝式古墳）と埴丘形態を変化させている。このような4世紀末から5世紀末にかけての古墳群では、有力な階層には前方後円墳を採用するが、5世紀中ごろになると造り出し付円墳や大型円墳を築くようになる。それは、古墳群の造営が階層性をもって築かれていたことや時期経過とともに豪族の身分秩序にも変化があったことのあらわれとも考えられている。

行者塚古墳

行者塚古墳の名の由来は、かつて墳頂に行者堂が建っていたことから付けられた名前といわれ、地元では「調子塚」とか「一本松古墳」とも呼ばれていた。墳丘の全長が99m、後円部径68m、後円部の高さ9.1mで、市内最大の前方後円墳である。墳丘は三段築成で段のテラス上には総数2,500本以上の円筒埴輪をめぐらせている。また、朝顔形埴輪、形象埴輪も出土している。さらに、墳丘の斜面には葺石を貼り付けていた。墳丘裾部の4か所で「造出し」とよばれる祭祀跡がみつかっている。そのなかで墳丘西のくびれ部でみつかった造出しあは、上面に方形に円筒埴輪を並べ、その中央部に祭殿と思われる家形埴輪を配置し、その前で、高壇や籠状土器



行者塚古墳の造出し部の復元埴輪

と共に土で作った魚や木の実などの供物が置かれていた。墳丘北東の造出しでは武具の埴輪もみつかっている。このような造出しの状況は当時の死者に対して行っていた古墳のまつりの痕跡とされている。さらに後円部の墳頂からは、鉄製馬具や鉄鋤、鉄斧、帶金具、巴形銅器、鉄刀、鉄剣、農具などが出土している。これらの副葬品には、中国の西晋時代に自分が求められる帶金具や朝鮮半島との繋がりを示す鉄製馬具や鉄鋤などが含まれ、国際色豊かな副葬品をもっていたことがわかった。

人塚古墳

白鳳期の寺院とされる西条庵寺に隣接して築かれている古墳で、墳長61.5m以上、円丘部径61.5m、高さ10.4mで、西側に大型の突出部がつく造り出し付円墳である。さらに、最近の調査で、大型の突出部の近くに小型の突出部も付くことが確認されている。墳丘の周囲は幅約10mの周溝をめぐらしていた。墳丘は2段で構成され、基底部には、竜山石の割石を貼りつけ上部には川原石を貼りつけていた。墳丘の1段目には円筒埴輪列が確認されている。この古墳からは円筒埴輪とともに家形埴輪や盾形埴輪も確認されている。主体部は調査されてはいないが、出土した埴輪などから、行者塚古墳に続く時期に築かれた首長墓と考えられている。

尼塚古墳

尼塚古墳は、行者塚古墳と人塚古墳の間に位置する古墳で、墳長が51m、円丘部径約45m、高さ6m、南側に長さ7m、幅13m、高さ1.2mの造出しがついている。墳丘の周囲には幅7~8mの周溝をめぐらしている。墳丘は2段で構成され、2段目には葺石が施されていた。葺石は上段に川原石を中心にして、基底部には、竜山石を用いていた。さらに墳丘の1段目には埴輪列が確認されている。また形象埴輪の存在も確認されている。これらの出土した埴輪などの観察から西条古墳群の首長墓として最後に築かれた古墳と考えられている。

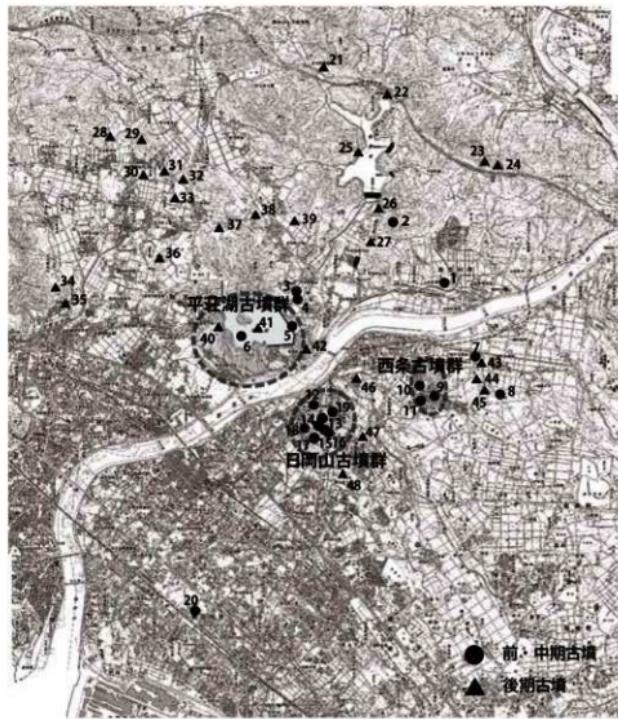
(山本祐作)



人塚古墳全景



尼塚古墳全景



加古川市内の主な古墳

- | | | |
|-----------|------------|------------|
| 1 長慶寺山古墳群 | 17 狐塚 | 33 二子塚古墳 |
| 2 天坊山古墳 | 18 勅使塚 | 34 志方西山大塚 |
| 3 里古墳 | 19 北大塚 | 35 辻古墳群 |
| 4 西山大塚 | 20 聖陵山古墳 | 36 神吉宮山古墳群 |
| 5 池尻2号塚 | 21 野尻古墳群 | 37 塚山古墳 |
| 6 カンス塚 | 22 奥新田古墳群 | 38 広尾二塚古墳 |
| 7 宮山大塚 | 23 カメ焼谷古墳群 | 39 八ツ仏古墳群 |
| 8 東沢古墳群 | 24 神子ヶ谷古墳群 | 40 升田山15号塚 |
| 9 行者塚 | 25 中山古墳群 | 41 池尻16号塚 |
| 10 人塚 | 26 上原古墳群 | 42 地蔵寺古墳群 |
| 11 尼塚 | 27 上原古墳 | 43 八幡宮山古墳群 |
| 12 日岡陵 | 28 西中古墳群 | 44 成福寺古墳群 |
| 13 西大塚 | 29 天神山古墳群 | 45 新池古墳群 |
| 14 南大塚 | 30 志方大塚 | 46 神野二塚古墳群 |
| 15 西車塚 | 31 志方宮山古墳 | 47 石守古墳群 |
| 16 東車塚 | 32 石打山古墳群 | 48 水足古墳群 |

第4章 西条古墳群発掘調査の経緯と経過

西条古墳群の発掘調査の経緯や経過について書かれたものは調査団から発行された「西条古墳群発掘調査略報」(注1)や、調査参加者が書いた「発掘調査日誌」(注2)、責任ある立場で調査に参加された方が発掘の「契機と調査体制」を書かれたもの(注3)があり、直接、筆者も調査参加者から経緯、経過を聞き取ったことがあるので、これらをもとにそれを述べてみたい。

西条古墳群が破壊の危機にあることを最初に認識したのは葛野豊氏であった。葛野氏は兵庫県庁で加古川市神野町西条の台地一帯の開発計画を示す模型を見たことから、前年度（1962年度）の遺跡分布調査（兵庫県教育委員会主導）で加古川市域を担当した松本正信氏に遺跡の有無を確認した。松本氏から工事予定地には4基以上の古墳があることを聞いた同氏は関西学院大学の武藤誠教授に問題を提起し、武藤氏の努力で急速発掘調査することになった。発掘の費用は原団員（兵庫県）負担、調査団長は武藤誠氏、この呼びかけに応じて調査に参加した方は兵庫県文化財問題協議会（略称兵文協）メンバーと関西・関東の大学の学生、高校生ら45名以上にのぼった。調査担当者のうち武藤氏から現場を任せられたのは葛野豊、是川長、松本正信他であった。

この調査は、兵庫県宅地開発課の実施する神野団地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査であった。発掘調査は昭和38年12月25日から昭和39年1月12日頃まで第一次調査が行なわれた。

年末のあわただしい時期に地元の永昌寺に強引に宿舎を提供して頂き、また、食事から風呂までお世話になった。調査責任者達は勤務しながら学校の冬休みを利用して始めた。調査は一次調査だけでは終わらず、昭和39年3月10日から4月18日まで第二次調査が春休みを利用して行われた。この時も永昌寺に宿舎を提供して頂き、また、食事から風呂までお世話になった。調査初日の昭和38年12月25日の夜には調査員で今回の調査の経過、調査の組織、目的、今調査の研究、問題点（古墳群と群集墳の関係、各理葬の相違、形態の究明、地域の究明について）を出し合うなど細かい打ち合わせの会議が行なわれている。調査団としてノートを購入して古墳毎に毎日、各自が日誌を作成するなどの申し合わせも行われたようである。調査は、先ず、近くに破壊されるであろう1号墳から7号墳までの調査にかかることにしている。なお、調査開始日の12月25日には兵庫県教育委員会文化財係の島田清氏も同行して現地の古墳を見回っているときに人塚古墳の外堤がブルドーザーで削られつつあることを発見し、島田氏に中止の手続きをとってもらったり、西条廃寺跡にもブルドーザーが入ってきた時も中止要請などを行ってもらったりしたことが日誌に記されている。

いずれにしても、昭和30年代の文化財保護行政は現在のように整備されておらず、自治体の対応も十分でなく、調査もされずに破壊されていく古墳を見て調査参加者の悔しさや悩みも多かったものと思われる。結果的には調査団として約40基の墳丘墓や古墳の発掘調査を行い、図面も作成され、遺構写真も撮られ、遺物も保管され、これらが関係者の責任ある対応で今日まで保管されていたことから今回の我々の調査報告につながったものである。

（上月昭信）

注1 1964年「西条古墳群調査略報」西条古墳群発掘調査団

注2 1963年「発掘調査日誌」西条古墳群発掘調査団

注3 2009年2月松本正信・加藤史郎「附・特別報告 兵庫県加古川市西条52号墳発掘調査の記録」

『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究集会実行委員会

第5章 西条古墳群の各古墳について

発掘調査団は古墳の所在する地形からA群、B群、C群、D群の4群に分類してそれぞれ群ごとに古墳の番号をつけている。

A群は、大型古墳や寺院址の北側に、小さな西向きの谷を隔てて、ほぼ東西にならんで点在する西条古墳群で最も南に位置する。A群には1号墳～14号墳がある。

B群は、この台地の中央部に存する墓地の中に一群の古墳が分布しており、これをB群としている。この群には21号墳～30号墳である。調査不能の古墳もあり、主体部が不明の古墳もある。

C群はB群の北、台地に切り込んだ西向きの小さな浸蝕谷の北側に東西に点在する一群を呼び、C群には31号墳～39号墳がある。

D群はこの台地の一一番北にある小さな谷を利用して、西条と中西条を結ぶ道路が開削されており、この掘削の道路北側と南側に所在する一群の古墳をD群とする。D群には40号墳～60号墳がある。

なお、本報告では中世の鐵骨器と土壤墓群が確認されたE群を除外している。

今回、この調査団から発行された『西条古墳群発掘調査略報』(1964) や当時の調査日誌、発掘調査時の実測図、写真、今回、我々が新たに実測した遺物実測図もあるので、これらをもとに西条古墳群の各古墳を群ごとに説明する。なお、記述に当たって主に引用した上記『発掘調査略報』については文中で「略報」と記すこととする。

第1節 A群の古墳

発掘調査の結果、A群で古墳と確認されたものは、1・2・3・4・5・6・7・9・10・12・13・14号墳の12基である。

このうち最も東の1号墳から南西に向かって2号墳、3号墳、4号墳の順に並んで所在していた。発掘調査の結果、古墳ではなく欠番となったのは8号墳と11号墳である。

1号墳（図版2・3・21・写真図版1・15）

略報によれば、「本群集墳中最も南端位に位置する。その位置のせいかやや目立つ程度に封土が残存していた。主体部は普通の無袖横穴式石室。主軸の長さは6.40m、幅1.80m、封土の遺存状況に比して石室の遺存状況は良好でなく、奥壁で2段、側壁も2段しか残っていなかった」と記されている。

墳丘は大きく改変されており、地形測量図（図版2）から判断して径10m程度の円墳であったと推測される。石室実測図（図版3）から無袖式の横穴式石室墳で、奥壁は2段（高さ1.60m）残存しており、側石は場所によっては4段ほど残存していたことがわかる。石室の長さは8.70m、石室の幅は奥壁部で1.68m、中央部で1.90m、羨道部で1.70m、側壁の高さは奥壁部で0.95m残存していた。

石室の1段目は比較的大きな割石（幅0.6～1.0m、高さ0.3m～0.5m）を積み、2段目より上はそれよりやや小さい割石を積み上げて石室を構築している。

出土遺物には、須恵器と鉄器、金環がある。（図版21・34）

須恵器は环Hの蓋と身、高环、長頸壺、壺、甕などがあり、鉄器には刀子1、刀子片（？）1、鐵鎌片（？）1、があり、耳環も1点出土している。

時期は「陶邑編年」（注2）のTK217形式、「中村編年」（注3）のII形式6段階、「都城の土器集成」（注4）の飛鳥II形式、時期は川原寺創建（655年）以前でそう遠くない時期、7世紀第II四半期と思われる。

2号墳（図版2・4・21・34・写真図版2・15）

略報によれば、「1号墳と裾を接して存在する古墳であるが、調査の結果より見ると、周辺の開墾に墳頂部を削平されており、裾部は相当埋められているようであった。主体部は本群集墳通有の無袖横穴式石室で、奥壁前幅1.40m、長さ6.20m。羨門閉塞装置が一部残存していたが、概して遺存状況は石室に関する限り、奥壁部の方が良好であった。しかし天井石は既になくなってしまっており、石室の原高は求めよしもないが奥壁の構造から推して、現存する高さ1.80mよりはさほど高くなく、或いは、この上に直接天井石が載っていたことも考えられる。床面には礫が敷いてあった。」と記されている。墳丘は地形測量図から判断して径10mぐらゐの円墳であったと思われ（図版2）、1号墳と裾を接していたのが開墾によって墳頂部は削平され、裾部も相当埋められていた。発掘調査の結果、周塙を持っていたことが確認された。

石室実測図（図版4）によれば横穴式石室で無袖式。石室の遺存状況は奥壁部のほうが良好で、天井石は失われていたが現存する側壁や奥壁の上に天井石が載っていた可能性が考えられた。石室は長さ9.50m、幅は奥壁部で1.50m、中央部で1.65m、羨道入口で1.65m、高さは奥壁部で1.80m、1段目は比較的大きな割石（幅1.0m・高さ0.5m程度）を並べ2段目から上はやや小さな割石を5段から6段積んでいる。羨道には閉塞石があり、床面には礫が敷かれていた。

なお、羨門付近に箱式石棺と思われる石材が存在し図面でも確認できた。薄く割った石を立て側石としており、両側に2石ずつ確認でき、小口にも1石を使用していた。このことから箱式石棺は幅0.50m、長さ0.90mまで確認できた。この箱式石棺にも遺体が埋葬されていたとすれば上記のものを含めると3体以上の被葬者がこの古墳に埋葬されていたことになる。

出土遺物のうち須恵器は環Hの身と蓋、高环、平瓶、長頸壺、環Aの身、椀、土師器甕がある（図版21）。また、金属器には鍔1、刀子2、刀子片2、鉄釘8、鉄釘片11?、耳環2が出土している（図版34）。耳環は2ヶ所から出土していることや木棺に使用された釘の出土位置から2体以上の埋葬があつたものと考えられ、羨門近くの箱式石棺を併せれば3体以上の埋葬が行なわれたものと思われる。

時期は環Hの蓋と環G、土師器の甕は陶邑編年TK217形式、中村編年のII形式6段階、「都城の土器集成」の飛鳥II形式、時期は655年以前でそう遠くない時期、7世紀第II四半期、長頸壺は陶邑のMT21、飛鳥編年の飛鳥Vの8世紀前後、椀は平安時代のものと思われる。

3号墳（図版2・写真図版2）

略報には「南向の無袖横穴式石室。封土は耕作のため既に失われていた。奥壁部1.34m、羨道幅1.55m、長さ6.10m。天井石はなく、側壁も最も残存状態の良いところでも僅か2層程度しか遺存していない。遺物も既に殆どなくなってしまっており、石室内の隨所に骨粉、骨片、鉄器（釘、鐵）、須恵器片、土師器片が散乱しているに過ぎなかった。尚、床面一帯に割石がアトランダムに散乱していたが、これは敷石とは異なるようであり、後世の所産と思われる。」と記されている。

墳丘は耕作のため既に失われていたが、図版2の敷地の範囲からして径10mぐらゐの円墳と思われた。発掘調査の結果、横穴式石室で無袖式（図版2）。石室は長さ6.20m、幅は奥壁部で1.35m、中央部で1.50m、羨道部入口で1.55mである。側壁は1段目と2段目の一部が残存しており、高さは0.4～0.6mほど残されていた。石室の天井石は失われ、奥壁は1段目が残されており中央に幅10m、高さ0.4mの比較的大きな石を置きその両側にそれより小さな割石（幅0.2m、高さ0.4m）を置いて奥壁の1段目とする。側壁は1段目と2段目がかろうじて残存しており、1段目は奥壁に近い部分に比較的大きな割石（幅0.5～0.6m、高さ0.5mぐらゐ）を使用しており、側壁は石室入口付近は幅0.6～0.7m、高さ0.1～0.2mの扁平な石材を使用しており玄室相当部分と羨道部分を区別しているような感を呈している。

石室内からは人骨片のほか遺物として鉄釘片8?、不明鉄器片2?が出土している（図版2）。

4号墳（図版2・5・22・34・写真図版3）

略報には「本群集墳中21号墳（方形墳）と並ぶ最大の規模を持つ古墳で封土径約15mを測る。また、横穴式石室の構造を遺存する点で唯一のものである。石室は南向きで玄室の奥壁幅2.10m、高さ1.85m、奥行4m、側壁は小さな割石を巧みに積み高さ1.85m、羨道部は数次の盗掘により天井石を失っており、もとの高さは不明である。両袖式で、袖幅は東側19cm、西側20cm、羨道の幅は1.78m、長さ5mである。床面には一面に礫を敷きつめており、朱が散乱していた。玄室内やや西よりに組合せ式家形石棺の底石と蓋石が存する。側石は抜き取られ破片さえ残っていないかった。」と記されている。

地形測量図（図版2）から21号墳と並ぶ最大の規模を持ち徑20mの円墳であったことが知られ、墳丘の東側と南側に盗掘痕が2カ所に見られた。石室実測図（図版5）によると、この古墳は南向きの横穴式石室墳で、西条古墳群の中では珍しく両袖式であった。石室は全長9.50m、玄室は長さ4.25m、幅は奥壁部で2.0m、玄室入口で2.25m、羨道部は長さ5.25m、幅は羨道入口で1.66m、玄室入口で1.80m、高さは奥壁部で1.90m、玄室入口で1.66mであった。袖部の幅は東側0.19m、西側0.20mであった。

奥壁の石材は1段目に幅2.0m、高さ0.75mの石材を1石置き、その上の2段目に幅1.3m、高さ0.6mの割石と幅0.45m、高さ0.4mの割石を2石積んで2段目とし、1段目と2段目のすき間を埋めるように小角礫を詰める。3段目は幅0.9m、高さ0.2mの石材と幅0.6m、高さ0.2mの扁平な石材を載せる。4段目からは天井石が乗せられるように小石材を用いている。側壁は1段目にある程度大きい割石を用いるが2段目以上は小さな割石を巧みに積む。

羨道と玄室の境界に高さ1.1m、幅0.25mの石が立てられていた。なお、図面には羨道入口付近のみに礫が敷かれている様子が描かれているが、この4号墳の図面には奥壁とか玄室左側石などが省略されており、略報では「一面に礫を敷きつめており、朱が散乱していた。」と記されていることから床面一面に礫が敷かれていたものと思われる。

なお、玄室内に石棺が置かれており、組合式石棺の底石（幅1.2m・長さ2.0m）と蓋石（幅1.0m・長さ2.1m）の2石が置かれていた。これら石棺は周辺の公園に置かれて保存されている。

遺物は略報では「若干の須恵器片」とあるが、最終的には国版22にあるように須恵器では环Hの身、环G、高环、平瓶、長頸壺、环B、台付短頸壺など多くが出土している。また鉄器は鉄刀片1、鉄釘片(?3)、鉄滓3がある。時期は陶邑編年のTK217形式～MT21形式、中村編年のII形式6段階～III形式2段階で、7世紀初めから7世紀後半の時期に相当すると思われる。また、製鉄と関係のある鉄滓が出土しており、古墳の被葬者の性格を考える上でヒントになる遺物である。

5号墳（図版6）

5号墳は略報によれば「我々が気付いた時は既にブルドーザーにかきまわされて局部的に石が残存している程度に過ぎず、構造、その他は不明。」とされている。5号墳は6号墳の東側に所在していた古墳で、周辺の地形測量図（図版6）から墳丘は円墳で徑10mほどだったと思われる。石材残存状況図（図版6）から幅1.4m・長さ2.0m以上の横穴式石室墳であったと想定されるが、遺物は採集されなかった。

6号墳（図版6・22・写真図版4・15）

6号墳は4号墳をとりまくように分布していた低平な古墳の一つとされる。地形測量図（図版6）から4号墳の北西に位置し5号墳の西側に所在し、墳丘は円墳で徑10mほどだったと思われる。

略報では「開墾のため奥壁は既に存在せず、抜き取られたあとが認められるにすぎず、側石も高さ1m程残っているのが良い方で、破壊著しい。石室の全長を推定すると長さ6.02m、奥壁幅1.30m、石室中央部1.55m、袖は存在せず、羨道部幅1.50mであった。羨門に近い程、残存状況が良く遺物も土器などの主だったものは石室の前半分から出土している。敷石（礫）あり」と記されている。

石室実測図（図版6）にあるように6号墳は無袖の横穴式石室墳であった。図面を精査すると石室の

全長は 5.80 m、石室の幅は奥壁部で 1.30 m、石室中央部で 1.55 m、羨門部で 1.40 m である。石室中央の床面に礫の敷石がある。

石室の奥壁は 1 段残っており、幅 0.7 m の石材と 0.4 m の石材が 2 石残存していることから奥壁の 1 段目は 2 石だったと思われる。また、側壁は高さ 0.95 m ほど残っており、1 段目は 10 個の石を並べ石室を構築する。1 段目の石材は幅 0.3 ~ 0.95 m、高さは 0.10 ~ 0.35 m の割石で扁平なものが多い。2 段目以上も同様な石材が使用されており天井部に近づくほど小さな割石が使用されている。

遺物は須恵器と土師器、鉄器片が出土している（図版 22）。須恵器は環 H 蓋、環 G 身、平瓶がある。土師器は甕などがある。鉄器は刀子 1 が出土している。

時期は陶邑編年の T K 217 形式相当の時期で、中村編年の II 形式 6 段階、飛鳥編年の飛鳥 II ~ III の 7 世紀中頃前後の時期に相当すると思われる。なお、鉄片も若干出土している。

7 号墳（図版 6・23・写真図版 5）

略報によれば「封土はこの地点が開墾された時に破壊されつくしており、僅かにそれと認められる程度、石室は南向きの横穴式石室であるが、既に奥壁を抜き取られてしまつておらず、石室の規模は不明であるが現存する部分は幅 1.20 ~ 1.35 m、長さは 4 m である。側石は最も良く残っていた所では四段位あったが遺物は既に消滅してしまつておらず、一物も認められなかつた。」と記されている。しかし、後述のように須恵器が出土している。

石室実測図（図版 6）によると横穴式石室で石室は破壊されており、規模は不明であるが、現存する部分の幅は奥壁部に近い所で 1.35 m、石室入口に近い部分で 1.20 m、長さは 4.0 m であった。出土遺物はすでに消滅してしまつておらず、石室の石材の大きさは 1 段目は幅 0.30 ~ 0.65 m、高さは 0.2 ~ 0.4 m の比較的小さい割石を置いている。2 段目から上も同様の大きさの割石を使用している。

出土した須恵器は環 H 蓋、環 G 蓋、環 G 身、長頸壺がある（図版 23）。鉄器は刀子 1 が出土している。時期は陶邑編年の T K 217 形式、飛鳥編年の飛鳥 III 形式と思われ、7 世紀中頃から少し後の時期と思われる。

9 号墳（図版 7・9・写真図版 5）

9 号墳は略報には「台地の西の縁辺部に位置していた円墳で、径約 17 m と推定されたけれども、はなはだしく封土を流失しており、ために、主体部の構造も大半損壊しているが、割竹形の木棺を直葬したものであることが、朱の痕跡をのこした棺底に接する床面の検出により判明した。墳丘は位置的に言つても、主体部構造の上から言っても他の群集墳中の古墳よりは一時期古い形を示すものと考えられるので注目に値する。木棺の長軸約 4.08 m、幅 0.8 m 以上。遺物は棺底より鉄刀 1、鉄鎌 1、鉄砲 3」と記されている。

9 号墳は地形測量図（図版 7）から墳丘の径は 17 m と思われ、当古墳群中、比較的大きな墳丘を持っていた。図版 7 の「9 号墳主体部実測図」や写真図版 5 の「9 号墳主体部」の写真から主体部は割竹形木棺を直葬したもので、長軸 4.08 m・幅 0.8 m で割竹木棺としては小さな規模である。

棺底に朱の痕跡があり遺物は棺底から鉄刀 1、鉄鎌 1、砲 2?、不明鉄器片 2 が出土している（図版 35）。

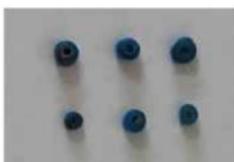
10 号墳（図版 7・8・35・写真図版 5・6）

略報には 10 号墳は「9 号墳のすぐ北隣の古墳で封土は同様流出していたが径約 14 m と推定された。主体部は良好な粘土でまかれた完全な箱式石棺であった。棺の大きさは長さ 1.60 m、幅 0.50 m で内部には大略完全な形で人骨が遺存していた。被葬者は 20 才前後の女性。副葬品には鉄鎌、鉄刀、刀子、鉄斧、玉類（小玉）があった。尚、棺内には朱が一面に付着しており、棺底に小礫がしきつめてあった。又棺

外には礫をならべて作った排水溝が台地の中心の方向（東）に向かって築造されていた」とある。

周辺の地形測量図（図版7）からみて墳丘の径は不明である。箱式石棺の大きさは図版8の「10号墳主体部実測図」から長さ1.95m、幅は頭蓋骨の付近で0.50m、足元付近で0.40m、棺内には朱が一面に付着しており、棺底に小石が敷き詰めてあった。また棺外には石棺の足元の左外側から台地の中心方向（東）に向かって、礫をならべて作った排水溝が長さ2.8mにわたって構築されていた（図版8）。

現時点において棺内の足元に確認されている鉄製品は、、、鐵鎌4、刀子1、不明鉄器片2であるものの、図面や写真から判断すると、このほかに鐵刀もしくは鉄劍とみられるものも副葬されている。玉（ガラス小玉）は遺体の胸部付近から出土した（図版8）。



10号墳出土ガラス小玉

12号墳（図版7・写真図版7）

12号墳は略報には「墳丘は僅かにそれと判明する程度のもので、径は不詳、主体部は南向きの横穴式石室（無袖）で奥壁部幅1.04m、石室の長さ3.70mを測る。奥壁に1枚石を立てて使用している他は極めて小さな割石を使用している。しかし、かつてここを開墾した節に邪魔になった石をことごとく抜きといったと言う村人の話の如く、石室の東側の側壁は抜き取られ、僅かに奥壁より80cm程前方までしか残っておらず、あとは地山の上に点々と抜きあとの穴があったのみである。このように甚しい破壊のため、遺物は一物も存在しなかった」と記されている。

石室実測図（図版7）からは、南向きの横穴式石室墳で無袖、奥壁の幅は1.0m、石室の長さは残存する石材も含めると3.8m、奥壁に1枚石（幅0.9m、高さ0.5m）を立てて使用している。他は極めて小さな割石を使用している。石室の東側の側石は抜き取られ、僅かに奥壁より0.8m程前方までしか残っていなかった。なお、著しい破壊のため遺物はなかった。

13号墳（図版9・23・写真図版7）

13号墳は略報には「僅かに残存した封土をたよりに発掘したが主体部はやや封土とははずれた所に2つ存在した。それをa主体、b主体と名づける。

＜a主体＞ 墳丘のやや中央に近いところに若干の割石が散乱していたが、これらは殆んどが原位置を示しておらず、そのうちの僅か2個のみが、石の抜きあとらしきものの方向と合致したのみであった。従って主体部構造などは全く不明である。

＜b主体＞ 半分程になってしまった箱式石棺で封土の裾に当る部分に存在、現存部は幅35cm、長さ71cm程度で底石があつたが、蓋石は勿論、遺物も存在しなかった。』とある。

13号墳の主体部は2カ所に存在し、墳丘の中央に近い所のものをa主体とされ、墳丘の裾近くのものがb主体とされた。

a・b主体部実測図（図版9）からするとa主体は基底部の石材の抜きあとから幅0.50m、長さ1.50mほどの石室が確認でき、b主体と同様の箱式石棺墓、あるいは小石槨墓であったものと思われる。側石には0.7～0.8m、高さ0.3mの割石が使用されていたが、遺物は出土しなかった。

b主体は遺構実測図から箱式石棺墓であったものと思われる。約半分が消滅していたが、石室の現存部は幅0.75m、長さは側石から1.50mである。側壁の石材に幅0.6m、高さ0.3mの割石が使われていたが、概報では遺物は出土しなかったと記されているが、甕の口縁部が出土している（図版23）。

14号墳（図版9・23・36・写真図版8・15）

14号墳は略報には「南向きの横穴式石室（無袖）。封土は僅かにそれと認められる程しか残存してい

なかった。奥壁幅 1.2 m、狭道幅 1.1 m、長さ 4.4 m、床面一面に礫を敷きつめており、奥壁付近の一部を除いて概して残存状況は良好。しかし、側壁はあまり良好な遺存状態とは言えず、天井石は全く存在していなかった。遺物としては須恵器（台付長頸壺 1、甕 1、壺 3、破片若干）、土師器（小壺 1、破片若干）、鉄器（釘 10 本、鉄片若干）が判明」と記されている。

石室実測図（図版 9）を見ると南東向きの横穴式石室墳で無袖、奥壁の幅は 1.2 m・狭道幅 1.1 m・長さ 4.4 m・床面全面に礫を敷きつめていた。石室は 1 段目には比較的大きな石を使用しており、奥壁は 1 石で幅 1.1 m、高さ 0.7 m の大きな石を使用し、側壁も幅 0.6 ~ 0.8 m、高さ 0.3 ~ 0.8 m の比較的大きい石を使用している。

遺物として図版 23 に示したように須恵器は、台付長頸壺・はそう・壺があり、土師器は小壺、破片若干があり、鉄器は釘が 8 本、鉄釘片 10?、不明鉄器片 1? が出土している（図版 36）。

須恵器の高环は陶邑編年で T K 217、飛鳥編年で飛鳥 II、中村編年で II 形式 6 段階、時期は 655 年以前でそう遠くない時期と思われる。

（上月昭信）

注 1 西条古墳群発掘調査団「西条古墳群調査略報」昭和 39 年 6 月

注 2 田辺昭三「陶邑古窯跡群！」平安学園考古クラブ 1966 年

注 3 中村浩「和泉陶邑窯の研究」1981 年

注 4 小森俊寛「都城の土器集成」古代の土器研究会 1992 年

第 2 節 B 群の古墳

A 群の北の高まり、21・25 号墳を中心 21-2・21-3・22・23・61・61-2 号墳が調査されている。

21 号墳（図版 10・11・24・25・36

写真図版 8・9・10・16）

1. 古墳の位置と墳丘

北の城山に連接するいなみの台地突端部のもっとも高所に構築されている。墳丘の頂部で標高 36 m である。当該墳の北側に隣接して 25 号墳が構築されている。古墳は一辺約 16 m、高さ約 3 m の方墳で、墳丘の東側は土取りにより失われている。

2. 墳輪群と土器群

(1) 調査日誌記載の埴輪出土状況
当該墳からは家形埴輪および円筒埴輪が出土しているが、これらの埴輪の具体的な出土位置について記録した図面は残存していない。そこで出土位置等の情報を求めて、まず、調査日誌の中から埴輪出土に関する記



円筒埴輪基部出土状況

述を下記の通り要点にして抜き出した。

12月30日：A、Dブロックで埴輪片出土。

1月3日：Dブロックより埴輪片多数と須恵器片出土。形の整った須恵器（器形未確認）を認める。

南辺の西トレンチで埴輪の基部又は大型土器を発見。

3月28日：Dブロックで発見された埴輪が家形埴輪であることが判明。

3月29日：家形埴輪の屋根が出土。その隣で意識的に置かれたと思われる須恵器甕や円筒埴輪を発見。

(2) 墓輪出土に関する整理

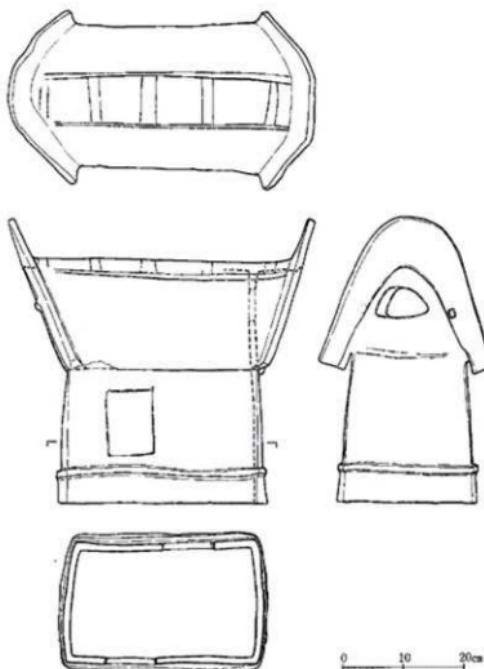
Aブロック出土埴輪

1月3日付調査日誌により、Aブロックすなわち墳丘の南側に円筒埴輪が配列されていたことがわかり、13頁の写真はその発見状況を示している。写真のみでは埴輪の配置状況までは読み取ることができないが、墳丘南側に埴輪が配置されていたことは明らかである。なお、「加古川市史」では「円筒埴輪が墳丘を巡っていたとみられる」と記述されているが、調査日誌・写真等の記録からは埴輪の出土箇所は中央部と墳丘南辺部にほぼ限定でき、埴輪が全体に巡らされている状況は想定し難い。

Dブロック出土埴輪

3月29日付調査日誌よりDブロックから家形埴輪と円筒埴輪が出土したことがわかる。家形埴輪（第1図）の出土状況は図版11に示した通りであるが、この家形埴輪の出土位置を記録した図面は残されていない。そこで、調査日誌の記録・写真資料を参考にして、出土位置等を割り出して作成したのが第2図である（※1）。その経緯を以下に記す。

まず、写真図版10の上段写真でハ主体トイ主体間の空間部から家形埴輪の一括破片が出土しているのが確認できる。この写真はCブロックとDブロック間の断面セクションを撤去し、家形埴輪を検出した状況を撮影したものであり、この状況から次のことがわかる。①家形埴輪がイ主体とハ主体の間の空間部に置かれていたこと、②家形埴輪はイ主体側に崩れ落ち、その一部は棺内上部に落ち込んでいた。③破片の一部はハ主体の検出面



21号墳 - 第1図 21号墳出土家形埴輪（『加古川市史』第4巻より転載）

に広がっていた（※2）。

次に、兵庫県埋蔵文化財包蔵地調査カードに「ホ主体部西から家形埴輪。封土からは円筒埴輪 須恵土師がぎっしり詰まっていた中に家形埴輪 皆こわれていた」との記述がある。後述の通り、家形埴輪と土器群等の出土状況については調査日誌との間に齟齬はあるが、ホ主体の位置は記録に残されていないので、この台帳の通りとすると、イ主体とハ主体間の空間部東寄りにホ主体が位置することになり、家形埴輪はイ主体・ハ主体との間、ホ主体の西側に位置することになる。

以上の状況から、家形埴輪等はイ・ハ・ホ主体の検出上面から出土しているので、これらの主体部のいずれかの埋葬時か、あるいはイ・ハ・ホ主体埋葬後に時を置いて設置されたかのどちらかとなる。家形埴輪以外に土器類の供獻も行われているが、同様の土器類の供獻については隣の25・29号墳でも行われており、埋葬後のある時点で何らかの供養儀礼が行われた可能性が高いといえる。

※1 主体部は6つある。しかし、遺構実測図は個々の遺構図は現存するものの、全体の配置図は見当たらない。ただ、調査日誌にホ・ヘ主体を除くイ・ニ主体4基の位置関係を示す略測図やセクション設定図が記載されており、これらを合成して第2図を作成した。従って、これはあくまでも模式図もしくは想定図であり、正確なものではない。

※2 Cブロック内にある遺構が先行して掘り下げられている。このためCブロック内にほとんどが含まれているイ主体はほぼ全掘されているのに対して、ハ主体はCブロックとDブロック間の断面セクションおよびDブロック域に広がる主体部は未掘の状態で、埴輪の破片の一部が遺構上面に広がっている。

(3) 土器群

兵庫県埋蔵文化財包蔵地調査カードには「封土からは円筒埴輪 須恵土師がぎっしり詰まっていた中に家形埴輪」と記述されているが、調査日誌にはそのような出土状況の記述は見当たらない。3月29日付調査日誌での「家形埴輪の隣での須恵器甕の発見」という主旨の記述および家形埴輪を取り上げた後の土器群の出土状況写真（写真図版9最下段）から土器群は家形埴輪の東に隣接した位置に置かれていたことが推測できる。土器群の詳細は第6章に譲るが、出土土器は須恵器が大半で、器種は杯類、高杯、甕類である。

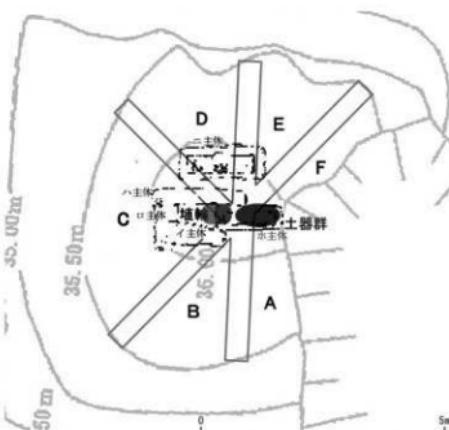
3. 主体部

イ主体

図版10の主体部実測図は調査日誌に「掘方を掘り下げ」と記述されていることから棺ではなく掘方と考えられる。従って、主体部の西端に副葬されている土器群の長胴甕は棺内に置かれたものか棺外に置かれたものかは判断できない。掘方の幅は東端で0.42m、西端で0.50m、長さ1.95mを測る。なお、棺内からは「略報」では鉄鋤先1、鉄片2が出土していることになっているが、これらの製品は確認できない。また、調査日誌および実測図面上でも記録されていない。

ロ主体

調査日誌では「2棺（イ主体とハ主体）を1棺（ロ主体）が切っている。」と記述されているが、実測



21号墳 - 第2図 主体部配置図（調査日誌より推定）

図ではイ主体とハ主体が口主体を切っているような線の描き方がされており、調査日誌の記述と図面では切り合い関係が逆になっているので、イ主体・ハ主体と口主体の先後関係はわからない。主体部ラインは棺方を示しているものと思われ、幅 0.50 m、長さは 1.20 m 以上 1.62 m 未満となる。副葬品は出土していない。

ハ主体

本主体部も調査日誌の記述から主体部のラインは棺ではなく掘方のラインと判断される。幅は東端で 0.40 m、西端で 0.48 m、長さ 2.55 m を測る。主体部西端に須恵器壺（2121）が副葬されているが、副葬位置は棺外か棺内かは不明である。

ニ主体

本主体の位置を示した正式な図面が現存していない。第2図に示した位置は調査日誌記載の略測図から割り出したもので、ハ主体などとの距離関係は必ずしも正確なものではない。掘方は東端 0.98 m、西端 0.90 m、長さ 2.34 m を測る。棺は幅 0.48 m、長さ 1.80 m を測る。実測図では一部しか描かれていないが、棺底全体に小円窪が敷き詰められている。棺の西小口側に土師器壺（2125）1 個体を挟んで須恵器壺（2122・2124）2 個体が横 1 列、その前に須恵器壺（2123）1 個体が副葬されていた。また「略報」では鉄鏃 3 以上を副葬と記述されているが、現存して確認ができるのは、鉄鏃 1 点のみである。

ホ主体

イ・ハ・ニ主体との位置関係を示した図面は現存しないが、調査日誌や写真等から割り出したホ主体の位置についてはすでに述べた通りである。イ・ハ主体と同じ方向に主軸を向いているが、主体部同士の重なりはない。掘方の幅は東端で 0.65 m、西端で 0.70 m、長さ 1.71 m を測る。棺は幅 0.4 m、長さ 1.40 m を測る。東小口側の南側壁際に須恵器壺（2126）及び鉄製品が副葬されていた。また、実測図には掘方西の外側に 2 個体の副葬土器の図が描かれているが、土器の所在は不明となっており、種別・器種等は確認できない。なお、現存遺物で、確実にホ主体の出土遺物と断定できるのは須恵器壺 2126 のみであり、高杯 2127 が收められていた遺物袋には他の古墳出土遺物が混入しており、高杯 2127 も破片であり、ホ主体出土のものかどうかはわからない。副葬の鉄製品は「略報」では鉄刀 1、鉄鏃 2、鉄片 1 と記述されているが、現在確認できるのは鉄刀 1 点、鉄釘 7 点である。

ヘ主体

主体部の実測図面は現存するが、古墳上の位置については記した図面は現存しない。また、調査日誌にも記述が見えないので、位置については全くわからないが、主軸方位はイ・ハ・ニ・ホ主体と同じく東西方向にとる。トレンチまたは他の主体部と重なっていると思われ、実測図は複雑な線が重なっている。棺は幅 0.4 m、長さ 1.40 m 以上である。副葬品は「略報」では鉄刀 1(長さ 85cm)、鉄製鋤先 1 と記述されているが、現存・確認できるのは、鉄刀 1 点、U 字形鍛錠先 1 点、刀子 1 点、鉄釘片約 1 点である。

4. 構築年代

口主体のみが主体部の主軸を異にしている。口主体はハ主体とイ主体と切りあっているが、すでに述べたように先後関係については不明である。その他の主体部については、出土土器からもハ主体に先行的な要素はあるものの断定は難しい。出土土器の詳細については第6章で述べるが、土器群のうち須恵器は陶邑 MT15 型式併行型（6世紀前半）のものと判断してよい。主体部の出土遺物については、土器群より以前の埋葬と見なすならば、TK47 型式（6世紀初め）を中心とした年代を想定しておきたい。

なお、埴輪の形態・技法および年代については第6章第2節を参照されたい。

21号墳の2および21号墳の3（図版11）

21号墳と 25号墳の東側斜面に構築されていた小型石室墳である。この斜面は耕作地として利用されており、石材の一部が失われているが、墳丘があったかどうかは不明である。奥壁の棺の主軸はとも

に南北方向にとられている。ともに奥壁の対面側の石がないので、小石室墳のように見えるが、底に割石を敷いていることから小型石棺に分類する（※1）。

21号墳の2は残存長1.25m、幅0.34mを測る。棺底は板石を敷き、石材の平らな面を内側に向けて側壁を形作っている。西側壁の大半は失われてわずかに1～2石程度残るのみである。奥壁は板石を1枚立てている。石の材質は不明である。棺内からは遺物は出土していない。

21号墳の3は残存長1.14m、幅0.65mを測る。21号墳と同じく棺底は板石を敷き、石材の平らな面を内側に向けて側壁を形作っているが、西側壁の一部は失われている。奥壁は板石を1枚立てている。石の材質は不明である。棺内からは遺物は出土していない。

※1 主体部の分類名称については『西脇古墳群』（兵庫県文化財調査報告 第141冊）1995年を参考にした。

61号墳・61号墳の2（図版20）

21号墳の東側の斜面に構築されている。21号墳の2および21号墳の3の南側に位置している。詳細は不明であるが、61号墳の測量図には墳丘の高まりのような等高線が描かれている。

61号墳主体部は棺底に板石がないので開口部を持つ小型の石室墳と見なされ、残存長0.72m、幅0.52～0.64mを測る。西側壁は、石材の平らな面を内側に向けて側壁を形作っているのに対して東側壁は割石を小口積みにして形作っている。また、奥壁は1枚の板石を立てられている。石の材質は不明である。室内からは遺物は出土していない。

61号墳の2は棺底に割石が敷かれ、両小口に板石が立てられているので明らかに石棺の体裁を整えている。長さ0.64m、幅0.40mを測る。棺内からは遺物は出土していない。

22号墳（図版26）

調査日誌には「発掘の結果、古墳ではないことが確認された。」と記述されているが、出土遺物として記述のない完形の須恵器杯蓋が1点収蔵されている。杯蓋の時期には7世紀前後ものであり、5世紀から6世紀前半の造営が主体のB群の時期と乖離している。

23号墳（図版26・37・写真図版17）

古墳の大きさは9～10m、比高約0.7mで、墳丘は墓地として利用されていた。このため、墓地移転時に、立ち会い調査を実施したもので墳丘測量は実施していない。以下の記述は、調査日誌から要点のみをまとめたものである。

攪乱をまぬがれた箇所において、地表下約0.5mの主体部床面と思われる位置から須恵壺、罐、鉄製品が出土した。鉄製品は「略報」では鉄鎌2、鉄鍬、鉄鋤、鉄斧と記述されているが、現在確認できるのは鉄鎌2点、鉄鍬約3点、U字形鍬鋤先1点、鉄鍬1点である。このほか盛土中より弥生式土器、須恵器壺片が出土している。

25号墳（図版12・26・27・37・写真図版10・11・18）

1. 墳丘

21号墳と同じく北の城山に連接するいなみの台地突端部のもっとも高所に構築されている。墳丘の標高は36.50mである。一辺10m前後の方墳で、墳丘上には北から第3主体、第1主体、第2主体と平行して並ぶ3基の主体部が検出されているが、主体部の墳丘における位置および配置関係を示した全休図が残されていない。

2. 遺構

(1) 土器群

第3主体の遺構上面から杯類、壺などの須恵器が完形品の状態で少なくとも13個体出土している。

(2) 主体部

第1主体

棺は長さ2.46m、幅は西小口で0.34m、東小口で0.40mを測る。棺の掘方は記録されていないので、実際の棺はもう一回り小さいかも知れない。遺物は出土していない。

第2主体

第1主体の調査後に同主体部の北側にトレンチを設定して検出された主体部である。掘方の幅は東端で1.06m、西端で1.21m、長さ2.85mを測る。棺は幅0.38m、長さ1.88mを測る。棺外から壺(2519)と棺内から鉄劍1点が出土している。なお、2520の杯口身は第2主体を縱断する東西セクションからの出土品である。恐らくは封土に含まれていたものと思われるが、第2主体の直近の出土という点から、ここでは第2主体関連の遺物としておく。

第3主体

第3主体の位置関係は正式な図は提示されていないが、第1主体と第2主体との位置関係を示したものが調査日誌に記されている。第1図はその調査日誌記載の略測図から位置を推測したものであり、位置関係については必ずしも正確なものではない。

掘方は長さ3.44m、幅は西端で0.98m、東端で0.92mを測るが、南側の長辺の東隅の掘方ラインをややカーブさせて東端部が広がらないように幅を調整している。棺は長さ1.96m、幅0.40mを測る。副葬品は棺外の掘方底東側に2個体、西側に2個体置かれている。このほか、調査日誌では「須恵器蓋(2521)と土師高杯(現在、所在不明)が棺上部と思われる位置より、土器群の土器とは約10cmの高さの差をもって出土した」と記載されている。しかしながら、蓋2521と棺内の須恵器壺(2522~2524)との間の型式差や口縁部の4分の1が欠けている点など棺内の副葬品との整合性に欠けている。また、蓋2521は高杯か短頸壺の蓋であり、一対となるべき対象物が存在しない。従って、この須恵器蓋(2521)について再度観察したところ、封土出土の短頸壺2516の共蓋であることが両者の焼成痕跡の比較から判明し、棺上の副葬品である可能性が極めて低くなった。恐らくは封土出土の短頸壺2516も棺上部の蓋2521も土器群に含まれるべきもので、蓋2521については棺蓋の腐食により土中に沈みこんだものと考えられる。棺内からは鉄刀および不明鉄器1片、棺外より鉄鎌が出土している。

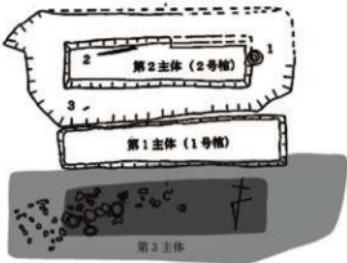
3. 古墳の造営年代

(1) 遺構の切り合い状況

第1主体と第3主体の先後関係は、第1主体が第3主体の掘方を切っていることから、第1主体の埋葬時期のほうが新しい。また、第1主体と第2主体との先後関係については遺構の切り合い状況から求めるのは難しいが、第1主体の埋葬深度が墳丘表面から浅い位置にあることと副葬品を伴わないところから第2主体よりも後の埋葬主体と考えられる。

(2) 遺物の年代観

①第3主体の須恵器3点は、西条古墳群出土の須恵器としては最も古い陶邑TK23型式併行期(5世紀後半)のものと思われる。



25号墳・第1図 主体部配置図

(調査日誌より推定) S=1:50

②第2主体の須恵器壺は口縁部の波状文が消失している点を第3主体の壺よりも新相の要素と見なすことができれば、年代を陶邑TK47型式併行期（6世紀初め）に求めることが可能である。

③土器群については古相の2501と新相の2506・2511あるいはその中間の2502など古相・中間相・新相が混在している。古相は陶邑TK23型式、新相は同MT15型式に下る様相を示している。中間相がMT15型式に含まれる可能性もあるが、ここでは陶邑TK47型式を中心としてTK23型式～MT15型式までの年代幅のある遺物群が含まれている可能性を考えておきたい。土器の詳細については第6章第1節で述べる。

(3) 主体部の埋葬順序

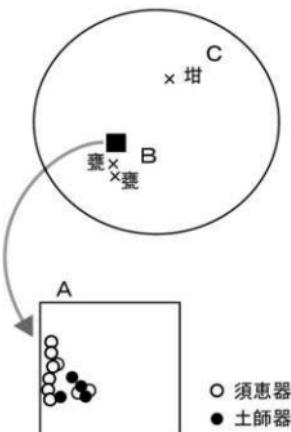
遺物の年代観からすると、第3主体、第2主体の順となる。第1主体には副葬品は納められていないが、埋葬深度の浅さと無遺物の点から最終の主体部とみてよい。土器群の位置づけについては、すでに述べたように、21・29号墳に墳丘上に土器群の供獻が見られることから、25号墳についてもすべての主体の埋葬後に何らかの供獻儀礼を行ったものと解しておきたい。

29号墳（図版28・写真図版19）

墳丘のほとんどが墓地に転用されていたことから、墓地移転時の立ち合い調査にとどまり、正式な発掘調査は行われていない。以下の概要は調査日誌の記述に基づく。

墳丘は約10～11mの規模で、マウンドの高さは1.2～1.5mである。墳丘中央より西側に約1mはずれた地点で須恵器壺片が多数出土した（B遺構）。また、墓地造成による搅乱を免れた箇所から東西幅0.7m、南北幅1.5mの土坑（A遺構）が発見されたが、この土坑については木棺の痕跡は確認されていない。内部から須恵器杯（蓋付）約15個体・高杯1個体・土師器6個体（杯1個体、壺4個体、楕1、長頸壺1個体）がまとまった状態で発見された（第1図）。現在、須恵器は23個体、土師器6個体が保管されている。このうち須恵器杯は22個体あり、すべて完形品で、うち9組が焼成時のままのセット関係、残る蓋2個体、杯身2個体は焼成時のセットではないが、杯身と蓋が同数であるのでセットと見なせば、11組のセットとなる。調査日誌では「須恵器杯（蓋付）約15個体」と記述されているが、一部のセットが崩れてのカウントであろう。主体部については墳丘の中央北寄り部分の表土も掘り下げて調査を実施したが、無縁仏の埋葬などにより搅乱されて確認されなかったとしている。従って、墓地造成によって主体部そのものは検出されなかつたが、土坑内に納められた土器群については、21号墳・25号墳の土器群と同様、供獻儀礼に伴うものと推察される。

（森内秀造）



29号墳・第1図
遺構検出状況模式図
(調査日誌より)

第3節 C群の古墳

B群の北、台地に切り込んだ西向きの小さな浸蝕谷の北側に東西に点在する一群の古墳群をC群と呼び、31・32・34・35・36・37・38・39号墳がある（図版1）。

31号墳（図版13・29・写真図版11）

31号墳は、C群のなかで東端に位置する古墳で、略報によれば、「以前に道路工事によって墳丘と石室共に前半部を削り取られており、墳丘径約8m、横穴式石室の幅1.5m、長さ現存5m。敷石があり、遺存状況は良好でなく、遺物も見当たらなかった。」と記されている。

石室実測図（図版13）によれば南東向きの無袖式の横穴式石室で、石室の奥壁部は横に2石が1段だけ据えられている。右側石は2段だけで、1段目は比較的大きな割石（幅0.7m、高さ0.2m程度）を並べ、2段目も同程度の割石を積んでいた。石室中央部で4段まで確認できる。側壁の高さは石室中央部で0.6m、石室の長さは、左側で4.95m、右側で3.9m。石室の幅は奥壁部、中央部、羨道部では、いずれも1.6mである。石室床面の奥壁付近に敷石がみられるが、全面に敷かれていた可能性はあるが、盗掘を受けていたようで、はっきりしない。

遺物として須恵器の壺口蓋、壺口身がある（図版29）。いずれも陶邑編年のTK217、飛鳥編年で7世紀前半頃と思われる。

なお、調査日誌には、蓋杯、土師器、壺口縁部、釘が出土したことが記されている。

32号墳（図版13・29）

32号墳は、34号墳の東方に位置し、略報によれば、「封土のかすかな遺存に注意して調査したが、既に石組みはほとんどなく、石の抜き跡を調査した。幅90cm長さ2.50mの石室の存在を推定でき、遺物は須恵器（壺）の破片のみ採集された」と記されている。

遺物としては、突帶付壺の肩部と体部がある（図版29）。平安時代のものである。

34号墳（図版13・14・29・38・写真図版11・15）

34号墳は、32号墳の北西に位置し、略報によれば、「南向きの無袖式の横穴式石室（幅1.7m・長さ6m）で、既に奥壁は抜き取られていたが、石室中央部のやや奥寄りの所に棺台かとも思われる主軸方向に直交する2列の石列があり、この周囲からはかなり良好な状態で土器が出土した。また、石室の前5分の2程度のみにぎっしりと平らな割石が敷石として敷き詰められていた。遺物は須恵器（壺2、平瓶1、提瓶1、高杯1、破片若干）、土師器片若干、金環3、鉄釘6が出土した」と記されている。

墳丘は地形測量図（図版13）から判断して径10m程度の円墳であったと考えられる。

石室実測図（図版14）によれば、南西向きの無袖式の横穴式石室で、石室の奥壁は抜き取られていた。右側石は1段で、石室中央部で2段を残している。左側壁は、奥壁側で1段だけ残るが、石室中央部で3段が積まれていた。左側石中央部の高さは1.0mで、残存石は、1~2石である。右側壁中央部の高さ0.8mである。石室の長さは、右側で7.75m、左側で6.90m、石室の幅は奥壁部で1.65m、石室中央部1.7m、羨道部付近で1.8mになり、わずかに羨道部が広くなっている。

石室床面の奥壁側で敷石が確認できる。石室中央部には2列の列石が確認できる。羨道部付近には敷石が密集して敷き詰められており、閉塞石の可能性がある。

遺物は、須恵器類が石室内に点在している。鉄釘が奥壁部と石室中央部の列石近くと羨道部外に検出されている。奥壁及び石室中央部については木棺があったことを示している。石室外のものについては盗掘などによって運び出されたものと考えられる。さらに金環3の検出場所は奥壁部と石室中央部であったことから、鉄釘と金環の位置から考えて、石室内には2か所以上の埋葬施設が存在していたこと

が考えられる。

遺物としては、須恵器の杯H身、壺、高杯、腹、平瓶、提瓶、鉄釘、耳環がある（図版 29・38）。須恵器の陶邑編年のTK 47、TK 209、TK 217形式のものを含むが、概ね7世紀初めから7世紀中頃のものである。

35号墳（図版 15・30・写真図版 12）

略報によれば、「比較的小形の横穴式石室（幅 1.40 m、長さ 4.50 m）、奥壁には薄い割石を 2 枚並べている。著しく搅乱された痕跡があり、遺物は土師器（盤 2、壺 2）、須恵器片若干、銀環 1 が出土した。」と記されている。

石室実測図（図版 15）によると、南東向きの横穴式石室で無袖式である。奥壁は扁平な割石を横に並べ、1段だけ残す。右側石は奥壁部で 1 段だけ残すが羨道部付近では 4 段積まれている。左側石は奥壁部で、やや大きい割石の上に小石を 2 段積み上げている。羨道部付近も同様な積み方がみられる。石室の左側石の残存高は 0.6 m、右側石の残存部で 0.5 m で、石室の長さは、左側で 3.6 m、右側で 4.5 m である。石室幅は奥壁部で 1.2 m、中央部 1.35 m、羨道部 1.3 m である。

出土遺物としては、奥壁部で台付長頸壺、石室中央部の左側壁付近で須恵器（平瓶）、土師器、銀環が出土している（図版 30）。台付長頸壺は陶邑編年の TK217、飛鳥編年で 7 世紀前半頃と思われる。

36号墳（図版 15・30・38）

墳丘測量図（図版 15）によれば、36 号墳は、35 号墳の西に位置している。

略報によれば、「横穴式石室をもつ推定径 14 m ほどの円墳であったらしいが、実にはなはだしく搅乱されており、石室は全く存在せず、石室築造の際の掘り方を追求することにより、かつての石室の規模を推定せざるを得なかった。それによると、石室の幅は約 1.2 m、長さ約 7 m であったらしい事が判明した。遺物は須恵器（高杯 1、破片若干）、土師器片若干、鉄器（鍛 1、釘 1）を発見することが出来た。」と記している。

石室実測図（図版 15）には、石材抜き跡として、奥壁部で 3か所、左側石で 11 か所、右側石で 9 か所が記されている。

出土遺物としては、杯 H 盖身、杯 G、壺、高杯、直口壺がある（図 30）。杯 H 盖身は陶邑編年の MT85 で、6 世紀中頃にあたる。高杯、杯 G は陶邑編年の TK217 段階、直口壺は中村編年で 7 世紀前半頃にあたる。なお、奥壁部付近で鉄鎌、鞍金具など鉄器類が出土している。

37号墳（図版 16・40・写真図版 12）

37 号墳は、C 群のなかで最も西に位置する。略報によれば「西南に切り込んだ谷により出来た台地の西端の縁辺部にあり極めて展望のきく位置に存在する。封土の中心からややはずれた所より粗い波状文のついた口縁部をもつ土師器壺棺を発見した。上になっていた部分は既に流出してしまったが、丸底の土器を使った合わせ口の壺棺墓と推定された。精査したところ、遺物は何も伴出しなかったが、朱を一面に塗布していたと思われる木棺を埋葬した主体部（幅 40cm、長さ 1.60 m）を検出した。」と記されている。

37 号墳主体部実測図（図版 16）によると、幅 0.45 m、長さ 1.7m の主体部であるが、木棺の短側部が狭まる矩形を呈しているが、詳細は不明である。なお、37 号墳付近より弥生時代後期の大型の広口壺が出土している（図版 40）。

38号墳（図版16・30・40）

略報によれば「37号墳のすぐ上に道路ひとつを隔てて存在する。封土の南側の裾近くに、僅かに高くなったところがあり、ここから2個の弥生式土器（甕）を使用した合わせ口棺が出土した。封土の中央部には幅60cm、長さ1.65mの木棺直葬主体があったが副葬品は出土しなかった。」と記されている。

38号墳実測図によると幅0.7m、長さ1.85mの掘り込みの内部に（幅0.4～0.6m、長さ1.5m）の主体部が確認できる。さらに粘土ブロックが2か所に記されている。

なお、38号墳付近より、土師器甕と弥生時代の漆棺が出土している（図版30・40）。

39号墳（図版17・30・写真図版12）

略報によれば、「発掘にとりかかる前から石室が露出していたことや羨道部と思われるあたりから亀甲形陶棺の破片がかなり出土したとあるが、石室内からは陶棺は確認されず、遊離した土中から数片の須恵器片を発見したのみであった。石室の保存状況について、天井石は存在しなかったが、他のC群の古墳より良好であった。横穴式石室（幅1.7m・長さ10.7m）」と記している。

石室実測図（図版17）によれば、南東向きの無袖式の横穴式石室である。奥壁は扁平な石が据えられているが、右側の床面上に小石を詰めて奥壁としている。左側石は基底部で12石、右側石で8石が確認できる。左側石では、基底部に比較的大きい割石を配置する。石室中央部よりで3石を積んでいる。高さ0.8m。石室中央部では扁平な割石を3～4段ほど積み上げている。右側石では、奥壁部で2段、基底部はやや大きい割石を据え、その上には扁平な割石を4段積み上げている。石室の高さ0.7m。石室の長さは7.8mである。石室幅は奥壁で1.7m、中央部1.65m、羨道部入口付近で1.6mである。

出土遺物としては、須恵器の杯蓋、杯H身、高环、甕がある（図30）。杯蓋と杯H身は、陶邑編年でTK217段階、高杯は中村編年II形式6段階で概ね7世紀前半頃にあたる。その他、口径17.5cmの甕と石室外から土師質亀甲形陶棺が検出されている（図版33・第6章第3節）。

（山本祐作）



39号墳石室

第4節 D群の古墳

この台地の一番北にある小さな谷を利用して西条と中西条を結ぶ道路が開削されており、この道路の北側と南側に存在する一群の古墳群をD群とする。

発掘調査の結果、D群で墳丘墓や古墳と確認されたものは、40・51・52・53・58・59・60号墳の7基である。

また、発掘調査の結果、古墳とは認められず欠番となったものは41～50号墳、54～56号墳である。

40号墳（図版18・30・写真図版11）

略報には「木棺直葬による古墳。当初2棺あるかと推定されたが、墳頂よりやや北にはずれた所に一つだけ主体部があった。」と記されている。墳丘測量図（図版18）からは墳丘は南側を半分ほど土取りで削平されていたことがわかる。墳頂からやや北にはずれた所の地表下約40cmで主体部実測図（図版18）にあるように木棺直葬を1基確認した。墓壙の両側には床面から0.10mの高さにベッド状の施設（幅0.30m、長さ0.18m）がそれぞれ一对あった。墓壙は幅0.50m、長さ1.65mで主体部床面には小さな礫を全面に敷いていた。

遺物は発掘の途中に五輪塔などとともに須恵器の皿が出土している。また墓壙内で被葬者の腰付近に鉄劍1、鉄刀か鉄劍1が副葬されていた。須恵器の皿（図版30）は平安時代後期のものである。

41号墳と名づけられた高まりから出土した須恵器（図版31）

当初41号墳と名づけた高まりから須恵器や中世の骨壺や喪棺が出土している。中世墓地造成による攪乱が激しく主体部が確認できなかったため古墳と判断されなかった。

器台、高坏、坏、甕や高台付坏がある。時期は陶邑編年（注2）のTK209形式の6世紀末のものと奈良時代のものがある。

51号墳（図版18・写真図版13）

略報には「封土は既に流失してしまっており、発掘前に箱式石棺の端が一部のぞいていた。石棺の幅46cm、長さ1.80m、副葬品は管玉3個のみしか出土しなかったが、一部に骨片らしきものが出土したことから言っても余り攪乱されていないものと思われる。尚、封土中より、弥生式土器の破片が出土した。」と記されている。

主体部（箱式石棺）実測図（図版18）にあるように、割石を側壁にそれぞれ4石立て、小口にはそれぞれ1石を立てた箱式石棺で東西方向を向いて築造されていた。幅は幅46cm、長さは1.80mで副葬品として管玉3個が出土した。なお、封土中より弥生式土器の破片が出土している。

52号墓（写真図版13・14）

略報には「発掘以前は道路開さく時の土が積み上げられており、封土の様子は一切わからなかった。発掘の結果、当方では初めての弥生時代の様式の遺物をもった墳墓であることが判明したので、原形状の検出に努めた結果、後記の如く、円形の土盛りを確認した。」とあり、加古川地域における新たな発見であったことが記されている。

なお、本墳については、2009年に『弥生墓からみた播磨』一附・特別報告「西条52号墓発掘調査の記録」として第9回播磨考古学研究集会実行委員会から報告されている。また平成26年にも『兵庫県立考古博物館紀要第7号』に本墳についての記述があり、本報告書にその一部を転載している。

55号墳（図版19）

略報には「封土は僅かしか残っていなかった。調査の結果、一部朱のついた幅0.55m、長さ2.09mの木棺を埋葬した木棺直葬墳と判明、遺物は封土に混入した弥生式土器片のみ判明」とある。

墳丘測量図（図版19）から径10mほどの円墳であったと思われる。

主体部実測図（図版19）によると地表から深さ約0.5mの位置に、長さ3.15m、幅1.50mの長方形の墓壙を掘り、幅0.6m、長さ2.10mの木棺を埋葬したものであり、朱が確認された。層序は表土である黒色土層、褐色土層、黄色土層（砂質）、地山は黄褐色土層であった。

なお、遺物は封土に混入した弥生式土器片があった。

58号墳（図版19・31・写真図版15）

略報には「発掘にかかる前、既にブルドーザーによって破壊されてしまっていた。その為、横穴式石室は殆んど壊滅状態になっており、いろいろと努力したが、その規模は推定しようもなかった。しかし、遺物は割合よく残っており、須恵器（盤、平瓶1、坏破片）、土師器などを確認することができた。」とある。

墳丘測量図（図版19）によると、略報のように墳丘は削られてしまっており、石材が点在しており墳丘を失っていることがわかる。

また、石室実測図（図版19）には石室の側壁に使用された石材が両側にそれぞれ5石確認できる。これによると石室は幅0.7mで、長さ1.5mまで確認できることから比較的小さな横穴式石室墳であったと思われる。

遺物として須恵器（平瓶1・台付椀）、土師器があり、陶邑編年のTK209形式の時期に相当する。

59号墳（図版1・19）

略報には「この古墳と次の60号墳は台地の東側の縁辺部、丁度52号墳とは逆の地点に存在する。小円墳で主体部は木棺直葬墳であった。遺物は全く出土しなかった。」とある。

西条古墳群位置図（図版1）によるとC群の東北端に所在する古墳で58号墳と南北に対面する位置関係である。

59号墳主体部実測図によると地表から深さ約0.17m、長さ1.00m、幅0.4mの小さな長方形の墓壙を掘り、幅0.22m、長さ0.85mの木棺を埋葬したものである。層序は赤褐色土層、地山は赤褐色土層（疊混じり）であった。小円墳で主体部は木棺直葬であったが遺物は全く出土していない。

60号墳（図版20・41・写真図版14）

略報には「59号墳に近接して2ヶ所に涉って弥生式土器（壺棺）が出土した。何れも合わせ口になっていたが、西側のものは小さく、はたして壺棺として使用できたか疑問の点もある。」と記されている。

墳丘測量図（図版20）から径は10mほどの円墳であったと思われる。また主体部実測図（図版20）には木棺直葬墳の検出状況図もあり、また、土器棺の出土状況図（図版20）もあることから、本来、弥生時代の壺棺墓の墳丘に古墳時代になって木棺直葬墳が構築されたものと思われる。木棺直葬墳は主体部実測図（図版20）によると幅0.80m、長さ1.80mの墓壙に幅0.5m、長さ1.5mの木棺を直葬したものと思われる。

また、壺棺は2組の棺身と蓋にあたる土器が出土している。

（上月昭信）

注1 西条古墳群発掘調査団「西条古墳群調査略報」昭和39年

注2 田辺昭三「陶邑古窯跡群！」平安学園考古クラブ 1966年

注3 篠宮正・友久伸子ほか「西条52号墓出土品の共同研究」

『兵庫県立考古博物館研究紀要第7号』 2014年3月

第6章 古墳群出土の遺物

第1節 土器（須恵器・土師器）

1. 遺物の出土と整理

(1) 遺物の保管状況

遺物は完形品については展示ガラスケースにて保管展示、破片等については木箱にナイロン袋に入れて倉庫内で保管されていた。

A. 展示ガラスケース保管遺物

遺物には出土古墳名・出土位置・出土年月日等の注記が施されている。但し、一部の遺物に誤記または無記入のものが存在する。これについては、写真・図面等の照合によって出土古墳を特定したものもあるが、特定できなかったものもある。

B. 収蔵木箱

袋ごとに遺物カードが納められ、個々のカードには通し番号が記されていた。通し番号は遺物台帳での管理番号と推測されるが、番号が未記入のものもあり、また、台帳そのものが紛失している。このため、遺物収納袋ごとに新たに通し整理番号を付し、台帳を作成した。そのうえで、実測可能な遺物を抽出し、最終的に報告番号を付した。但し、本来の出土古墳とは異なる古墳のラベルが挿入されているものもあり、また、まったく地点の離れた古墳同士の遺物が接合するなど、取り上げ時にすでに誤記や取り違えなどが生じているものもあった。明らかな誤りが判明したものについては精査のうえ修正し、その旨を台帳に記したが、それ以外については基本的には遺物ラベルの表記に従っている。

C. 未実測遺物と未整理遺物

時間的制約の中で、接合不十分な遺物などについては実測を断念したものや実測可能でありながら作業を実施できなかったものもある。また、出土古墳不詳の木箱も多数存在しているが、これらの遺物についても整理までは及んでいない。の中には、各号墳の中で所在不明の遺物も含まれている可能性もある。

(2) 杯の分類の問題

7世紀にはいると、いわゆる杯Gと呼ばれる金属器模倣の器種が出現するとともに、播磨では比較的早くに杯H（立ち上がりのある杯身）が消失し、それまでの蓋の天地を逆転させて無蓋の杯身とした形態が、一時期、生産の主体を占める。三木市の年ノ神1号古墳（『兵庫県文化財調査報告第298冊』2006年）のように杯H身を蓋に転用して杯G身に被せている例もあり、また、南淡路市の汁谷窯（『兵庫県文化財調査報告第234冊』2002年）では杯H身を逆さにして蓋のようにして焼成する一方で、從来蓋としていたものを無蓋の杯身として重ね焼きしている。従って、古墳時代から歴史時代への過渡的段階の杯蓋形態は、蓋と身とセットで焼成するものと無蓋の杯として重ね焼きするものが共存する過渡的時期があり、該当物について蓋にするか身にするかで判断に迷うものが多く、西条古墳群においてもその例に漏れない。

蓋と身の識別の目安として、杯Hが蓋と身をセットにして焼成されていることを前提にして、蓋としての識別は①天井部全体に降灰若しくは自然釉がかかっている。②口縁端部に焼成時における杯身との

融着痕や剥離痕が残る。③焼成時にセットとなる杯身に被せた形状変化の特徴として、口縁部の両端が収縮して梢円状を呈する。以上の3点であり、逆に無台の身としての識別は、口縁端部に重ね焼きを示す降灰状況を示している場合となる。

以上が区分の目安であるが、それでも区分が難しい場合もある。この場合は、蓋と認定できるものが含まれていれば、その他も蓋とし、逆に重ね焼きの痕跡を示すものが含まれていれば、その他も無台の杯身として仮区分している。ただこれも絶対的なものではなく便宜的な識別であることを断っておく。

(3) 初葬と追葬遺物の識別

横穴式石室は追葬が行われていることが多い。本調査は緊急調査でもあり、ほとんど初葬と追葬の遺物の識別が行われていない。従って提示した遺構および遺物実測図も初葬と追葬の区分は行い得ていない。

2. 各古墳出土土器の概要

1号墳出土土器（須恵器）：図版21・写真図版15

(1) 石室・石室入口出土須恵器

杯口蓋（0101～0104）

杯Hの身の出土はないが、0104は天井部全体に自然釉がかかり、口縁端部も焼成時における杯身との融着痕や剥離痕が残り、確実に杯Hの蓋と認定できる。また、0102も、口縁端部に杯身との融着による剥離痕が見られる。0101・0103も蓋か身の区分は難しいが、蓋とした0104と0102の存在により、ここでは蓋として扱う。口径10.8cm～11.8cm。天井部と体部の境は稜をもち、底部外面はヘラ切り後、なで調整を行っている。

無蓋高杯（0105）

口径10.5cm、脚径8.7cm、器高10.2cm。杯体部中央に1条、脚部下位に1条の沈線を巡らす。杯体部と底部の境は突出し、稜をもつ。脚底部は緩く開き、端部は上方を向く

無蓋高杯（0106）

口径12.4cm。脚部を欠くが、短い脚部を伴うと思われる。体部中央に沈線を施し、底部外面はヘラ削りを行う。

その他の遺物（0107～0110）

0107は体部を欠くが、口縁部が大きく聞く8世紀前半代の長頸壺で、内外面とも焼成時の降灰による灰釉の発色が著しい。0108は直口壺で体部から底部までの破片が残存しているが、接合には至っていないので口縁部のみ実測を行った。内外面とも降灰による自然釉の発色が著しい。このほか平瓶（0109）の口縁部が破片の状態で出土している。0110は口縁部を欠くが、体部に2条の沈線と列点文を巡らす長頸壺で、底部には外側に踏ん張る短い脚を付す。

(2) 盛土出土須恵器

古墳築造時の盛土に混入したものと思われ、0111以外は当該古墳築造以前の遺物である。0112は透かしが長方形の4方透かしである。裏0114は頸部上半に削り出しの段、その下に2本の沈線を巡らす。0111はロクロ調整などからみて8世紀代の杯Aとなろう。

2号墳出土土器（須恵器）：図版21・写真図版15

杯口蓋（0201～0206）

0203・0205は両端が収縮して梢円状を呈する。これは焼成時にセットとなる杯身に被せた形状変化の特徴である。**0201・0202・0204・0206**も蓋か身の区分は難しいが、蓋とした**0203**と**0205**の存在により、ここでは蓋として扱う。口径は12cm前後のもの（**0201・0202・0206**）と10cm弱のもの（**0203～0205**）に大別される。底部外面はヘラ切り後、なで調整を行っている。

無蓋高杯（0207・0208）

0207は短脚の無蓋高杯で口径12.0cm、高さ7.2cm、脚径8.3cmである。脚部底部が水平に開き、端部は上方に向く。**0208**は口径8.4cm、高さ9cm余りと推定される。杯部中央に段がつく。

台付椀（0209）

コップ形の体部に外側に踏ん張る脚部を付す。胎土は精良である。体部は全体をヘラで削り調整を施し、上部に2条の沈線を巡らす。脚部は側面中央に段を付け、三角形の透かしを5ヶ所穿つ。

※当該椀は21号墳のラベルが挿入された破片と接合したが、21号墳の記載を誤記と見なして2号墳出土遺物に帰属させた。

長頸壺（0210）

8世紀代の長頸壺で、口縁部を欠くが、算盤玉形の体部に外側に踏ん張る高台をもつ。

小皿・椀（0211～0214）

石室入口付近から当該資料を含め、平安時代以降の再利用時の遺物が多数出土しているが、時間的な制約もあり、すべては図化しておらず、ごく一部の掲載にとどまっている。**0211**は平安後期の小皿で底部に糸切り痕を残す。**0212～0214**は糸切りの椀で、このうち**0212**は側面をヘラで整形した平高台を有する。糸切り椀として播磨に導入初期の10世紀代に位置づけられる。**0213・0214**は高台を消失しており12世紀代に位置付けられる。

4号墳出土土器（須恵器）：図版22

杯口身（0401～0404）

0401と**0402**はそれぞれ口径10.9cm、10.4cm。立ち上がりは低く内傾する。天井部と体部の境は屈曲する。底部はヘラ切り後、なで調整を行う。**0402**はヘラ切り後、板などで調整を行った痕跡を残す。

杯口蓋（0405～0407）

0405と**0406**はそれぞれ口径10.5cm、11.8cm。天井部と体部の境は屈曲する。天井部外面はヘラ切り後、なで調整を行う。

無蓋高杯（0408～0410）

3点出土している。脚部はいずれも長脚で、透かしを有せず、端部は水平に大きく開く。杯部は体部と底部の境が丸いが、深手のもの（**0408**）と浅手のもの（**0409・0410**）がある。

平瓶（0412・0413）

口頸部はやや中央寄りにつき、直上方向に向く。頸部側面には1条の沈線を巡らす。肩部は体部との境は稜をもち、体部下半はヘラ削りを行う。肩部内面に径1.5cmの閉塞円孔が残る。肩部外面には自然釉が発色し、小窓壁片が付着する。**0415**は扁平な体部にやや直立する口頸部を持つ。底部は平らである。体部外面に板などでによる調整痕を顕著に残す。

その他

直口壺（0414・0415）や長頸壺（0417）のほか、8世紀前後に位置付けられる長頸壺（0418）・

杯B（0416）などの石室再利用の遺物が出土している。

6号墳出土土器（須恵器・土師器）：図版22・写真図版15

須恵器

杯H蓋（0601・0602）

杯Hの身の出土はないが、降灰の状況や口縁端部の剥離の状況から杯Hの蓋と判断した。口径10.6cm・11.3cm。天井部外面はヘラ切り後、丁寧ななで調整を行う。

杯（0603～0606）

0604は蓋か身かの識別は難しいが、重ね焼きらしき痕跡を残すという点で杯に分類した。口縁部と体部の境は稜を持ち、口縁部は直上方向に立ち上がる。底部外面はヘラ切り後、なで調整を行う。0603は口径9.4cmで、当古墳群中で最小口径である。底部外面はヘラ切り後、なで調整を行う。

0606は口縁部に重ね焼きの痕跡を有する。底部は平らで体部は斜め上方に開く。口径11.8cm。底部外面はヘラ切り後、丁寧ななで調整を行う。野新村1号窯に似た形狀のものがある。

平瓶（0608）

斜め上方に開く頸部と稜のない体部をもつ。肩部には自然軸が発色している。×印のヘラ記号が刻まれている。

杯A（0609）

口径12.3cm、底径8.8cm。体部は直上方向に立ち上がり、底径も広いことから8世紀の杯Aに分類した。体部内外面にロクロ調整の痕を残し、底部外面も丁寧な調整を施している。

土師器（0610～0612）

土師器椀（0610）は口径16.6cm、器高10.1cm、高台径7.0cm。外方に踏ん張る高台をもつ。体部は丸みをもって立ち上がる。内面の暗文は表面が荒れていますため確認できない。長胴甕（0612）は口径11.5cm、高さ21.7cm。口縁は「く」の字状に短く屈曲する。体部外面は縱方向のハケ目調整、内面は指捺えなどで調整を行う。

7号墳出土土器（須恵器）：図版23

0702と0704は床面出土と遺物カードに記載されているが、0701と0703はそれぞれ7号墳盛土トレンチ・西側とのみ記されているだけで、正確な出土箇所は不詳である。

0701はかえりの径8.0cmで、つまみを欠く。天井部はヘラ切りの後、なで調整を施すのみで、ヘラ削りは施されていない。0702は0701とセットになる器形である。直上方向に立ち上がる体部をもち、体部と底部の境は丸く、底部は平らで、ヘラ切り後、なで調整を施すのみである。0703は杯身の可能性もあるが、形状から杯蓋と判断した。口径11.2cm。0704は提瓶で直上方向に立ち上がる口頭部を持つが、口縁部を欠く。

11号墳出土土器（須恵器）：図版23

古墳番号としては抹消されている。出土遺物は破片である。1101は杯の底と注記されているが、大振りで厚みがあるので、壺か瓶類の底部であろう。1102は長頸壺。このほか、杯Bの蓋のつまみと思われる遺物も採集されている。

13号墳出土土器（須恵器）：図版23

壺（1301）は口径17.8cm。大きく外反する頸部をもち、口縁端面は平坦である。体部片も出土しているが、接合には至っていない。

14号墳出土土器（須恵器）図版23・写真図版15

調査日誌や遺構図面には多数の遺物が記録されているが、保管遺物の中で14号墳出土の注記が確認できるのは1401と1402の2点だけである。これとは別にガラス展示ケース内には注記のない遺物群があり、このうち1403～1407を遺構図面および日誌の出土状況図と照合して14号墳の遺物群に特定した。また、平瓶も平面図上では1点出土していることになっているが、無注記の平瓶が0004・0005（図版31）の2点存在しており、どちらが14号墳出土の平瓶に該当するかは現時点では特定できなかった。なお、小型の台付長頸壺は盗難にあったと日誌に記述されているので現存しない。

須恵器

高杯（1401）

初葬のものと判明している唯一の遺物である。口径10.7cm、器高9.9cm、脚径8.3cm。杯部は体部下位に段を有する。脚部中央には2条の沈線を巡らす。

杯（1402）

杯身の底部か無台の杯身かはわからない。あるいは蓋の可能性もあるが、ここでは杯身の底部として見なしておく。ヘラ切り後、板などで調整を行った痕跡を残す。

蓋（1403～1405）

記録では石室内から3点の蓋の出土が確認できる。いずれも宝珠つまみを持ち、天井部のヘラ削りを行う。1403・1404は天井部から口縁部の境に段が付く。

盤（1406）

口径3.4cm、高さ8.7cm。口縁部と頸部の境は沈線によって区分されている。頸部中央と体部中央に沈線を巡らす。底部外面は手持ちのヘラ削りを行う。火燐の痕を残す。

台付短頸壺（1407）

脚台付の短頸壺である。体部中央には波状文を巡らす。脚台側面に5個の台形の透かしを穿っているが、透かしの大きさは一定ではなく、形も不揃いである。脚端部は丸く收めるが、雑な成形である。

口径9.8cm、高さ17.5cm。

土師器

壺（1408）

口径7.2cm、高さ6.7cmの小型壺である。短く直上に立ち上がる頸部をもつ。体部外面に横方向のハケ目を残す。

21号墳出土土器（須恵器・土師器）：図版24・25・写真図版16

(1) 土器群出土須恵器

杯口蓋（2101～2106）

口径は12.8cm～13.5cm。いずれも器壁は内外面ともに暗青灰色、断面はすべてセピア色を呈する。

ヘラ削りは蓋で天井部の約 2 分の 1。A 類と B 類の 2 つの形態がある。A 類は体部が内側にはいる一群である。天井部と体部の境は沈線状の凹部を巡らして区分している。器壁は B 類に比べて厚みをもつ。B 類は体部が外方に開き、天井部と体部の境は鋭い稜をもつ。器壁は薄く、口縁端面の内側に明瞭な段をもつ。

杯 H 蓋 (2115)

口径 12.5cm、高さ、4.3cm。天井部と体部の境は沈線状の凹部を巡らして区分している。上記の 2101 ~ 2106 の蓋群と比較して小さく色調も青灰色で全く異なる。

杯 H 身 (2107 ~ 2110)

杯の立ち上がりは内傾し、口径は 9.6cm ~ 11.2cm である。口縁端部は内側に段を設ける。いずれも蓋と同様、器壁は内外面ともに暗青灰色、断面はセピア色を呈する。器壁は極めて薄手である。

高杯 (2111)

杯部をぐくか有蓋の可能性が高い。脚端部を上方に突出させる。小片であり、透かしの数は不明であるが、おそらく 3 方透かしになろう。

無蓋高杯 (2112)

口径 14.2cm、器高 10.9cm、脚径 9.0cm。脚端部を丸く収める。杯部上部に沈線状の段を設ける。

3 方透かし。

翫 (2113)

口縁部は太い頭部から外上方へ立ち上がるが、口縁部と頭部の境の稜線ではなく、沈線で区分されている。23 号墳 2302 のような外面の装飾は施されていない。

翫 (2114・2118)

2114 は口縁部の下方に削り出しの突帯を巡らす。断面はセピア色を呈する。頭部外面にヘラ状工具による刻みが認められるが、記号が単なる焼成前の傷かはわからない。

2118 はやや斜め上方に立ち上がる頭部にやや肥厚した口縁が取りつく。口縁部内面はやや強くなってしまっており、図面よりもややシャープに作る。体部外面は叩きの後、搔き目調整を行い、内面の当て具痕は消されている。

台付長頭壺 (2117)

丸い体部に長い頭部と底部に脚台がつくが、両方とも欠けている。体部には上下 2 本の沈線の間に列点文を施す。21 号墳の時期のものではなく 6 世紀後半~7 世紀代の遺物が混入したものである。

台付壺 (2119)

出土箇所は D ブロック土器群・南トレーニチ (64 年 4 月 17 日付)、南中央トレーニチ (64 年 1 月 3 日付)、第 5 棺内とある。但し、第 5 棺 (ホ主体) 棺内については誤記または混入の可能性があり、現時点では出土箇所から除外しておく。脚台付の壺である。壺本体は大きく外反する口縁部をもち、頭部に 1 段、体部に 2 段の波状文を巡らす。脚台部は端部を上方に折り曲げ、側面に 5 個の方形透かしを穿つ。胎土は比較的精良で灰白色を呈し、他の須恵器とは質が異なる。

(2) B ブロック出土須恵器

杯 H 身 (2116)

ガラスケース内で保管されていた須恵器である。「B ブロック」と注記されているが、古墳名の注記はない。他の古墳で B ブロックの区割り名称を使用しているのは当該墳のみであり、遺物年代も問題が

ないのでここでは21号墳出土遺物として扱う。口径10.2cm、高さ5.0cm。立ち上がりはわずかに内傾し、口縁端部は内側に小さな段が付く。体部外面は丁寧なヘラ削りが行われており、黒い粒子が墨流しのようによく回転により流れている。器壁は厚く色調は青灰色を呈する。

(3) 主体部出土土器

イ主体出土土器（土師器）

甌（2120）

口径10.7cm、器高15.6cm。やや細長い体部に短く立ち上がる頸部を持つ。外面は縱方向のはけ目調整。内面はなで上げ調整を行う。

ハ主体出土土器（須恵器）

広口壺（2121）

頸部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は屈曲して短く立ち上がる。口縁部内外面とも比較的シャープに仕上げる。頸部は上下2段に波状文を巡らし、その間を突帯で区切る。体部外面は叩きの後、搔き目調整を行い、内面は当て具の痕をなで消している。口径14.5cm、器高21.0cm。色調は暗青灰色を呈する。

ニ主体出土土器（須恵器・土師器）

広口壺（2122・2124）

体部叩きの痕を残すが、形状から壺に分類する。2122はやや直上に開く頸部と上方に摘まみ上げる口縁部を有する。体部外面は叩き成形を行った後、上半部は搔き目調整を行い、叩きの痕を消しているが、下半部は叩き痕をそのまま残している。内面は当て具痕を消している。2124は斜めに開く頸部と上方に小さく摘まみ上げる口縁部を有する。体部内外面の成形・調整は2122と同様である。

甌（2123）

頸部は大きく外反し、口縁下端部をわずかに垂下させる。外面は叩きの痕をきれいになで消す。色調は灰白色を呈する。口径15.9cm、高さ19.9cm。

土師器甌（2125）

口径11.0cm、器高10.9cm。「く」の字状に外反する口縁部をもつ。体部は表面の摩滅著しく、調整痕の観察は難しい。内面には粘土紐の痕をなで消す。

ホ主体出土土器（須恵器）

広口壺（2126）

ニ主体2122と同形態の壺で、直上に開く頸部と上方に摘まみ上げる口縁部を有する。体部外面は叩き成形を行った後、上半部は搔き目調整を行い、叩きの痕を消しているが、下半部は叩き痕をそのまま残している。内面は当て具痕を消している。口径10.8cm、器高14.5cm。

高杯（2127）

第5棺（ホ主体）の遺物カードが挿入されているが、遺物袋には墳丘上の台付甌（2116）の破片も含まれている。しかも当該高杯は破片であり、副葬品としては考え難いので、当該遺物がホ主体からの出土かどうかは疑問である。ここでは、今のところ、ホ主体の副葬品としての扱いは保留しておきたい。底径9.2cm。台形の透かし3個を持つ。外面は搔き目痕を残す。

22号墳出土土器（須恵器）：図版26

調査日誌には「発掘の結果、古墳ではないことが確認された。」と記述されているが、杯蓋（2201）

が表土下から出土している。ほぼ完形で口径 10.5cm、高さ 3.1cm。

23 号墳出土土器（須恵器）：図版 26・写真図版 17

広口壺（2301）

口径 12.8cm、高さ 18.7cm。斜めに聞く頸部と端部を下方に垂下させる口縁部を有する。体部外面は叩き成形を行った後、上半部は搔き目調整を行い、叩きの痕を消しているが、下半部は叩き痕をそのまま残している。内面は當て具痕を消している。暗青灰色を呈する。

壺（2302）

口縁部は太い頸部から外上方へ立ち上がる。口縁部と頸部の境は突出し、稜線をもつ口縁部・頸部・体部に波状文を巡らす。口縁から体部全体に降灰があり、暗緑灰色に窯変している。底部外面に火襷の痕を残す。

25 号墳出土土器：図版 26・27・写真図版 18

(I) 土器群（須恵器）

杯口蓋（2501～2508）

調整や形態的特徴から以下の 3 つのタイプに分けることができる。

A グループ（2501・2508）

天井部と体部の境は鋭い棱を持ち、突出する。器壁はうすく仕上げる。口縁端部の内側に段をもつ。口径 12.7cm（2501）と 12.0cm（2508）。天井部のヘラ削りは 2 分の 1 程度行う。

B グループ（2502～2505）

天井部と体部の境は沈線状の凹部を巡らして区分している。稜線は甘くわずかに突出する。口縁端面は平坦で段をもつ。口径 11.3cm～12.0cm。天井部のヘラ削り 2 分の 1 から 3 分の 1 程度の範囲で行う。

C グループ（2506・2507）

天井部と体部の境は屈曲するが、A・B グループのような明瞭な段をもたない。口縁端面は丸く收めるかわずかの段をもつ。口径 12.0cm（2506）と 12.0cm（2507）。天井部のヘラ削りは 3 分の 1 程度の範囲で行う。

杯口身（2509～2512）

蓋と同様調整や形態的特徴から以下の 3 つのタイプに分けることができる。

A グループ（2510）

口縁端部はシャープで内側に傾斜し、段を持つ。器壁はうすく仕上げる。口径 12.2cm。

B グループ（2509・2511）

口縁端部は内側に傾斜し、小さな段を持つ。器壁はうすく仕上げる。口径 10.8cm（2509）と口径 10.4cm（2511）。

C グループ（2512）

口縁端面は平坦で、小さな凹部を持つ。器壁はやや厚い。口径 10.7cm。

壺（2513）

口縁部は太い頸部から外上方へ立ち上がる。口縁部と頸部の境は段をもつ。頸部に波状文を巡らす。口径 12.6cm、高さ 17.5cm である

(2) 封土（須恵器）

蓋（2514・2515）

口径 11.5cm と 11.0cm である。小片であるので復元口径が小さく出ている可能性もあり、杯蓋か有蓋高杯あるいは短頸壺の蓋かは判断できない。ただ、2514 については体部の高さから壺蓋の可能性が高い。

短頸壺（2516）

口径 7.8cm、高さ 9.5cm。頸部直下に共蓋の痕跡を残し、その痕跡が蓋 2521 と一致した。肩部に降灰。口縁端面は平坦で凹部を作る。肩部に焼き目調整を行う。

甕（2517）

口縁部直下に 2 本の断面三角形状の削り出し突帯を巡らす。

(3) 主体部出土土器

第 2 主体出土須恵器

甕（2519）が出土している。口径 11.0cm、高さ 12.5cm。口縁部と頸部の境は突出する。口縁端面は平坦に仕上げ口端面に凹部をもつ。

東西セクション出土須恵器

杯身（2520）が出土している。口径 11.0cm、高さ 5.0cm。立ち上がりはやや内側に傾き、口縁端部は平坦で端面に小さな凹部を設ける。器壁が厚い。

第 3 主体棺上部出土須恵器

短頸壺蓋（2521）が出土している。短頸壺 2516 の共蓋である。天井部と体部の境の稜は甘い。口縁端面は平坦であるが、内側を向き、小さな凹部を持つ。口径 7.8cm、高さ 3.5cm。

第 3 主体棺内出土土器

甕（2522）

頸部から口縁部へは屈曲して続く。口縁部外面に波状文を巡らす。口径 12.6cm、高さ 17.5cm。口縁部から体部下半まで自然釉がかかる。体部上半は板状工具での調整痕を残すが、下半から底部にかけて叩きの痕を残す。口縁端面は平坦で小さな段を設ける。

直口壺（2523・2524）

2523 は口径 10.8cm、高さ 15.0m。間隔の狭い断面三角形の突帯を 2 条巡らし、その下に波状文を巡らす。体部下半は叩きの痕を残すが、上半部は板状工具で調整している。肩部外面に自然釉が緑色に発色する。共蓋の痕跡は認められない。2524 は口径 10.6cm、高さ 14.6cm。頸部中央に 2 条の突帯、その下に波状文を巡らす。内面および口縁部外面には降灰がなく、共蓋の痕跡を残す。肩部外面に自然釉が緑色に発色する。体部下半は叩きの痕を残すが、上半部は板状工具で調整している。

土師器直口壺（2525）

口径 9.9cm、高さ 14.5cm。頸部はやや斜め直上方向に立ち上がる。頸部の突帯はないが、須恵器 2523・2524 を模倣したものと思われる。

埴輪（2526）

封土から埴輪の基部が出土しているが、当該古墳に配されたものではない。

29号墳出土土器：図版28・写真図版19

(1) 土坑（A遺構）出土土器

須恵器

杯口身・蓋

Aグループ (2901～2910)

内面に当て具痕を有する一群で、杯身が5個体、蓋が5個体ある。焼成時の蓋と身のセットがそのままの組み合わせで納められており、計5組のセットとなる。杯蓋の口径11.6cm～12.0cm、杯身の口径10.0cm～10.3cmで大きさが揃う。焼成は全体に甘い。蓋は天井部と体部の境は稜をもち、わずかに突出するが、稜線は甘い。口縁端面は水平で段をもつ。杯身は立ち上がりが内傾し、口縁端面は内面側に傾き、小さな段を持つ。

Bグループ (2911～2918)

表の通りすべて蓋と身が組み合う。Aグループとは異なり、自然釉が発色する硬質の仕上がりである。内面の当て具痕は見られない。蓋は天井部と体部の境はわずかに突出する。口縁部は端面が水平に開き小さな段をもつ。杯身は立ち上がりが内傾し、口縁端部を丸く収めるもの（2912・2914）と口縁端面が水平に開き小さな段をもつもの（2916・2918）がある。杯蓋の口径12.0cm～12.5cm、杯身の口径10.3cm～10.6cmで、Aグループの一組よりわずかに大きい。

Cグループ (2919～2922)

Aグループ・Bグループ以外のものを一括した。蓋（2919・2920）は天井部が平らで丸みを持たない。口縁端部はわずかに内側に向き、小さな段をもつ。身（2921・2922）は口縁端部を丸く収める。2921は土師質の仕上がりである。この蓋2個体と身2個体は焼成時のセット組ではないが、供獻時に互いに組み合わせて埋納されたと思われる。口径は蓋が12.4cmと12.8cm、身が11.0cmと10.0cmである。

土師器

椀 (2924)

口径11.0cm、高さ6.0cm。底部からゆるやかに立ち上がり、上半部で直上方向に立ち上がる。口縁端部は内側に面をもつ。内外面に磨きの痕跡を残す。

鉢 (2925)

平らな底部に湾曲しながら直上方向に立ち上がる体部を持ち、口縁部はわずかに内傾し、端面を内側に向ける。内面にハケ目調整の痕跡を残す。口径11.1cm、高さ7.0cm

直口壺 (2926)

残存高9.7cm。調査日誌に長頸壺と記載されているが、口頭部を欠いており、長頸壺となるのか直口壺形態になるのかはわからない。体部外面にハケ目調整、内面になで調整の痕を残す。

甕 (2927～2929)

2927の口縁は直上方向に立ち上がる。内外面ともにハケ調整を行う。口径11.0cm、高さ10.5cm。

2928は口径12.7cm、高さ13.6cm、2929は口径13.2cm、高さ14.8cmでともに口縁部を「く」の

29号墳須恵器杯類の組み合わせ

グループ	杯蓋	杯身
A	2901	2902
	2903	2904
	2905	2906
	2907	2908
	2909	2910
B	2911	2912
	2913	2914
	2915	2916
	2917	2918
その他	2919	
	2920	
		2921
		2922

字状に外反させる。内外面ともにハケ調整を行う。

(2) C 遺構出土須恵器

短頸壺（2930）

口径 8.0cm、高さ 9.0cm。口縁部は短く立ち上がりわずかに内傾する。口縁端面は平坦で、わずかに内側に傾ける。底部外面は手持ちのヘラ削りを行う。肩部に自然釉がかかるが、口頸部には釉がかかつてないので共蓋を伴っていたことがわかる。

30 号墳出土土器（須恵器）：図版 29

器台（3001）

杯部と脚端部を欠く。3段に分割され、各段に2条または3条の波状文を配する。透かしは三角形で各段千鳥状に配する。4方透かし。

31 号墳出土土器：図版 29

須恵器杯H蓋・身と土師器の甕が出土している。須恵器杯身 3101 は口径 8.7cm、高さ 2.4cm で、当古墳群の杯では最小である。また、蓋 3102 は口径 10.4cm、高さ 3.5cm である。ともにヘラ切り後、板などで調整を行った痕跡を残す。

32 号墳出土土器（須恵器）：図版 29

須恵器 3201 と 3202 が出土しているが、3201 は平安時代の突帯壺、3202 も壺の体部で奈良時代～平安時代のものであろう。

33 号墳出土土器（須恵器）：図版 29

33 号墳は古墳とは認定されていない。壺の底部につく脚部（3301）が採集されているが、破片であり、全体の形状については不明である。

34 号墳出土土器（須恵器）：図版 29・写真図版 15

杯H身（3401・3402）

3401 は口径 10.7cm、3402 の口径は推定で 9.6cm であるが、ともに小片で復元口径は正確を期し難い。

高杯（3403～3405）

3403 は小片で体部下半に段を持つ無蓋の高杯である。3405 は口径 9.6cm、高さ 8.0cm、脚径 7.4cm の無蓋高杯で杯体部と底部の境を沈線で分けている。

壺（3406・3407）

3406 は口径 8.9cm、高さ 10.5cm。体部径 7.0cm、口縁部と頸部の境はわずかに稜をもつ。体部には1条の沈線を施すが、穿孔は施されていない。底部外面は手持ちのヘラ削りが施されている。3407 は口縁部を欠く。口縁部と頸部の境は突出し、明瞭な稜をもつ。体部には1条の沈線を施すが、穿孔は施されていない。底部外面は手持ちのヘラ削りが施されている。

平瓶（3409・3410）

3409は口径 6.8cm、高さ 13.2cm。口頭部はラッパ状に斜めに開く。肩部と体部の境は丸く、体部径に比して高さが高い。肩部から体部にかけて自然軸がかかるが、カセの状態になっている。底部外面はヘラで調整している。3410は35号墳出土の破片と接合した。口径 6.4cm、高さ 15.6cm。頸部は斜めに立ち上がるが、口縁部付近で屈曲させてやや直上方向に立ち上がらせる。頸部と肩部境には2cm弱の閉塞円孔が確認できる。底部外面は回転のヘラ削りを行う。

提瓶（3411）

口径 7.8cm、高さ 24.7cm。頸部に2本の沈線を施す。体部の片側が搔き目調整を行い、もう片側は閉塞円板の痕跡を残し、なで調整を行う。

その他

3408は体部下半のヘラ削りが行われており、壺か甌と思われる。3412は口径 15.2cm の甌で、口縁部は肥厚し、下端部は垂下する。3413は高杯の脚部である。透かしは縱長の方形透かしになると思われるが幅・数は不明である。

35号墳出土土器：図版 30

須恵器

長頸甌（3501）は口径 9.8cm の口頭部の破片である。体部に3条の沈線を巡らせている。内外面は降灰により緑灰色に変色している。平瓶（3502）は口径 6.7cm。体部を欠く。

土師器甌（3503）

球体の体部にやや水平方向に開く口縁部をもつ。口縁端部は上方に摘み上げられている。体部外面は摩滅が著しいが、一部にハケ目調整の痕が残る。胎土に砂粒を多く含む。口径 17.2cm、高さ 13.5cm。

36号墳出土土器（須恵器）：図版 30

杯蓋（3601・3603・3604）

3601は天井部と体部との境に明瞭な稜をもち、口縁端部にも段があり、3603 や 3604 とは異なり、古い様相をもつ。

3603・3604は天井部が平坦で、径が広いので、無蓋の杯身の可能性もあるが、杯H身（3602）の存在によりここでは蓋として扱う。口径は 3603 が 11.5cm、3604 が 10.6cm で、ともにヘラ切り後、なで調整を行う。

杯H身（3602）

口径 11.8cm、高さ 3.4cm、受部径 14.2cm。体部は直線的に立ち上がり、立ち上がりは低く内側に倒れる。底部外面には蓋の口縁部の小破片が融着している。内面には降灰が見られるので、蓋を被せた状態で焼成したのではなく、蓋を下に置いて重ね焼きしたと思われる。

無蓋高杯（3605・3606）

3605は口径 10.2cm、高さ 10.1cm、脚径 7.8cm。脚は上端の径と下端の径の差が小さく、底面近くで大きくほぼ水平に開く。

短頸壺（3607）

短い頸部に外反する口縁部をもつ。口縁部は図よりももう少し厚みが薄く、焼けひずんでいる。肩部には自然軸がかかり体部との間に沈線を巡らす。体部は全体にヘラ削りによって整形している。口径 10.8cm、高さ 11.0cm。

直口壺（3608）

頸部に 2 条の沈線を巡らし、体部に平行叩きの痕を残す。口径 6.9cm。

その他

高杯の脚と思われるもの（3609）や土師器壺（3610）が出土している。

38 号墳出土土器（土師器）：図版 30

土師器壺 3801 は「く」の字状に外反する口縁部をもち、内外面ともはけ調整を行う。口径 21.7cm。

39 号墳出土土器（須恵器）：図版 30

杯口蓋（3901）

口径 11.8cm、高さ 11.8cm。天井部が高く、天井部と体部の境は屈曲して稜をもつ。

杯口身（3902）

口径 10.8cm、受部径 13.0cm、高さ 3.5cm で、立ち上がりは極めて低い。体部外面はヘラ切り不調整。底部外面に自然軸かかる。自然軸は底部から体部への流れが認められるので、杯身の天地を逆にして焼成したと思われる。

高杯（3903）

底径 7.1cm。脚部は中央に 1 条の沈線を巡らせ、ハの字状に開き、端部では水平となる。

壺（3904）

やや斜めに立ち上がる頸部から外反する口縁部を持つ。口縁端部は下方に垂下する。頸部には搔き目調整を行う。

40 号墳出土土器（土師器）：図版 30

40 号墳は古墳とされているが、出土遺物は手づくねによる土師器小皿（4001）で中世のものである。

41 号墳出土土器（須恵器）：図版 31

高杯（4101～4103）・器台（4104）・壺（4105）などが出土しているが、古墳とは判断されていない。

58 号墳出土土器（須恵器）：図版 31・写真図版 15

短脚高杯（5802）は 21 号墳 D ブロック出土のものと接合したが、58 号墳では石室内からの出土が確実であるので、ここでは 58 号墳の遺物として扱う。口径 13.8cm、高さ 10.2cm の杯部に短い脚部を付す。脚部は高さ 2.5cm、底部径 9.0cm で、脚端部は水平に開く。一辺 1cm 前後の方形透かしが 2 方につく。

平瓶（5801）は口径 8.0cm、高さ 13.5cm。丸い体部にラッパ状に開く口部をもつ。肩部と体部の境には沈線を巡らす。底部はヘラ削りで仕上げる。

無注記遺物（須恵器）：図版 31

蓋（0001）

高杯か短頸壺の蓋である。灰白を呈し、天井部には別の器物を載せて焼成した痕跡を残す。天井はヘラ削りを施しているが、器壁は厚く、口縁端部の段はみとめられない。天井部と体部の境の仕上がりも稚拙で、非熟練工による模倣的製品の色彩が強い。口径 13.3cm。

高杯（0002）

杯部中央に段を設ける。脚部は中央に 1 条の沈線を施す。ハの字状に開き、端部で水平となる。口径 9.5cm、高さ 9.0cm、脚径 7.0cm。

短頸壺（0003）

完形。口径 8.5cm、高さ 8.3cm。体部下半から底部にかけてヘラ削りされている。肩部に共蓋の痕跡を残す。

平瓶（0004・0005）

いずれかが 14 号墳出土のものである。0004 は口径 6.1cm、高さ 12.0cm。頸部から口縁部にかけては漏斗状に広がる。体部外面は板状工具による調整痕跡を残す。底部外面はヘラ削りを行う。0005 は口径 5.8cm、高さ 12.1cm。頸部から口縁部にかけてはわずかに広がる程度である。頸部には 1 条の沈線を巡らす。頸部内面中央には接合痕跡を残す。体部は板状工具による調整痕跡を残す。底部外面は手持ちヘラによる削りが行われている。

無頸壺（0006）

口径 7.6cm、高さ 9.5cm。体部中央と下位に削り出しの段をもつ。口縁部から下位の段まで搔き目調整を行い、下位から底部にかけて手持ちのヘラ削りを行う。

糸切り椀（0007）

平安時代後期の椀である。口径 13.6cm、高さ 5.2cm、底径 6.6cm。体部は直線的に斜め上方に開く。高台の側面の高さはほとんど消失している。

3. 小結

西条古墳群は古墳時代の須恵器編年に基づけば、(A) 5 世紀後半から 6 世紀前半 (TK23 型式～MT15 型式段階)、(B) 7 世紀代 (TK217 型式段階 / 飛鳥 I・II) 以降の 2 つの時期に大きく 2 つに分かれる。

5 世紀後半から 6 世紀前半の遺物群と古墳

(1) 土器群の特徴

21・25・29 号墳のいずれもの埴丘に土器群が供獻されていた。土器群の存在は西条古墳の中で最も古く位置づけられる 3 基の古墳に共通している点、さらには各主体部の検出上面に置かれていた状況から、各主体部埋葬後の供養に伴う供獻物と判断している。この 3 つの土器群には多くの須恵器杯類が出土しているが、それぞれの須恵器は古墳ごとに異なる様相を呈しているので、ここで簡単にまとめておくことにする。

まず、21 号墳の土器群の須恵器杯 (2101～2110-2115) は 2115 の 1 点を除き、すべて器面が暗灰色、断面がセピア色を呈しており、同じ窯での一括製品と考えてよい。蓋の口径 12.8cm～13.5cm、身の口径は 10.7cm～11.2cm である。口径の拡大化や立ち上がりの内傾化などの特徴から MT15 型式のも

のと推定される。器壁の薄さ・細部の調整などに関しては熟練度が高く、色調から見て陶邑窯製の可能性が高いが、陶邑窯からの工人の移動による在地窯での生産の可能性もある。いずれにしても陶邑窯の工人の手によるものと考えてよい。これに対して 29 号埴土坑（A 遺構）埋納の杯には 3 つのグループがあり、それぞれ蓋と身をセットにして埋納されていたようである。このうち 2 つのグループは焼成時の蓋と身の組み合わせ関係そのままが持ち込まれていることから、これらの埋納製品は近隣の在地窯から運ばれてきたと考えてよい。蓋の口径 11.6cm ~ 12.8cm、身の口径 10.0cm ~ 11.0cm で、21 号埴より一回り小さいが、21 号埴よりも器壁も厚く、細部の調整の熟練度などに関しては 21 号埴よりも低い。この点について一般的に MT15 型式は杯の口径の拡大に位置付けられるが、口径の小さいものも存在している（田中清美氏のご教示による）とのことであり（※1）、21 号埴・29 号埴の土器群とともに MT15 型式段階の製品としても矛盾はない。ただ、29 号埴の土器群については 2921 や 2922 のように口縁端部の段を消失した新しい要素を持つものもあり、21 号埴の土器群よりも後出ということになる。従って、21 号埴の土器群を陶邑窯産とし、29 号埴の土器群を在地産とすれば、加古川での須恵器生産の開始は MT15 型式段階となる。ただ、東茨 1 号埴出土の TK23 型式とされる須恵器の胎土分析結果は神野大林窯の分析値と一致することが報告（『東茨 1 号埴』（兵庫県文化財調査報告第 431 冊 2012 年））されており、先に述べたように 21 号埴の土器群が陶邑窯産ではなく、陶邑窯の工人による在地産の可能性もあり、当地域の須恵器生産の開始を巡る問題については今後検討が必要である。

なお、25 号埴土器群は蓋の口径 12.0cm ~ 12.7cm、身の口径 10.4cm ~ 10.7cm であり、3 基の古埴の土器群の中で最も口径が小さいが、TK23 型式から MT15 型式までの古相から新相までの幅広い型式差を含んでいる。ここでは、古い時期の杯蓋が後に使用されたものと判断し、土器群の供獻時期を MT15 型式の年代に合わせておく。

※1 21 号埴から出土している 2115 は色調・胎土も 2101 ~ 2110 とは異なり、口径が 12.5cm と一回り小さい。

(2) 主体部の須恵器

25 号埴

遺物年代と埋葬時期に時間差がないということを前提とすると、西条古墳群の中では 25 号埴第 3 主体が最も古く、TK23 型式併行期に位置付けられる。同じく第 2 主体出土の甕は第 3 主体の脇よりも新しく位置付けられ、TK47 型式相当になろうか。いずれにしても、25 号埴主体部副葬の各須恵器は陶邑窯の製品の可能性が高い。

21 号埴

ハ主体の壺が先行する要素があるが、それ以外の主体部出土須恵器は形態や製作技法が共通しており、各主体部において、それほどの時間幅はないものと思われる。遺物年代については TK23 型式まで遡ることは難しく、土器群が MT15 型式段階とされるので、その間をとって TK47 型式相当としておきたい。当該主体部副葬の須恵器も陶邑窯の製品の可能性が高い。

23 号埴

主体部と思われる箇所から壺と甕が出土している。甕は古い要素をもつが、壺は 21 号埴出土のものと共通しており、TK47 型式併行期と考えておきたい。当該古墳出土須恵器も陶邑窯の製品の可能性が高い。

7世紀代の古墳群と出土須恵器

西条古墳群の造営は5世紀後半頃にB支群で始まり、6世紀前半ころまで続いているが、その後、6世紀半ばから7世紀前半までの時期の古墳の造営がみられない。もちろん、緊急調査や墓地転用に伴う消失という側面もあり、すべての古墳の悉皆的な調査が行われたというわけではないが、この時期の遺物がほとんど出土していないということは古墳の造営が6世紀半ばまでに一旦終わったということになる。

7世紀前後になると A・C群でそれぞれ横穴石室古墳の造営が行われるようになる。この中で年代の指標となる杯Hの出土状況をみると、杯Hの蓋と身とともに出土しているのは、4号墳・31号墳・34号墳・36号墳・39号墳のみで、しかも出土点数はごくわずかである。以外の古墳は蓋のみか、蓋が逆転した形態の無蓋の杯身のみである。この中で、杯Hの身の大きさをみると、最も大きな39号墳3602で口径11.8cm、高さ3.4cmで、最小は31号墳3101で口径8.7cm、高さ2.4cmである。これを西条古墳群の南の台地に展開する神野大林窯跡群で最も新しい2号窯(TK209型式)と比較すると、2号窯第2次窯体出土の杯身の口径が13.6cm～16.1cmで、平均14.2cm、器高の平均が3.6cm、第1次・第2次窯体床面間出土の杯蓋の口径が13.2cm～13.6cmで平均13.4cm、器高の平均が4.1cmである。従ってTK209型式とされる2号窯よりも一回り小さいことが明らかで、それまで主力器種として存続してきた杯H形態としての最終末様相を呈している。最終的には副葬品は杯Hに代わって無蓋の杯身などが主体となり、7号墳や14号墳のようなかえりを持つ蓋と身の新しいセット(杯G)も導入される。また、各古墳に平瓶の副葬が目立つのも当古墳群の特徴と言えるかもしれない。このほか、石室内外からの7世紀末～8世紀代の遺物の出土も少なくない。このあたりの状況は西条廃寺の存在も関係しているのであろうか。また、今回、整理はできなかったが、平安時代末から中世にかけての遺物も数多く出土している。

古墳群出土須恵器からみた加古川東岸の須恵器生産の開始と継続

当地域の生産地として西条古墳群の南にある神野大林窯跡群と東に所在する八幡町の野村・野新村窯跡群がある。神野大林窯跡群は現在のところ4基からなる窯跡群で2010年に兵庫県教育委員会によって発掘調査が行われている。窯跡の操業時期はTK10～TK209型式段階である。しかしながら、神野大林窯跡群の稼働期には西条古墳群で古墳が造営されておらず、同窯の製品はほとんど出土していない。ただ、当古墳群では29号墳出土須恵器のように在地産と見られる須恵器が供献されており、神野大林窯跡群に先行する須恵器窯が存在したことはほぼ確実であろう。

7世紀代の古墳出土の須恵器の生産地については、加古川市八幡町の野村窯・野新村窯群が有力である。野村窯は6世紀後半から7世紀世紀にかけて4基以上からなる窯跡群であるが、発掘調査は行われておらず、実態は明らかではない(『加古川市史』第7巻1985年)。また、野新村窯跡群については7世紀半ばから8世紀にかけて3基以上からなる窯跡群(『加古川市史』第7巻1985年)で、このうち1号窯の発掘調査が行われている(『野新村1号窯発掘調査報告書』2010年)。

追記

5世紀後半から6世紀前半の遺物群については、田中清美氏から数多くご教示をいただいた。

記して感謝申し上げたい。

(森内秀造)

報告 番号	古墳 名称	出土位置	種別	器種	大きさ (cm)		
					口径	器高	底径
0101	1号墳	入口底（前の方）	須恵器	杯口蓋	10.8	4.5	
0102	1号墳	石室中央西側壁	須恵器	杯口蓋	11.1	4	
0103	1号墳	中央西側壁-139	須恵器	杯口蓋	11.6	9	
0104	1号墳		須恵器	杯口蓋	11.8	4.6	
0105	1号墳	盛土・石室西側壁	須恵器	無蓋高杯	10.0	10.2	8.7
0106	1号墳	石室東側壁	須恵器	無蓋高杯	12.4		
0107	1号墳	石室中央	須恵器	長頸壺	15.9		
0108	1号墳	石室入口櫻乱層	須恵器	直口壺	10.4		
0109	1号墳	石室入口地上28cm上の複数層	須恵器	平盤	6.8		
0110	1号墳	石室入口-131	須恵器	長頸壺		(18.5)	10.8
0111	1号墳	盛土内	須恵器	杯口蓋	11.6		
0112	1号盛土		須恵器	高杯			8.8
0113	盛土		須恵器	器台	35.4		
0114	盛土内		須恵器	蓋口縁部	23.2		
0201	2号墳		須恵器	杯口蓋	12.5	4.6	
0202	2号墳	P11-259	須恵器	杯口蓋	11.6	3.4	
0203	2号墳	P10-147	須恵器	杯口蓋	9.9	4.3	
0204	2号墳	P11	須恵器	杯口蓋	9.9	3.6	
0205	2号墳	石室内（崩落石内側）	須恵器	杯口蓋	9.7	7.5	
0206	2号墳		須恵器	杯口蓋	12.9	(3.5)	
0207	2号墳		須恵器	無蓋高杯	12.0	7.3	8.3
0208	2号墳	P9. p 19石室内（崩落石内側）	須恵器	無蓋高杯	8.4	(8.1)	7.8
0209	2号墳	石室内（崩落石内側）	須恵器	台付壺	10.1	14.3	10.1
0210	2号墳	P3-153	須恵器	長頸壺			6.8
0211	2号墳	P1石室入口付近一括	須恵器	小皿	8.3	1.9	4.7
0212	2号墳	p12	須恵器	赤切り壺	14.6	5.5	6.5
0213	2号墳	p 17	須恵器	赤切り壺	14.3	6.0	4.5
0214	2号墳	p 17	須恵器	赤切り壺	13.3	4.9	4.6
0401	4号墳	奥壁	須恵器	杯口身	10.9	3.7	
0402	4号墳	奥壁	須恵器	杯口身	10.4	3.0	
0403	4号墳	奥壁・澳道上床面	須恵器	杯口身			
0404	4号墳	奥壁・澳道上床面	須恵器	杯口身			
0405	4号墳		須恵器	杯口蓋	10.5	3.1	
0406	4号墳	奥壁	須恵器	杯口蓋	11.8	2.8	
0407	4号墳		須恵器	杯口蓋	10.7		
0408	4号墳	奥壁	須恵器	高杯	11.0	10.0	8.1
0409	4号墳	奥壁	須恵器	無蓋高杯	9.2	9.2	8.2
0410	4号墳	奥壁	須恵器	無蓋高杯	9.5		
0411	4号墳	奥壁	須恵器	壺			

出土土器一覧表 (1)

報告番号	古墳名称	出土位置	種別	器種	大きさ(cm)		
					口径	器高	底径
0412	4号墳	右側玄室床面	須恵器	平板	4.7	10.4	
0413	4号墳		須恵器	平板	4.8	10.2	
0414	4号墳	右側玄室床面	須恵器	直口蓋	7.4		
0415	4号墳		須恵器	直口蓋	6.5		
0416	4号墳		須恵器	杯B	15.9		
0417	4号墳	奥壁	須恵器	長頸蓋			
0418	4号墳	奥壁	須恵器	長頸蓋	14.3以上	37.5以上	
0601	6号墳	P6	須恵器	杯E蓋	10.6	4.0	
0602	6号墳	浮土	須恵器	杯E蓋	11.3	3.4	
0603	6号墳	P4	須恵器	杯	9.3	2.8	
0604	6号墳	P6	須恵器	杯	10.0	3.5	
0605	6号墳	P9	須恵器	杯	11.1	3.9	
0606	6号墳	浮土	須恵器	杯	11.8	3.4	
0607	6号墳	浮土	須恵器	杯			
0608	6号墳	P2	須恵器	平板	6.5	11.5	
0609	6号墳	P3	須恵器	杯A	12.3	3.1	8.8
0610	6号墳	P9	土師器	碗	16.6	7.0	10.1
0611	6号墳	P8	土師器	甌			
0612	6号墳	P1	土師器	甌	11.5	21.7	
0701	7号墳	盛土トレンチ	須恵器	杯G蓋	8.0		
0702	7号墳	床面	須恵器	杯G	8.9	3.2	
0703	7号墳	西側	須恵器	杯H蓋	11.2	3.3	
0704	7号墳	床面	須恵器	提瓶			
1101	11号墳		須恵器	壺・瓶			
1102	11号墳	表土	須恵器	長頸蓋			
1301	13号墳	床上A主体部	須恵器	甌	17.8		
1401	14号墳		須恵器	高杯	10.7	9.9	8.3
1402	14号墳		須恵器	杯底			
1403	14号墳		須恵器	杯G蓋	10.8・9.0	4.0	
1404	14号墳		須恵器	杯G蓋	8.8・10.7	3.1	
1405	14号墳		須恵器	杯G蓋	9.5・11.3	3.8	
1406	14号墳		須恵器	甌	3.4	8.7	
1407	14号墳		須恵器	台付短頸蓋	9.8	17.5	
1408	14号墳		土師器	甌	7.2	6.7	

出土土器一覧表（2）

報告 番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ (cm)		
					口径	器高	底径
2101	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.8	4.5	
2102	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.5	5.0	
2103	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.4	4.7	
2104	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.0	4.7	
2105	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.0	4.7	
2106	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	13.0	4.8	
2107	21号墳	土器群	須恵器	杯H身	11.1	5.0	
2108	21号墳	土器群	須恵器	杯H身	11.3	4.7	
2109	21号墳	土器群	須恵器	杯H身	10.7	4.6	
2110	21号墳	Dブロック土器群	須恵器	杯H身	11.1	4.7	
2111	21号墳	Dブロック	須恵器	高杯脚			8.4
2112	21号墳	土器群	須恵器	無蓋高杯	14.2	10.9	9.0
2113	21号墳	土器群	須恵器	甕	9.5	10.0	
2114	21号墳	Dブロック	須恵器	甕	22.0		
2115	21号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.5	4.3	
2116	21号墳	Bブロック	須恵器	杯身	10.2	5.0	
2117	21号墳	Dブロック	須恵器	台付長頸甕			
2118	21号墳	土器群	須恵器	甕	16.1	22.5	
2119	21号墳	第6格棺内・南中央トレンチ	須恵器	台付甕			
2120	21号墳	イ主体	土師器	甕	10.7	15.6	
2121	21号墳	ハ主体	須恵器	広口甕	14.5	21.0	
2122	21号墳	ニ主体	須恵器	広口甕	10.5	15.0	
2123	21号墳	ニ主体	須恵器	甕	15.9	19.9	
2124	21号墳	ニ主体	須恵器	甕	12.0	14.5	
2125	21号墳	ニ主体	土師器	広口甕	11.0	10.9	
2126	21号墳	ホ主体	須恵器	広口甕	10.8	14.5	
2127	21号墳	第5格棺内	須恵器	高杯			9.2
2201	22号墳	表土下	須恵器	杯蓋	10.5	3.1	
2301	23号墳		須恵器	広口甕	12.8	18.7	
2302	23号墳		須恵器	甕	9.0	10.4	
2501	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.7	4.8	
2502	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.0	4.6	
2503	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	11.7	4.5	
2504	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	11.5	5.0	
2505	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	11.3	4.5	
2506	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.0	4.4	
2507	25号墳	土器群	須恵器	杯H蓋	12.0	4.4	
2508	25号墳	墳頂	須恵器	杯H蓋	12.1	4.5	

出土土器一覧表 (3)

報告 番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ (cm)		
					口径	器高	底径
2509	25号墳	土器群	須恵器	杯口身	10.8	4.9	
2510	25号墳	土器群	須恵器	杯口身	12.2	4.5	
2511	25号墳	土器群	須恵器	杯口身	10.4	5.0	
2512	25号墳	土器群	須恵器	杯口身	10.7	4.7	
2513	25号墳	土器群	須恵器	甌	10.2	10.7	
2514	25号墳	封土	須恵器	杯口蓋	11.5		
2515	25号墳	盛土中	須恵器	杯口蓋	11.0		
2516	25号墳	封土	須恵器	短須蓋	7.8	9.5	
2517	25号墳	封土	須恵器	甌	34.4		
2518	25号墳	封土	土師器	甌	9.6	理7.9	
2519	25号墳	第2主体	須恵器	甌	11.0	12.5	
2520	25号墳	東西セション西側	須恵器	杯口身	11.0	5.0	
2521	25号墳	第3主体 柱上部	須恵器	有蓋高杯蓋	11.9	5.4	
2522	25号墳	第3主体	須恵器	甌	12.6	17.5	
2523	25号墳	第3主体	須恵器	直口甌	10.8	15.0	
2524	25号墳	第3主体	須恵器	直口甌	10.6	14.6	
2525	25号墳	第3主体	土師器	直口甌	9.9	14.5	
2901	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	11.8	4.4	
2902	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.3	4.5	
2903	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	11.6	4.5	
2904	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.0	4.6	
2905	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.6	4.0	
2906	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.0	4.3	
2907	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.0	4.5	
2908	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.0	4.6	
2909	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	11.9	4.2	
2910	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.2	4.3	
2911	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.0	4.1	
2912	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.6	5.1	
2913	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.0	4.4	
2914	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.3	4.8	
2915	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.3	4.9	
2916	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.4	4.6	
2917	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.5	(4.1)	
2918	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.6	4.9	
2919	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.4	4.5	
2920	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口蓋	12.8	4.5	
2921	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	11.0	5.0	
2922	29号墳	土坑 (A遺構)	須恵器	杯口身	10.0	5.5	

出土土器一覧表 (4)

報告番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ(cm)		
					口径	器高	底径
2923	29号墳	土坑(A遺構)	須恵器	無蓋高杯	12.7	8.5	
2924	29号墳	土坑(A遺構)	土師器	杯	11.0	6.0	
2925	29号墳	土坑(A遺構)	土師器	鉢	11.1	7.0	6.9
2926	29号墳	土坑(A遺構)	土師器	直口盞		(9.7)	
2927	29号墳	土坑(A遺構)	土師器	甕	11.0	10.5	
2928	29号墳	土坑(A遺構)	土師器	甕	12.7	13.6	
2929	29号墳	土坑(A遺構)	土師器	甕	13.2	14.8	
2930	29号墳	C遺構	須恵器	短頸甕	8.0	9.0	
3001	30号墳	墓地内出土遺物	須恵器	器台			
3101	31号墳	No.3	須恵器	杯	8.7	2.4	
3102	31号墳	No.16	須恵器	杯口蓋	10.4	3.5	
3103	31号墳	No.4	土師器	甕	11.9		
3201	32号墳	盛土中	須恵器	双耳盞			
3202	32号墳	石室内	須恵器	盞底部			
3301	33号墳	No.1	須恵器	造脚部	8.7		
3401	34号墳	石室内	須恵器	杯口身	10.7		
3402	34号墳	石室内	須恵器	杯口身	9.6		
3403	34号墳		須恵器	無蓋高杯	10.0		
3404	34号墳	石室内	須恵器	高杯			9.2
3405	34号墳	石室内 p 6 + No. 36	須恵器	無蓋高杯	9.6	8.0	7.4
3406	34号墳	P 2-67	須恵器	甕	8.9	10.5	
3407	34号墳	石室内	須恵器	甕			
3408	34号墳	PSNo.73	須恵器	盞または甕			
3409	34号墳	PINo. 66	須恵器	平瓶	6.8	13.2	
3410	34号墳	P 9 No. 74(35号破片)	須恵器	平瓶	6.4	15.6	
3411	34号墳	P 3-68	須恵器	提瓶	7.8	24.7	
3412	34号墳		須恵器	甕	15.2		
3413	34号墳		須恵器	高杯			8.8
3501	35号墳	S1 No. 56	須恵器	長頸甕	9.8		
3502	35号墳		須恵器	平瓶	6.7		
3503	35号墳	H4-No.62	土師器	甕	17.2	13.5	
3601	36号墳	S1 -Na47	須恵器	杯口蓋	13.4		
3602	36号墳	石室内(浮)	須恵器	杯口身	11.8	3.4	
3603	36号墳	石室内(浮)	須恵器	杯口蓋	11.5	3.6	
3604	36号墳	石室内(浮)	須恵器	杯口蓋	10.6	3.6	
3605	36号墳	S4 -Na50	須恵器	無蓋高杯	10.2	10.1	7.8
3606	36号墳	S4 -Na50	須恵器	無蓋高杯			
3607	36号墳	S3-49	須恵器	短頸甕	10.8	11.0	
3608	36号墳	盛土中Na46	須恵器	直口盞	6.9		

出土土器一覧表(5)

報告 番号	出土遺構	出土位置	種別	器種	大きさ (cm)		
					口径	器高	底径
3609	36号墳	盛土中No.46	須恵器	高杯			9.9
3610	36号墳	盛土中No.46	土師器	甕			
3801	38号墳		土師器	甕	21.7		
3901	39号墳	No.32	須恵器	杯盤	11.8	5.0	
3902	39号墳	No.32	須恵器	杯身	10.8	3.5	
3903	39号墳	No.32	須恵器	高杯	7.1		
3904	39号墳	No.32	須恵器	蓋	17.6		
4001	40号墳		土師器	小皿	12.3		
4101	41号墳	西南部・浮土	須恵器	高杯			
4102	41号墳	No.5	須恵器	高杯	12.3		
4103	41号墳	西南部・浮土	須恵器	高杯			13.1
4104	41号墳	浮き土	須恵器	器台	32.8		
4105	41号墳	石室内	須恵器	蓋			11
5801	58号墳	No.18	須恵器	短脚高杯	13.8	10.2	
5802	58号墳	No.10	須恵器	平瓶	8.0	13.5	
0001			須恵器	蓋・高杯蓋	13.3	4.7	
0002			須恵器	無蓋高杯	9.5	9.0	7.0
0003			須恵器	短頸甕	8.5	8.3	
0004			須恵器	平瓶	6.1	12.0	
0005			須恵器	平瓶	5.8	12.1	
0006			須恵器	無頸甕	7.6	9.5	
0007			須恵器	米切り碗	13.6	5.2	6.6

出土土器一覧表 (6)



ガラスケースに展示された土器（西条会館）

第2節 増輪

21号墳より増輪が木箱5箱分出土している(図版25)が、大多数で摩耗が著しく、増輪内外面の調整が確認できない破片が多いが、内外面の調整と突帯が確認できる資料11点を図化した。なお、これらのうちで突帯をもつ体部片を中心として、黒斑が確認できる体部片4点と朝顔型増輪片1点、底部片3点、突帯を持つ胴部片3点をとりあげている。色調は褐色、淡褐色および黒斑のために黒色を呈している。

2128は、朝顔形または壺形増輪の口縁部である。大きく外反して広がる口縁部の突帯を挟む屈曲部分である。突帯部の復元径は26cm、突帯の形態は台形で幅1.9cm、高さ1.1cm、突帯部分の器壁厚さ2.4cm、胸部で1.1～1.4cm、外面は突帯の上部の一部と下部に縦ハケ調整がみられ、器壁断面より粘土接合痕が確認できる。内面は摩耗のため調整が確認できない。色調は褐色である。

2131は、突帯部での復元径は20cm、突帯の幅1.6cm、高さ0.7cmで、突帯の形はM字形を呈し、ナデ調整をしている。外面の調整は縦ハケをする。さらに突帯下部には板状の工具による圧痕(板オサエ)がみられる。内面は斜め方向のハケと横ハケで、静止痕がみられる。色調は褐色である。

2132は、2条の突帯が残る胴部片で、上部の突帯部での復元径で22cm、上下とも突帯幅1.1cm、高さ0.9cm、胸部厚さ0.8cmで薄手である。突帯はM字形になる。2条の突帯間の幅は5.5cmで、突帯部の一部に黒斑が見られる。調整はヘラ削りの後に横ナデ調整をしている。内面は摩耗しているため不明であるが、わずかに横ハケの痕跡もある。多くの増輪片のなかで、薄手ながら良質なつくりである。色調は淡褐色である。

2133は突帯1条が残る胴部片で、縦間に黒斑が確認できる。突帯部での復元径は21.6cmで、突帯幅2cm、高さ0.6cmで台形を成すが扁平である。突帯下部で粘土接合痕が確認できる。胸部厚さ1.2cmで厚手である。突帯下部に板オサエがみられる。調整は、突帯部は横ナデ調整をし、突帯上下に粗い縦ハケ調整をする。さらに突帯下部に横方向の2.3条のス線(ハケ目か)が確認できる。内面は、斜めハケと横ハケで静止痕が確認できる。また突帯下部にわずかに板オサエ痕とナデ調整がみられる。色調は淡褐色である。

2136は、突帯が残る底部である。自重によって底部端がわずかに外部に肥厚する。器形は底部から上部かけて外反する。底部から突帯下部まで7.8cm、突帯部での径18cm、突帯幅1.6cm、高さ0.9cmで台形である。突帯下部には板オサエがみられる。調整は突帯部が横ナデ、突帯上下は縦ハケ調整をする。底部端は内外面ともナデ調整をする。

2137は底部片で1条の突帯がみられる。自重でわずかに外部に肥厚する。突帯部径17.8cm、突帯幅で1.8cm、高さ0.6cmで扁平な台形である。外面は、板オサエと縦ハケでナデ調整をする。底部端はヘラ削りの後に斜めハケの痕跡が認められる。突帯部の下部で粘土接合痕が確認できる。

2138は底部片で、底部復元径20cm、底部端はわずかに外に肥厚する。底部端面はナデ調整でM字形になる。外面調整は縦ハケと底部端でナデ調整をしている。内面は横ハケと斜めハケと底部端で横ハケがみられる。自重による肥厚をハケ目とナデによって調整している。

2134は胴部片で、1条の突帯をもつ破片である。突帯部での復元径18.4cm、突帯幅1.8cm、高さ0.7cmである。突帯部での器壁厚さ1.7cm、胸部で1.3cmである。調整は突帯上部と下部に縦ハケが認められる。突帯の下部に板オサエとナデ調整をする。内面は斜め方向のハケ目が見られる。色調は褐色である。

2135は突帯部片で、突帯の幅1.5cm、高さ0.8cmで台形を呈する。調整は突帯を挟んで上下には縦ハケが認められる。突帯下部は板オサエをし、突帯の上部3cm幅で横ナデ調整、突帯上にもナデ調整をする。内面はヘラ削りの後にナデ調整をする。さらに突帯下部に円形の透かしの一部が確認できる。

2129は突帯のある胴部片で、突帯部での復元径で23cm、突帯の幅1.3cm、突帯高さ1.4cmで、突出

度も高い。突帯部の器壁厚さ 1.8cm、胴部厚さ 0.7cm、胴部の突帯部に黒斑が確認できる。外面はナデ調整をし、ハケ調整はみられない。内面もヘラ削り後ナデ調整をする。突帯下部に一辺 2.4cmで斜めに傾いた長方形の線刻が認められる。短辺の線刻はやや外にはみ出している。

2130 は、2129 と同一個体になる可能性のある口縁部片で、全体に黒斑がみられる。口縁部径は 23cm、厚さ 0.4cmで、わずかに外反する。外面は縱方向の叩き目が見られる。2129 と同様に 2 辺のみが残る方形の線刻がみられる。線刻は短辺 2.2cm、長辺 2.6cmが確認できる。内面はヘラ削りがみられるが調整は不明である。

21 号墳出土の円筒埴輪の特徴

円筒埴輪としては、焼成があまく色調も褐色を呈するものと、黒斑がみられ色調も淡褐色を呈するものに分けることができる。段数の全体を確認できるものはなかった。透かしは円形のものが確認できた。底部径は 18 ~ 20cm、突帯間隔は 5.5cm のものがあった。底部は端部を自重で肥厚させるものがあったが、ナデないしハケによって調整されていた。突帯形状は断面の台形が退化し扁平なものが多いが、薄手の埴輪の突帯で突出度の高いものもあった。突帯の下部で板状の工具によるオサエがみられ、突帯上にはナデ調整がみられた。外部表面は縱ハケ調整を中心とし、横ハケ調整は確認できなかった。内面に横ハケによる 2 次調整があることも考慮すると、外面にもみられた可能性は残る。内面の横ハケは静止痕がみられた。また突帯割付のための沈線も確認できた。21 号墳の埴輪の特徴として、野焼きによる焼成が考えられるが、黒斑部分が限定的である。外面調整が縱ハケのみで 2 次調整がみられない。突帯に板オサエ調整をおこない、底部の内外面とも調整があることなどを考えると埴輪の廣瀬編年の V 段階新相にあたり、共伴した須恵器の年代の MT15 段階と符合する。

(山本祐作)



円筒埴輪出土状況



円筒埴輪復元作業（陵北小学校）

第3節 陶棺

(1) 西条古墳群出土の土師質陶棺について（図版33）

西条古墳群の39号墳の周辺から土師質の亀甲型陶棺の破片が出土している。

略報には「発掘に取り掛かる前から、石室が露出しており、しかもその羨道部と思われるあたりから、從来姫路以西にしか分布しないとされていた亀甲型陶棺の破片が可成り出土していたので、大いに期待されていた。しかし、発掘結果、最早、石室内には遺物は存在せず、僅かに遊離した土中より、数片の須恵器を発見したのみであった。」と記されている。また、略報の各古墳の概要を記した一覧表には39号墳の欄は行をかえて備考欄に「亀甲型陶棺片」と記されている。

39号墳の発掘調査は1964年3月11日から17日にかけて行われているが、調査日誌には陶棺のことは触れられておらず、図面にも記載がない。したがって、発掘調査の結果、陶棺の破片が出土した場所は古墳の羨道内ではなく石室外であったため記録されずに取り上げられたことから図面や日誌にも記載がないことになったものと思われる。なお、39号墳の横穴式石室は南向きの石室で、陶棺片の出土した場所は羨道の少し外側（南側）であったと思われ、早くから陶棺は石室内から運び出され、耕作の邪魔になり壊され長い年月の間に大半は失われたものと思われる。

現在、西条会館には発掘調査時に取り上げられた23点の破片が保管されており、復元を試みたが接合できるものはなく復元はできなかった。破片は大きなもので27cm×34cm、最も多かった破片は18cm×20cm程度のもので、小さなものは12cm×15cm、6cm×7cmぐらいであり、陶棺の各部の厚さは3.5cm～4.0cmである。

破片を個々に見ていくと陶棺には蓋に相当するもの（図版33：1・2・3・4）と身に相当するもの（図版33：5）があり大半は蓋の破片であった。蓋に相当する破片には突起のあるもの（図版33：1）が2点、縱や横に突帯をもつもの（図版33：1・2・3・4）が4点あった。また、身の破片も少量あり、その中には身の底部で脚部が剥がれた痕跡のあるもの（図版33：5）が1点あった。突帯の形状は台形、突起の形状は先端を丸くした球形で断面は梢円形である。

これら破片が陶棺のどの部分に相当するのか類似例として岡山県久米郡中央町打穴下に所在した「塚の前古墳2号陶棺」^(注1)に当てはめてみたのが図版33の下端の図である。

蓋はカマボコ状を呈するものと思われ、大きさは不明。下端には突帯がめぐり、稜線上には突起が貼り付けられその間を区画する縦と横に突帯がめぐらされていたものと思われる。なお、外面は刷毛調整、内面はナデ調整で仕上げられている。

身は隅丸長方形の箱型と思われ、大きさは不明。脚部は剥離の痕跡から幅17cm、長さは不明、身の底の厚さは3.5cmである。脚部の接合にあたっては粘土を締め付けた痕跡が認められ、身の外面の脚部周辺にはヘラで削った痕跡が認められた。

なお39号墳から須恵器の杯口蓋と身、高杯が出土しており、それらは7世紀初め頃のものと思われる。

(2) 播磨地方における陶棺の出土状況について

播磨地方では土師質の陶棺と須恵質の陶棺が各地から出土しており、調べた結果、筆者が知りうる限りでは12例あることがわかった。

大半は西播磨地方からの出土例で9例が知られる。これを列記すれば、吉備に隣接する赤穂郡上郡町域^(注2)では惣尻古墳（土師質亀甲型陶棺）、丸尾古墳（土師質吉備型亀甲型陶棺）、竹万山田古墳（須恵質陶棺）、赤岩鼻古墳（須恵質陶棺）の4例があり、また、相生市域^(注3)では那波野塚森古墳（土師質亀甲型陶棺）の1例、佐用郡佐用町（旧南光町）では土井^(注3)（土師質亀甲型陶棺）の1例、龍野市域^(注3)では揖西町土師（須恵質四注式陶棺）の1例、姫路市域^(注4)では飾西向山出土陶棺（土師質吉備型亀甲型陶棺）、今宿津古根山古墳（土師質吉備型亀甲型陶棺）の2例がある。

東播磨では加古川市神野町周辺で2例の陶棺の出土が知られており、北播磨でも東山古墳群12号墳からの1例の出土例がある。

加古川市神野町の出土例は前述の西条古墳群39号墳の石室外出土例（土師質亀甲型陶棺）であり、もう1例は「神野町石守字上の岡」から出土した土師質陶棺の出土例である。この「神野町石守字上の岡」出土例については、神野町石守在住の石見完次氏の『東播磨の民俗』(注5)によると「昭和45年に宝泉寺敷の下に防火用水溜めを掘る工事の際、渋谷重雄の田の深溝側の地下1メートルばかりの底から出てきたものである」と記され同書には土師質陶棺の破片の写真が1点掲載されている。また、この附近から採集された土師質陶棺の破片が数十点以上あり、いずれも小片であるが蓋とわかるものがあり身との接合部分の破片である。採集当時のラベルには「神野町石守字上の岡 646の102」と記されており、石見完次氏の報告されたものと同一場所と思われ、現在の寶塔寺の所有地から出土したものと思われる。この場所は西条古墳群から南西に1.2km離れた場所に位置する。

一方、北播磨の多可郡中町でも東山古墳群12号墳石室から須恵器で切妻の屋根をもち蓋と身から成り突堤を施した陶棺が出土している(注6)。

(3) なぜ西条古墳群とその周辺から土師質陶棺が出土するのか

陶棺は畿内と吉備で多数発見されているが、当播磨地方でも吉備地方に隣接し関係が深かった西播磨では陶棺が多数確認されている。しかし、吉備から遠く離れた東播磨の西条古墳群とその周辺からなぜ土師質陶棺が出土するのであろうか。

加古川市域は畿内と吉備の中間地帯にあたることから、『播磨風土記』(注8)や『日本書紀』(注9)、『古事記』(注10)には加古川下流域を舞台にして畿内と吉備の関係を示す説話が多く見られる。『播磨風土記』には賀古郡の条に「昔、大帶日子命、印南の別娘を誂ひたまひし時、(中略)、賀毛の郡の山直等が始祖息長命 一の名は伊志治 を媒として誂ひ下り行でましし」とあって大帶日子(景行天皇)が印南の別娘との婚姻に際して、山直等が始祖息長命(伊志治)を媒酌人にして結婚を申し込んだとの説話がある。また、印南郡の条には「丸部臣等が始祖比古汝茅を遣りて、國の境を定めしめたまひき。その時、吉備比古・吉備比賣二人参迎へき。ここに比古汝茅、吉備比賣に娶ひて生める兒、印南の別娘」とあり、印南の別娘は吉備氏(比古汝茅、吉備比賣)の娘であることが記されている。

つまり、畿内の大王(景行天皇)が吉備氏の娘と婚姻することによって加古川下流域の有力豪族との関係を強化しようとしたことがわかり、また併せて吉備氏への対策が行われたことがわかる内容である。

また、『古事記』(注9)には「大倭根子日子國供玖琉の命は、天の下治らしめしき。大吉備日子の命と若建吉備津日子の命とは、二柱相副ひて、針間の氷河の前に忌鏡を据えて、針間を道の口と為て吉備國を言向け和したまひき」とある。この「氷河」が『播磨風土記』や『日本書紀』の記述から考えて、「加古川」であると考えられることから、加古川下流域が吉備への「道の口」として位置づけられ「吉備國を言向け和したまひき」の拠点となっていたものと思われる。

『日本書紀』(注8)には、「大足彥忍代別天皇 景行天皇(中略)二年の春三月の丙寅の朔戊辰に、播磨稻日大郎姫 一に云はく 稲日稚郎姫といふ 姫、此をば異羅菟咩と云ふ。を立てて皇后とす。后、二の男を生れます。第一をば大碓皇子と曰す。第二をば小碓尊と曰す (中略) 是の小碓尊は、亦の名は日本童男。童男、此をば鳥具奈と云ふ。亦は日本武尊と曰す。(後略)」とあり、稻日稚郎姫の子供に熊襲を討ち、東國を鎮定した日本武尊がいることが記されている。

以上、見たように加古川下流域は畿内と吉備の文化の交わる地域であり、陶棺文化は本来、畿内の文化であり、それが吉備地方に伝わったと考えればその中間の加古川下流域に陶棺文化があっても不思議ではないと思われる。つまり、畿内勢力の吉備地方の支配の拠点としての役割を担ったのではないかと思われる。

宮岡昌宣氏の論文（注7）によると「備前中部・熊山地区は山間の約2 kmの狭隘な範囲に、後期の小型前方後円墳が4基存在する。それらを含む5遺跡9例の陶棺は注目に値する。その存立基盤を農業生産のみによっては説明できない。弥上古墳や土井遺跡から精鍊滓および鍛冶滓が検出されている。また、同地域内では猿喰池製鉄遺跡で古墳時代後期の製鉄炉5基が確認され、吉井川右岸丘陵上には須恵器窯跡群が所在する。この地域には、窯業生産とともに鉄製品を行なっていた集団の存在が推測され、これらの生産基盤の掌握に関わった有力在地勢力の存在が想定される。想像を逞しくすればヤマト王権は、こうした地方の有力在地勢力を掌握し取り込むことによって、吉備の地方支配を確実なものにしようとした」とされる。

この西条地域は『播磨風土記』の「望理里」に相当する地域であり、『播磨風土記』はこの里を簡単な記述しかしていない。しかしこの「望理里」では多くの遺跡が知られており弥生時代の望塚出土の銅鐸、西条52号墓や壺棺墓、5世紀前半の行者塚古墳や尼塚古墳、人塚古墳など大型の前方後円墳や帆立貝式古墳があり、5世紀後半から6世紀にかけての西条21・25号墳などの方墳、成福寺古墳群、東沢1号墳、古墳時代後期の神野大林窯跡群と中ノ池窯跡、野村古窯跡群、飛鳥時代以降の野新村古窯跡群、西条廃寺、奈良時代の雁土井地区（上村池遺跡や古堂遺跡）の倉庫や建物群などがあり多くの遺跡が所在しており、加古川下流域の先進地域であったと云える地域である。

また、特筆することは西条4号墳の石室内から鉄滓が出土していることである。

この鉄滓はたたら製鉄の過程で生じる「のろ」とか「スラグ」と云われる不純物のかたまりである。加古川下流域の丘陵には鉄分を含んだ土壤（花崗岩の風化土）の層があることから、今でも雨後に鉄分が地表に固まって露出することがある。おそらく古代にはそれらの土壤の中から鉄分の純度を高めるための作業が行われ鉄分を取り出す「たたら製鉄」がこの地域でも行なわれていた可能性がある。

この「望理里」では、須恵器生産が活発に行われ、また製鉄なども行なわれたと思われ、宮岡氏の云う「備前中部・熊山地区」と加古川下流域の「望理里」は同じような条件の地域であったと思われ、ヤマト王権が土師質陶棺の文化を持ち込むことによって有力在地勢力を取り込もうとしたことのあかしと思われる。

（上月昭信）

注1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 44「塚の前古墳」岡山県教育委員会文化課 1981年3月

注2 松本正信「上郡町史 第三巻 史料編1」平成11年 上郡町

注3 松岡秀夫「赤穂市史」第一巻 昭和56年 兵庫県赤穂市

注4 加藤史郎・松本正信ほか「姫路市史第7巻下考古資料編」平成22年3月 姫路市

注5 石見完次「東播磨の民俗」昭和59年

注6 中町文化財報告 25「東山古墳群II」2001年兵庫県多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

注7 宮岡昌宣「陶棺からみる畿内と古備」『考古学研究 第59巻第1号』2012年6月

注8 日本古典文学大系2「風土記」坂本古郎 昭和33年

注9 日本古典文学大系67「日本書紀上」坂本太郎・家永三郎ほか 昭和42年

注10 日本古典文学大系1「古事記祝詞」倉野憲司 武田祐吉 昭和33年



木箱に保管されていた陶棺片

第4節 金属製品

現在、西条会館には木箱5箱程度の金属製品が残っている。西条古墳群から出土した金属製品については、『西条古墳群調査略報』(以下「略報」という)においてその種別や出土点数が報告されているものの(西条古墳群発掘調査団 1964)、実測図などは掲載されていなかったため、各古墳出土金属製品の詳細は不明であった。

そこで今回これらの資料について若干の整理を行うとともに、可能な限り資料の実測作業などをを行い、その資料化に努めた。その際、基本的に同封の出土古墳などが記されたメモに基づいて整理を行ったが、略報の報告内容と整合しないところもあった(文末一覧表)。以下ではひとまず今回の整理で確認された情報をもとに西条古墳群出土金属製品について出土古墳ごとにみしていく(※1)。

1号墳(図版34)

M 1は、銅芯金張りの耳環で、外径2.4cmである。断面形は梢円形を呈しており、長径0.7cm、短径0.5cmである。芯部は中実とみられ、重さは12.8gを測る。

2号墳(図版34)

M 2は、鍍とみられる。完形のものであるが、全体的に銹化剥離が著しい。形態的には、台形状の刃部に袋部をもち、全長10.2cm、刃部長5.6cm前後、刃部幅8.4cm、袋部長4.6cm前後を測る。袋部の断面形は円形とみられ、外径2.8cm前後である。袋部内には目釘と考えられる径0.4cm前後の棒状鉄が袋部端から0.7cm内側の位置にある。

M 3は、刀子の刃部である。残存長は8.5cm、刃部の最大幅は1.6cmである。

M 4・5は、鉄釘である。M 4は、棒状の鉄の一方を叩き延ばして折り曲げる頭部形態のものとみられ、残存長7.5cmである。体部断面形は剛丸方形で、幅と厚さは0.7cm前後を測る。M 6は、笠状の頭部をつくりだす頭部形態のもので、残存長4.2cmである。体部断面形はほぼ円形で、径0.6～0.7cmを測る。M 4・5とともに、体部に木質の付着が認められる。

M 6・7は、耳環である。M 6は、銅芯金張りとみられる耳環で、外径1.9～2.0cmである。断面形はほぼ円形を呈しており、長径0.5cm、短径0.4cmである。芯部は中実とみられ、重さは4.8gを測る。M 7は、銅芯金張りとみられる耳環であるが、表面被覆材の大部分は剥離している。外径1.4～1.5cm、断面形は直径0.2cmの円形である。芯部は中実とみられ、重さは0.7gを測る。

4号墳(図版34)

M 8は、鉄刀の切先部に近い破片とみられる。残存長5.9cmであるが、刀身部は長軸に平行する木質に覆われているため、その幅と厚さの詳細は不明である。

M 9・10は鉄滓で、いずれも鍛冶滓とみられる。M 9は、残存長5.7cm、残存幅5.1cm、厚さ2.0cm、重さ83.6gの鉄滓で、下面が緩やかに弧を描いていることから楕円鍛冶滓の可能性がある。M 10は、残存長3.5cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、重さ7.7gの扁平な鉄滓で、楕円鍛冶滓の一部である可能性がある。いずれも磁着反応がないことから含鉄物質はほとんど含まれていないと考えられる。

9号墳(図版35)

M 11は、鉄劍である(※2)。完形のものであるが、全体的に銹化が著しいため、細部の形態などは不明である。推定全長16.9cm前後、推定劍身部長11.3cm前後、推定劍身部最大幅2.1cm前後、推定莖部長5.6cm前後、推定莖部幅1.1cm前後である。目釘孔の有無は不明である。莖部には一部有機質痕とみられる付着物がある。

M 12 は、鉄鎌である。曲刃鎌で、推定全長 12.1cm である。刃部は、その中程から先端部にかけて緩やかに湾曲する。推定基部幅 2.7cm で、基部端は鈍角に折り返している。厚さは 0.2cm 前後を測る。

M 13 は、鉗である。各破片は直接接合しないものの、その幅や厚さから同一個体とみられる鉗で、各破片を合わせた残存長は 15.4cm である。推定刃部長 3.0cm 前後、推定刃部最大幅 1.1cm 前後の柳葉形の刃部をもつものとみられる。身部断面形は長方形で、幅は 0.8cm 前後、厚さは 0.3cm 前後を測る。

10号墳（図版 35）

M 14・15 は、鉄鎌である。M 14 は有頸平根式で、鎌身部に深い腸抉をもつものである（※3）。腸抉端部と頸部から茎部を欠いており、残存長 6.4cm、鎌身部残存長 6.1cm である。鎌身部は残存幅 3.2cm、最大厚 0.3cm で、断面は両丸造とみられる。頸部は幅 0.7cm、厚さ 0.2cm、断面形は長方形である。M 15 は、先刃大型定角式で、明確な茎闊をもたずに茎部に至るものとみられる。刃部闊の一部、茎部端を欠くものの、ほぼ完形の鉄鎌で、残存長 10.2cm、推定刃部長 3.3cm である。刃部は残存幅 2.8cm、最大厚 0.4cm で、断面は両丸造である。茎部は幅 0.6cm 前後、厚さ 0.3cm 前後、断面形は長方形である。

M 16 は、鉄鎌と刀子が銹着したものである。鉄鎌は、M 15 と同形態の先刃大型定角式で、全長 8.8cm の完形のものである。刃部は推定幅 2.4cm、最大厚 0.3cm を測り、断面は両丸造である。刀子は、茎部の一部を欠く片闊式のもので、残存長 12.3cm、刃部長 8.4cm、茎部残存長 3.9cm である。刃部最大幅は闊部において 1.5cm を測り、厚さは刃部、茎部ともに 0.4cm 前後を測る。

14号墳（図版 36）

M 17・18 は、鉄釘である。M 17 は、棒状の鉄の一方を叩き延ばして折り曲げる頭部形態のもので、残存長 2.7cm である。体部断面形は方形で、幅と厚さは 0.6cm 前後を測る。M 18 は、笠状の頭部をつくりだす頭部形態のもので、残存長 3.1cm である。体部断面形は隅丸方形で、幅と厚さは 0.7cm 前後を測る。

21号墳（図版 36）

M 19・20 は鉄刀である。M 19 は、切先部、闊部及び茎部端部を欠く鉄刀で、全体的に銹化剥離が著しい。残存長 80.8cm、刀身部残存長 65.6cm、刀身部幅 3.0cm 前後、茎部残存長 15.2cm である。現状では茎部に目釘孔らしき痕跡が 1 つ確認される。刀身部の一部には鞘のものとみられる木質が付着しているほか、茎部には把木と考えられる木質が付着している。「へ主体」から出土したもの可能性がある。M 20 は、切先部のみを欠くほぼ完形の鉄刀である。残存長 92.8cm、刀身部残存長 76.0cm、刀身部幅 3.2～3.6cm、茎部長 16.8cm である。茎部には、茎部端部から 3.2cm、11.5cm の位置に目釘孔がある。刀身部には鞘のものとみられる木質が付着し、茎部には把木と考えられる木質が付着している。また、闊部付近には把締装具や鞘口装具に由来するものとみられる有機質痕が認められる。「ホ主体」から出土したもの可能性がある。

23号墳（図版 37）

M 21・22 は、鉄鎌である。M 21 は、鎌身部が長三角形で、深い腸抉をもつ短茎長三角式鉄鎌である。腸抉部の一部と短茎部を欠いており、鎌身部長 6.0cm、鎌身部残存幅 5.1cm である。破断面のみの観察であるが、短茎部の幅は 0.6cm 前後とみられる。M 22 は、鎌身部が長三角形で、深い腸抉をもつ短茎長三角式鉄鎌とみられる。腸抉部と短茎部の一部を欠いており、鎌身部残存長 6.4cm、推定鎌身部幅 3.3cm、推定短茎部残存長 2.6cm である。鎌身部の断面は平造とみられる。短茎部は幅 0.6cm、厚さ 0.3cm、断面形は長方形である。

M 23・24 は、鉄鎌である。M 23 は曲刃鎌の先端部とみられ、残存長 5.3cm、残存幅 2.9cm 前後を

測る。M 24 は鉄鎌の基部で、残存長 4.0cm、基部幅 3.3cm を測り、基部端は直角に折り返している。これらの中のものは同一個体の鉄鎌である可能性がある。

25号墳（図版 37）

M 25 は、鉄刀の刀身部であるが、全体的に鋳化剥離が著しい。残存長 60.0cm、刀身部幅 3.2cm 前後である。刀身部の一部には鞘のものとみられる木質が付着している。

M 26 は、鉄劍の切先部片である。残存長 6.9cm、劍身部幅 1.8cm、劍身部厚 0.4cm である。劍身部の一部には鞘のものとみられる木質が付着している。

M 27 は、長頸式鉄鎌で、柳葉形の鎌身部をもつものである。完形のものとみられるが、全体的に著しく鋳化しているため、細部の形態などは不明である。推定全長 17.3cm 前後、推定鎌身部長 1.8cm 前後、推定頸部長 10.5cm 前後、推定莖部長 5.0cm 前後とみられる。鎌身部は幅 0.8cm、厚さ 0.2cm で、断面は片丸造である。頸部は断面長方形とみられ、推定幅 0.5cm、推定厚 0.3cm である。莖部は断面正方形とみられ、幅、厚さともに推定 0.3cm である。

M 28・29 は、いずれも両闇式刀子である。M 28 は、刃部と刃闇の一部を欠いているものの、ほぼ完形のもので、全長 15.7cm、刃部長 10.5cm、莖部長 5.2cm である。最大残存幅は闇部付近において 1.6cm を測り、厚さは刃部、莖部とともに 0.2cm 前後を測る。莖部には柄のものとみられる木質が付着している。M 29 は、完形のもので、全長 8.9cm、推定刃部長 5.8cm、推定莖部長 3.1cm である。最大幅は闇部において推定 1.1cm を測り、刃部厚は 0.3cm 前後、莖部厚は 0.2cm 前後である。莖部の一部には柄のものとみられる木質が付着している。

34号墳（図版 38）

M 30～32 は、耳環である。M 30 は、銅芯金張りとみられる耳環で、外径は 2.2～2.4cm である。断面形はやや梢円形を呈しており、長径 0.6cm、短径 0.5cm である。芯部は中実とみられ、重さは 11.9 g を測る。M 31 は、銅芯金張りの耳環で、外径は 1.9～2.2cm である。断面形は梢円形を呈しており、長径 0.7cm、短径 0.4cm である。芯部は中実とみられ、重さは 9.9 g を測る。M 32 は、表面全体の遺存状態が悪いため、表面被覆材などの詳細は不明であるものの、その一部において銀色を呈する箇所がみられる。外径は 2.0cm である。断面形はやや梢円形を呈しており、長径 0.4cm、短径 0.3cm を測る。芯部は中実とみられ、重さは 3.4 g を測る。

36号墳（図版 38）

M 33 は、馬具の鞍金具とみられる。全体的に鋳化が著しいため、細部の形態などは不明であるが、鉢具の基部に脚片とみられる鉄片が鍛着している。鉢具の輪金は凸字形をしており、長軸推定 5.8cm、短軸推定 4.7cm である。

出土古墳不明（図版 38）

M 34 は、鉄鎌である。有頭平根式で、鎌身部に深い脇抜をもつものとみられる。脇抜部の一部と頸部から莖部を欠いており、鎌身部残存長 8.1cm である。鎌身部は残存幅 3.3cm、最大厚 0.3cm で、断面は両丸造とみられる。頸部幅は 0.7cm 前後とみられる。

M 35 は、有肩鉄斧である。全体的に鋳化剥離がみられ、特に袋部の欠損が著しい。なだらかに広がる肩部をもつ有肩鉄斧で、残存長 10.9cm、刃部長 4.7cm 前後、刃部残存幅 5.5cm、袋部残存長 6.2cm である。袋部の断面形は円形で、外径は 3.2cm 前後とみられるが、欠損のためその合わせ目は不明である。

以上、西条古墳群出土金属製品のうち、今回整理のなかで実測作業を行った資料について報告してきた。出土金属製品には、鉄刀や鉄劍、鉄鎌といった鉄製武器類、U字形鍛錬先、鉄鎌、鉄斧、刀子といった鉄製農工具類、耳環といった装身具類のほか、木棺に使用されたと考えられる鉄釘などが確認される。また、これまで認識されていなかったものとして鍔や鉄滓があり、前者はあまり類例のないものとして、後者は被葬者の性格などを考えるうえで注目される。

その出土傾向をみると、木棺直葬や箱形石棺では少量の鉄製武器類と鉄製農工具類がセットとなって副葬される傾向がみられる。その一方で、横穴式石室では金属製品の出土が総じて少なく、また本来の副葬品組成をどれだけ反映しているのかは不明といわざるを得ないのが現状であり、その傾向の特徴などを指摘することは困難である。

今回の報告では、西条古墳群出土金属製品の資料化を目的とした概要報告に終始してしまい、詳細な検討を行うまでには及ばなかった。今後、各金属製品の個別の検討をさらに進めていく、各資料の位置づけを明らかにしたうえで、西条古墳群出土金属製品について検討していく必要がある。また、これらの金属製品については、当時の調査から長い年月が経っていることもあり、資料の状態は必ずしも良好とはいえないため、今後適切な措置を取っていく必要があろう。

なお、今回の金属製品の報告はおもに報告者の肉眼観察によるものである。そのため、報告内容の誤りなどの責はすべて報告者にあることを付言しておく。また、今回の報告は、あくまでも現時点での暫定的なものであり、今後の詳細な整理作業によってその内容、例えば出土古墳や数量に変更が生じる可能性があることをご容赦いただきたい。

(平尾英希)

註

- (※1) なお、西条25号墳では複数の埋葬施設から鉄製品が出土しているものの、今回確認できた鉄製品がどの主体部から出土したものであるのか、出土古墳などが記されたメモから判断することができなかった。
- (※2) この鉄劍については、出土古墳などが記されたメモから出土古墳を特定することは出来なかったが、同一の袋に別袋で入っていた鉄鎌（M12）が西条9号墳から出土したものとの可能性があることから、今回の報告では9号墳出土鉄製品として扱った。
- (※3) 鉄鎌の分類にあたっては、おもに川畑純氏による分類を参考にした（川畑2015）。

参考文献

- 川畑 純 2015『武具が語る古代史－古墳時代社会の構造転換－』京都大学学術出版会
西条古墳群発掘調査団 1964『西条古墳群調査略報』西条古墳群発掘調査団
高田恭一郎 1998「第4章論説（3）鍍形金銅製品と鍔について」近藤義郎・河本清編『大谷一号墳』
北房町埋蔵文化財発掘調査報告 7 北房町教育委員会
野島 永 2013『鉄製農工漁具』『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社
村上恭通・山村芳貴 2003『農工具』千賀久・村上恭通編『考古資料大観』第7巻 小学館
村上 隆 2003『金工技術』日本の美術第443号 至文堂

古墳	埋葬施設	金属製品（西条古墳群発掘調査団1964）	金属製品（今回報告）
西条1号墳	横穴式石室	鉄鏃2、刀子1、金環1	鉄鏃片1、刀子1、刀子片1、耳環1
西条2号墳	横穴式石室	鉄鏃8、手斧1、刀子1、金環3	鍔1、刀子2、刀子片2、鉄釘8、鉄釘片119、耳環2
西条3号墳	横穴式石室	鉄鏃、鉄釘	鉄釘片8?、不明鉄器片2?
西条4号墳	横穴式石室	鉄器片	鉄刀片1、鉄釘片2?、鉄滓3
西条6号墳	横穴式石室	鉄片	刀子1
西条7号墳	横穴式石室	-	刀子1
西条9号墳	木棺直葬	鉄刀1、鉄鏃1、鉄滓3	鉄劍1、鉄鏃1、鍔2?、不明鉄器片2
西条10号墳	箱形石棺	鉄刀1、鉄鏃1、鉄斧1、刀子1	鉄鏃4、刀子1、不明鉄器片1
西条14号墳	横穴式石室	鉄劍先1、鉄釘10、鉄片	鉄釘8、鉄釘片10?、不明鉄器片1?
西条21号墳 (才主体)	木棺直葬	鉄劍先1、鉄片2	
西条21号墳 (三主体)	木棺直葬	鍔3~	鉄鏃1
西条21号墳 (小主体)	木棺直葬	鉄刀1、鉄鏃2、鉄片1	鉄刀1、鉄釘7?
西条21号墳 (~主体)	木棺直葬	鉄刀1、鉄鏃先1	鉄刀1、U字形鉄錐先1、刀子1、鉄釘片1?
西条23号墳	不明	鉄鏃2、鉄鏃先1、鉄鏃1、手斧1	鉄鏃2、鉄鏃片3?、U字形鉄錐先1、鉄錐1
西条25号墳 (第2主体)	木棺直葬	鉄劍1	
西条25号墳 (第3主体)	木棺直葬	鉄刀1、鉄鏃1	鉄劍1、鉄刀1、鉄鏃2、刀子2
西条34号墳	横穴式石室	鉄釘6、金環3	鉄釘片1、不明鉄器片2?、耳環3
西条35号墳	横穴式石室	鉄鏃1	
西条36号墳	横穴式石室	鉄鏃1、鉄釘1	鉄鏃2、鈴金具1、不明鉄器片1
西条40号墳	木棺直葬	鉄劍2	鉄劍1、鉄刀or鉄劍1
西条52号墳	堅穴式石室	内行人文鏡1、鉄劍1	内行人文鏡1、鉄劍1
出土古墳不明	-	-	鉄鏃5?、U字形鉄錐先1、有肩鉄斧1、鉄釘3?、不明 鉄器片1、鉄片

西条古墳群出土金属製品一覧表

第7章 弥生時代の土器

第1節 弥生時代中期の土器（図版39）

西条古墳群の存する城山に向けて伸びる尾根上から、古墳時代の遺物に混じって弥生時代中期後半の土器が出土している。量は多くはないが、4・21・23・25号墳墳丘周辺の尾根中程の発掘調査された地域から出土している。いずれも破片で散乱しており、遺構との関係を追えるものではないが、実測図は各出土位置単位で掲載し、器種ごとに解説していく。

広口壺（Y01～04・09・10・13～16）

確認できる広口壺の口縁部はいずれも口縁端部を肥厚して垂下気味の端面にA種凹線文を施している（Y01～03・09・13）。Y09・13ではその上に円形浮文を貼り付け、Y13ではさらに口縁内面の外縁にも並べ加飾している。Y09・14では頸部にB種凹線文、Y04では指頭圧痕文突帯をめぐらしている。Y10・15・16の体部破片にも櫛描き文、円形浮文の貼り付けの加飾があり、この地域当該時期の広口壺の優勢傾向を示している。

壺（Y11・17）

いずれもくの字に屈曲する口縁の端部を肥厚し凹線文を施す。

高坏（Y05・18）

Y05では坏部外面屈曲部に凹線による境界線がめぐり、水平方向に肥厚される。Y18の坏部と脚部は連続一体成形され、坏底部を塞いだ円板状粘土は剥落している。ハの字状に括がる脚端部を上方に肥厚する。外面はヘラ磨きされ、鋭利な工具によるヘラ描き平行沈線がめぐる。

台付鉢（Y06）

上下端部を欠くが、大型の台付鉢の鉢部と台部をつなぐ部分である。外面はヘラ磨きで丁寧に仕上げられ、ハの字に開く台部に小さな円孔を4方に穿つ。鉢部と台部は連続成形され、円板状粘土で鉢底部を形成する。

器台（Y07・08）

Y07・08ともに比較的大型の脚部である。Y07外面には凹線文が連続してめぐるこの時期の典型的な器台脚部である。Y07は4条のヘラ描き沈線文の下方にヘラ状工具による先端の尖った刻みを並べたもので、あまり類例を見ないタイプである。

脚台（Y19～21）

いずれも脚端部のみであるが、脚端部は上方に跳ね上がる。高坏または台付土器に続くものであろう。

以上のように、壺・壺・高坏・器台いずれも弥生中期でも後半の凹線文最盛期の土器様相を示している。後世の古墳群造成による攪乱を受け、遺物は散乱し、遺構等の確認もされていないが、この丘陵上にこの時期の人々の生活があったことが伺える。

出土地周辺から南の西条庵寺下層遺跡からも同じくこの時期の壺・壺などの出土、円形住居跡の確認があり（注1）、統いて東に延びるいなみの台地北端部の段丘崖上の縁辺部には、望塚銅鐸（扁平紐式、6区袈裟襷文）の出土伝承地（注1）なども知られる。また近年発掘調査のあった片山遺跡からも溝や土坑、周溝墓・木棺墓から遺物が確認されている（注2・3）。比高20m余りの台地上は、近代になって新田開発が進んだものの当時は主に水利面で生産域とはしがたく、眼下の氾濫原で生産活動をしつつ、生活域を洪水などの影響のない安定した台地上に求めていたのであろう。

第2節 弥生時代後期の土器（図版40・41）

古墳群の墳丘上や周辺から、壺または甕と大型鉢がセットになった土器棺と思われる弥生土器が出土している。

城山に近い北寄りの一群の32・37・38・60号墳の墳丘またはその周辺で、C群～D群にまたがる「西条52号墓」を含む一帯からの出土である。遺構図や日誌・写真から、多くが原形を残し埋葬時の状況を保った状態で出土している。そのため各出土地点を「○号墓」と呼称し、古墳と区別した。

土器の時期については「西条52号墓」で出土の土器棺をはじめとする土器群とほぼ同時期に該当するものと思われる。

32号墓（Y22・23）：図版40

横穴式石室を持つ32号墳の墳丘から大型の二重口縁壺と合わせ口の鉢が出土している。

Y22は棺身にあたると思われる口径32.0cmを測る大型の二重口縁壺で、棺上層部より出土している。口縁部が屈曲して開き立ち上がり、口縁部上端面にはヘラ刻み目、立ち上がり部外面には櫛描き波状文をめぐらせる。さらに波状文の上に径2.8cm前後の円形浮文が2個1対で推定4方または5方に貼り付けられ、浮文の中央に竹管押捺があり、そのうちの1つにはその周囲4方に花びら状に押捺される。またそれらの浮文の間に2個1対で竹管押捺があり、多様で特殊な加飾が際立っている。厚手で体部もかなり大きくなり、器高はY28以上には復元できると思われる。

Y23は棺の蓋にあたる大型鉢と思われ、口径はY22と同じ32.0cmを測り、図上で復元高は約20cmになる。口縁部がくの字状に屈曲し、口縁端部は上下に肥厚され、端面には凹線文状に凹む。体部内外面はヘラ磨きで丁寧に仕上げられる。底部は中央部粘土充填で平底である。

37号墓（Y24）：図版40

37号は木棺直葬墳との想定の下に掘り進められたが、略報（注4）に「封土の中心からやや外れたところより粗い波状文のついた口縁部をもつ土師器壺棺を発見した。上になっていた部分は既に流出してしまっていたが、丸底の土器を使った合わせ口の壺棺墓と推定された。」とある。表土下約10cmで長径約60cmの範囲に土器片が散布していた。

Y24は厚手でしっかりと作りの口径31.6cmを測る大型の広口壺で、調査時に「37号壺棺（弥生）」とされている棺身にあたる。朝顔状に大きく広がる口縁端部を上下に肥厚し、その端面に櫛描き波状文を施す。さらに円形浮文を8方に貼り付け、その中央部には竹管押捺がある。口縁内面はヘラ磨き後、外縁部に櫛描き波状文をめぐらしている。外面は刷毛調整により丁寧に仕上げられる。Y22と同様にY28以上の器高には復元できると思われる。

38号墓（Y25・26）：図版40

略報（注4）によると「封土の南側の裾近くに、僅かに高くなったところがあり、ここから2個の弥生式土器（甕）を使用した合わせ口棺が出土した。封土の中央部には幅60cm・長さ1.65mの木棺直葬主体があつたが副葬品は出土しなかった。」（「38号墳東部のわずかなマウンドを有する木棺直葬墳と推定した地点の頂上部で弥生の壺棺らしき2個の甕の破片群が確認された。」とある。）おそらくここで言う「合わせ口棺」は3801の土師器甕（図版30）と思われるが、主体部（木棺直葬）脇から壺棺が出土したともある。ここで図化したいずれかが、その土器ではないかと思われる。

Y25は口縁部が屈曲して立ち上がる二重口縁壺である。口径は18.2cmを測る。立ち上がり外面には粗い櫛描き波状文がめぐる。前述のものほど大型にはならず薄手で、頸部は屈曲せずカーブを描いて体部に続く。体部下半部外面にはタタキ成形の後、粗いヘラ磨きを施す。底部は他と同様に粘土充填され

た平底である。図上復元による器高は約29cmである。

Y26の壺はより大型で、径17.6cmを測る頸部に断面三角形突帯を貼り付け、その直下にヘラ刻み目がめぐる。大きく肩の張る体部が続くと思われ、これもY28を凌ぐ器高の大型壺であったと推定する。底部は粘土充填により平たく収まる。

60号墓（Y27～30）：図版41

墳丘上主体部に近接して2組の土器棺を検出。略報によれば、「59号墳に接近して2か所に涉って弥生式土器（壺棺）が出土した。いずれも合わせ口になっていたが、西側のものは小さく、はたして壺棺として使用できたか疑問の点もある。」と記されている。

大型の広口壺と甕を棺身とし、それぞれに鉢が蓋として共伴する。土坑に埋葬された壺棺の「出土状況実測図」（図版20）はこの前者の広口壺の方と思われる。

Y28は棺身にあたる大型の広口壺で、口径25.4cmを測る。朝顔状に開く口縁部の肥厚した端面に3条の擬凹線文を施し、頸部下端には断面三角形突帯を貼り付ける。肩部は大きく張り、蕉形の体部から粘土充填された平底に続く。口縁部内外面はヘラ磨きにより丁寧に仕上げられ、体部外面はタタキ成形、刷毛調整後ヘラ磨き、内面は強い指ナデによる成形の後、刷毛調整される。図上復元高は約59cmで、底部は小さい平底である。

Y27は外反口縁を持つ大型鉢で口径29.6cmを測り、Y28に組み合わされる棺蓋になる。体部外面はタタキ後刷毛調整、内面はヘラ磨きで仕上げられる。復元高は約19cmで粘土充填による平底である。

Y30は中型の甕で口径17.4cmを測り、略報にある「西側の土器棺」の棺身にあたると思われる。この時期の通常の集落内で実用的に使われるくの字口縁を持つタタキ甕で、体部外面・肩部内面には刷毛調整が見られる。外面底部近くは粗いヘラ磨きが見られ、底部は平底で粘土充填による。図上復元高は約28.6cmとなる。

Y29はY30の棺の蓋にあたると思われる鉢で、口径24.2cm、器高12.0cmを測る。外反する口縁の端部は上方に引き上げられ、体部外面は丁寧に刷毛調整され、底部はやはり粘土充填された平底である。

小結

今回の調査で確認できた土器棺のうち、棺身として使用されたのは大型の広口壺・二重口縁壺に混じって通常サイズの壺・甕各1点を含む6点で、蓋として使用された鉢は3点、いずれもくの字または外反口縁を持つ鉢である。土器棺として土坑内に埋納されていたものとみられ、各古墳の中心部からは外れた位置で出土している。「52号墓」の小石櫛とされるような石組の埋葬施設は他には確認されていない。古墳築造時との時期差から考えると、認識・記憶の可能性は低く、たまたま築造時の破壊から免れたものが残っていたと言ってもいいかもしれない。

以上の土器は「西条52号墓」の小石櫛周辺から出土した土器棺とされる一群の大型土器と比較して一回り小ぶりの感はあるが、器形や厚み、作りや調整等の特徴が近似している。

棺身となる大型の壺は波状文や円形浮文で加飾され、無花果形に肩の大きく張る体部に粘土充填した小さく不安定な平底が付く。破片は多数ではあったが特に体部の復元は困難で、「52号墓」の土器棺に見られる焼成後穿孔などは確認できなかった。棺蓋となった鉢は大型でしっかりとした作りでヘラ磨きにより内外面共丁寧に仕上げられ、底部は壺と同様の平底である。

大型の広口壺については川除・藤ノ木遺跡からも類似するものが出土しており、また棺蓋とされた鉢も含めて、同じく川除3期～5期に相当するほぼ同時期の弥生時代後期後に該当するものと思われる（注5）。32号墓の大型壺は二重口縁で、より新しいとされる様相を示してはいるが、棺蓋となる鉢は他との近似した特徴を示し、時期差を認めがたい。いずれも土器棺として土坑に埋葬され、この周辺が「西条52号墓」を含んで当時の埋葬区域とされていたことが伺える。

「52号墓」では小石櫛内に落ち込んだ円錐堆などから壺や高杯など出土しているが、今回の出土遺物調査ではそれに類似するような当該時期の土器類は確認できなかった。

城山に向かって北に突き出す丘陵の東側に続くいみなみの台地の北縁辺の段丘崖上には中期と同様、この時期、播磨堂遺跡（壺棺墓）（注1）、猫池遺跡、東沢1号墳下層（堅穴住居跡・溝等）（注6）、大日山遺跡（壺棺墓）（注1）、片山遺跡（堅穴住居跡・掘立柱建物等）（注2・3・7）が続き、眼下の低位段丘上（野口段丘）には下村遺跡（注1）、同じく西側には手末遺跡（注8）などがある（右上図）。

大日山遺跡の壺棺（右下図）は大型の二重口縁壺と大型の鉢を組み合わせたもので、壺は大きな無花果形の体部で口径31.6cm・器高75.4cm、鉢はくの字状に屈曲する口縁を持つ口径20.3cm・器高31.2cmで、いずれも小さな平底を持つ。棺身の大型壺は32号墓のY22と同じく二重口縁という新しい要素は持つが、同じく蓋となる鉢の形状を見ても、やはり器形・作り共に西条52号墓等から出土の一連のものと概ね同時期に比定できる（注9）。

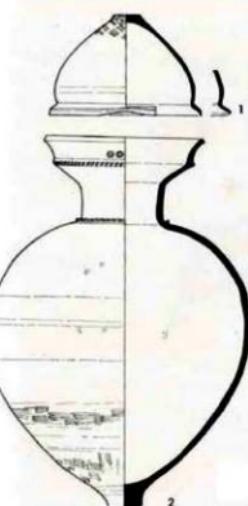
両側の低地は加古川支流の草谷川・曇川の本流への合流地点で、現在も大規模洪水の際の浸水想定区域となっている。当時の加古川による不安定な氾濫原を水田などの生産域とし、住居等の集落（生活域）は台地縁辺部や崖周りの低位段丘・自然堤防上に求めたのであろう。特に墓域としてはより安定した台地上を選んだようで、こうした意識は古墳時代にまで引き継がれていったようである。

西条52号墓は、発掘調査としては本報告書掲載の古墳群と同時期に行われたものではあるが、石組みの埋葬施設や内行花文鏡等の出土品など、発掘調査当初から播磨地域のみならず広く考古学会から注目を集めていることもあり、52号墓に限定して前述のように既に調査担当者などによる近年の詳細な報告がある。

第9回播磨考古学集会「弥生墓から見た播磨」記録集（注10）に松本正信・加藤史郎両氏の執筆による西条古墳群発掘調査団の特別報告「西条52号墓の記録」として掲載され、調査報告の公表がなされた。またその後、出土遺物は兵庫県立考古博物館に寄託・保管されることとなり、『兵庫県立考古博物館研究紀要』第7号に「西条52号墓出土品の共



西条古墳群周辺の弥生遺跡 S-1:50,000
 1. 手末遺跡 2. 西条52号墓ほか 3. 西条麻寺下層遺跡
 4. 播磨堂遺跡 5. 猫池遺跡 6. 望塚（東沢1号墳下層）
 7. 大日山遺跡 8. 片山遺跡 9. 下村遺跡 10. 野村遺跡
 11. 宗佐遺跡
 (参考:A. 行者塚 B. 人塚 C. 尼塚)



大日山遺跡の壺棺 S-1:10
 (『加古川市史』第4巻より転載)

同研究」として公表されている（注11）。これは同博物館の活用のための基礎調査の一環として「東播磨における青銅器の共同研究」を構成する対象として調査された成果であり、当時同館勤務であった筆者（友久）も加わって、青銅器のみならず、出土土器についても再接合・再実測を行い再検討を加えたものである。いずれの報告も加えてすべてを掲載できれば良いのではあるが、今回調査の主目的は未公表の部分を公表することであり、紙面の都合もあり、このうち本章記述と関連性の高い「概要」「出土土器」「まとめ」の3項目を抜粋して参考資料として本章末（P62～P72）に転載させていただくことにした。

当該紀要においては西条52号墓の主な出土土器は室内期直前の弥生時代後期後半に位置づけられており、又、内行花文鏡の出土、主体部の小石櫛の構築などから、発生期の古墳につながる重要な意味を持つ墳墓として、今後も注目される対象であり続けるであろう。今回調査でも同時期の類似遺物が複数発見されたことで、この丘陵の持つ意味への所見も深まっていくかと思う。

加古川右岸地域でもこの時期の壺棺による埋葬は神吉山5号墓（注1）・八ツ塚3号墓などで確認されており、葬送様式のみならず、当時の生活基盤・社会構成についての総合的な研究が進むことを願う。また周辺集落の実態が明らかになれば、日岡古墳群につながり、再び西条丘陵に築造される行者塚をはじめとする大型古墳群や、西条庵寺にもつながるこの地域の重要性を裏付けることが出来るのを期待したい。

また、篠宮 正氏には出土土器の所属時期についてのご助言をいただいた。記して感謝いたします。

（友久伸子）

注1：『加古川市史』第1巻（本編1）1989年・第4巻（史料編1）1996年

注2：『平成29年度 埋蔵文化財調査年報』兵庫県立考古博物館 2018年10月

注3：平尾英希・西岡巧次『片山遺跡発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告3 2021年3月

注4：『西条古墳群調査略報』西条古墳群発掘調査団 1964年6月

注5：高瀬一嘉ほか『川原・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告 第104冊 兵庫県教育委員会 1992年

注6：山田清朝『東沢1号墳』兵庫県文化財調査報告 第431冊 2012年3月

注7：『平成30年度 埋蔵文化財調査年報』兵庫県立考古博物館 2019年12月

注8：『手木遺跡発掘調査報告書』加古川市教育委員会 2003年3月

注9：篠宮正氏（兵庫県まちづくり技術センター）のご助言による。

注10：松本正信・加藤史郎『西条52号墓発掘調査の記録』『弥生墓からみた播磨』

第9回播磨考古学研究集会の記録 2009年2月

注11：篠宮正・友久伸子ほか「西条52号墓出土品の共同研究」『兵庫県立考古博物館研究紀要第7号』

2014年3月

弥生土器（Y22）



(3) 西条52号墓の概要

墳丘は直径約11.5mの円丘部の南東側に幅約5.5m、長さ6.6mの突出部が存在する。墳丘には、盛土が存在し、裾部には列石を巡らしている。列石の東側部分は上下二段になっており、突出部の先端の列石の状況は明らかではない。

埋葬施設は、東西方向に主軸をとる長さ37m、幅2.0mの墓道に、角樋で東方向の一辺を久くコ字形の堅式石槨を築いている。底面には円錐を敷いており、天井石は存在しない。石槨内では西側小口寄りの覆面上から鉄剣が出土している。上層には円錐堆が存在し、内行花文鏡が割れた状態で出土している。この円錐堆内からは、壺や高杯などの土器も出土している。

石槨の周囲の墳丘内には、5基の土器棺が配置されていた。石槨の西側に土器棺1、東側に土器棺2、3、南側に土器棺4・5が位置する。



第2図 西条52号墓遺構配置図（前報告書を改変、加筆）

3. 西条52号墓の出土遺物の再整理と検討

(1) 西条52号墓出土の土器

西条52号墓からは、石棺の周囲の埴丘に埋置された土器棺、および石棺内に落ち込んだ円錐堆の中から、蓋・鉢・壺などが出土している。

1：土器棺1（石棺西側）

石棺土坑の北西隅外側に近接した浅いピットから出土した大型壺の底部である。器壁は厚く、胎土には直径1～3mmの砂粒が多く含まれる。底部は突出するが、やや不安定な平底である。下端の周間に輪状の剥離痕があり、底部補強のため粘土紐を貼り付けていたと思われる。体部下半は土器棺2・3に比して丸みを帯びている。外面にはハケ調整の後ヘラミガキ、内面にはハケ調整を施す。前報告では外面に化粧土、内面に赤色顔料を塗布しているとの記載があったが、今回の分析で断面との比較により鉄(Fe)を顕著に検出したため、ベンガラを施布した可能性が高い。

2：土器棺2（石棺東側）

石棺土坑の東辺外側に近接して出土した大型の壺である。口縁部を欠くが以下はほぼ完存する。前報告の実測図では、筒状にやや内傾して立ち上がる頭部下端に刻み目を施した断面方形の突帶を巡らせているが、現況では剥落し所在不明である（実測図では先の図を手掛かりに図上復元した）。欠損している口頭部は土器棺4のそれに類似するものであったと思われる。体部に比してやや小さめの突出する底部から体部下方は直線気味に開き、重心はやや上方にある無花果形の体部である。底部に近接して洗成後穿孔が1個みられる。外面はハケのちぢや粗いヘラミガキ、内面はハケのちナデによる。体部の容量は61.80リットルである。前報告では赤色顔料の塗布ありとの記載があったが、現状では認められなかつた。

3～5：土器棺3（石棺東側）

土器棺2のすぐ北側、石棺土坑の北東隅外側に近接して出土した。

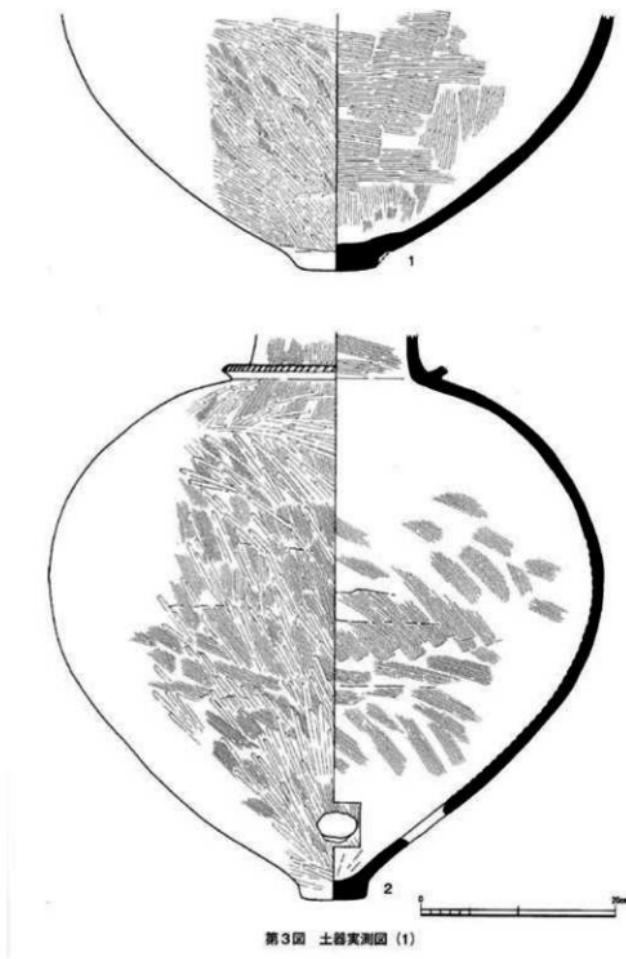
3：片口の注口を持つ大型の鉢である。口縁部はくの字状に屈曲して開き、端部をわずかに上方に引き上げる。体部は上寄りに重心をおいてやや丸みを帯びている。内外面ともにヘラミガキにより整える。前報告では土器棺の蓋として使用された可能性があるとの記載がある。赤色顔料の塗布ありとの記載もあったが、現状では認められなかった。底部は平底ではあるがやや不安定で、口縁部端面も明瞭ではなく、後期でも後半以降のものである。土器全体の容量は20.89リットル、体部の容量は15.90リットルである。

4：器壁が厚く、おそらく大型の壺の底部である。安定感のある平底で、外面ヘラミガキ、内面ハケ・ヘラミガキで整える。

5：壺または鉢の底部である。内面にハケ調整が残る。胎土やつくりが、他と違和感があり、混入の可能性もある。

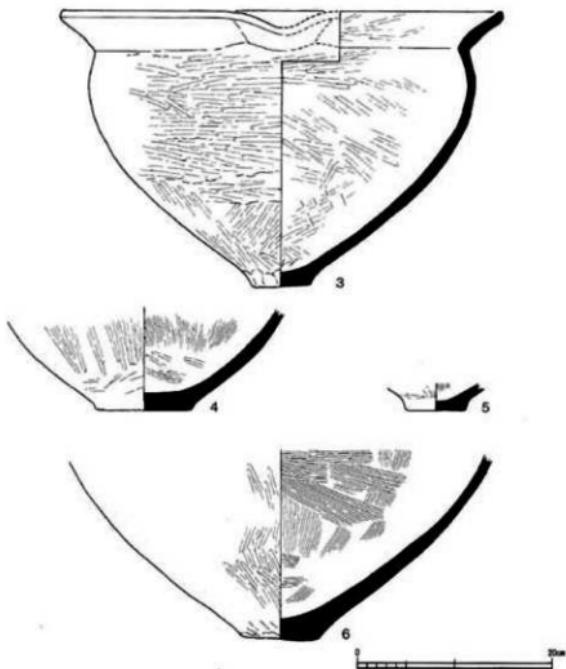
7：土器棺4（石棺南側）

石棺土坑の南辺外側に近接して出土した大型の広口壺である。前報告では口縁部・頭部下端部～肩部・体部下半～底部の3部分を図上で復元されていた。他にも同一個体と思われる破片が多数あり、今回も



第3図 土器実測図(1)

『兵庫県立考古博物館研究紀要第7号』2014年3月
—「西条52号墓出土品」の共同研究—より抜粋
3-(1)-P35 (友久伸子・篠宮 正)



第4図 土器実測図(2)

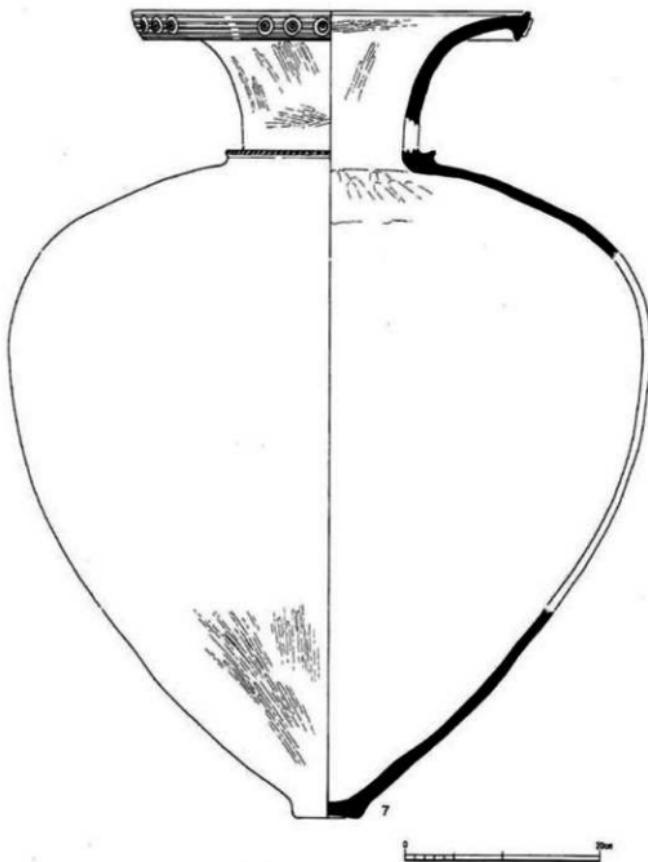
接合を試みたが叶わなかった。前回と同じく無花果形の体部の広口壺とし、同一個体として図上復元した。

大きく外反して聞く口縁部は、端部を上下に拡張し、縁面に5条の平行する沈線を巡らせる。その上には3個一対の大小二重に竹管文を押捺した円形浮文を貼り付ける。それらの間隔から5単位存したと推定できる。内外面はヘラミガキで整える。

頸部下端には突帯を貼り付け、その端部にはヘラによる割み目をめぐらせる。肩部内面は強い指ナデで整形し、外面の残りは悪いが、おそらくヘラミガキであろう。

底部は全体の器形からすると小振りで、安定感を欠き、わずかに上げ底気味である。風化が顕著ではあるが、直線気味に聞いて立ち上がる体部外面にはヘラミガキが残る。口縁部から肩部の広い範囲に赤

色顔料が残り、分析の結果、水銀朱であることが判明した。土器全体の推定容量は87.91リットル、体部の推定容量は84.87リットルである。



第5図 土器実測図(3)

前報告で図化表記されている土器棺4-2は4-1の底部と同一と考えられる。

6：土器棺5（石棺南側）

土器棺4からさらに南に3m、おそらく推定円丘部附近から出土した大型の壺または鉢の底部である。底部は安定感のある平底で、体部は少し丸みを帯びて立ち上がる。器壁は厚く、外側はヘラミガキ、内側はハケで整える。前報告では外側に赤色顔料の塗布ありとの記載があったが、現状では認められなかった。

8～15：円錐堆内出土土器

壺（8～10）、器台（11）および高壺（12～15）が、鏡と共に石棺内に落ち込んだ円錐堆内から出土している。

8は広口壺である。口縁は簡約の頭部から尾曲してほぼ水平に開き、その頭部の上下に粘土紐を付加して抵抗する。浅い四輪で作した下端には半載竹管により半円形の押捺をめぐらし、その間にハラ描き沈線による割文を施す。頭部下端には突帶を貼り付け、口縁端部と同じ半円形の押捺を施す。肩部は大きく張って開き、体部中位をくくものの、ほぼ平らに開く底部に続くものと思われ、扁球状の体部であったと推定される。外側はヘラミガキ、内側はハケ調整を施し、全体的に丁寧なつくりである。口縁部に赤色顔料の付着があり、分析の結果水銀朱であった。土器全体の推定容量は11.00リットル、体部の推定容量は8.85リットルである。

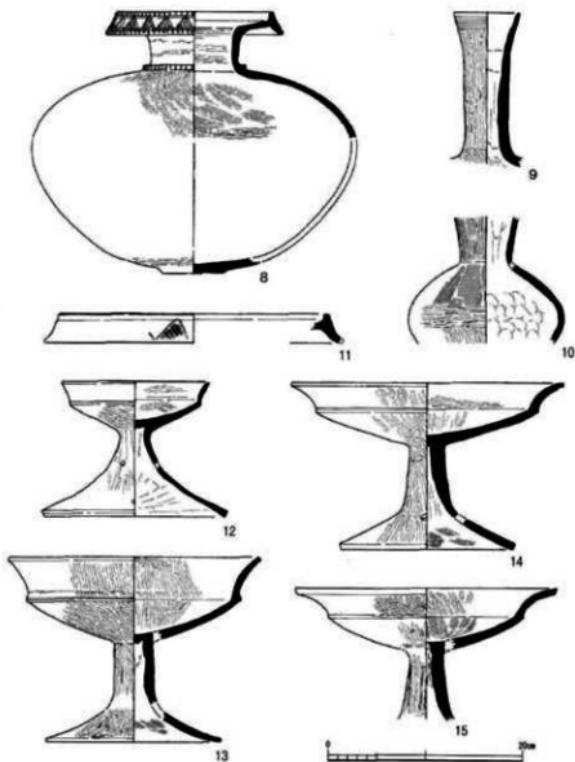
11は器台の口縁部である。8と同様に口縁端部の上下に粘土紐を付加して抵抗し、上端は平らに整えられる。端面にはヘラ描き沈線による割文を施し、文様構成も類似している。ただ、口縁端部の施文には刻み目が多く、銘文の内側は格子になっていて幾分の違いが認められる。残存部分は少ないものの、8の口縁よりかなり大きくなり、器台としてセットになるものとも考えられる。

9は細頸壺である。簡約に長く立ち上がり、穂やかに少し開く頭部のみで体部をくく。口縁上方部には3条の凹輪文をめぐらせ、以下をヘラミガキで丁寧に仕上げる。胎土は他の出土土器に比して精良である。肩部はほぼ水平に広がり、扁球状の体部が続くものであったと思われる。

10は口縁端部・底部を欠いているが、ほぼ直立する頭部が続き、長頸壺と思われる。全体に薄手で丁寧な作りである。外面頭部・体部上半はハケ調整、体部下半はヘラミガキにより仕上げている。内側はナデで、体部中位には指揮え痕が残るに残る。

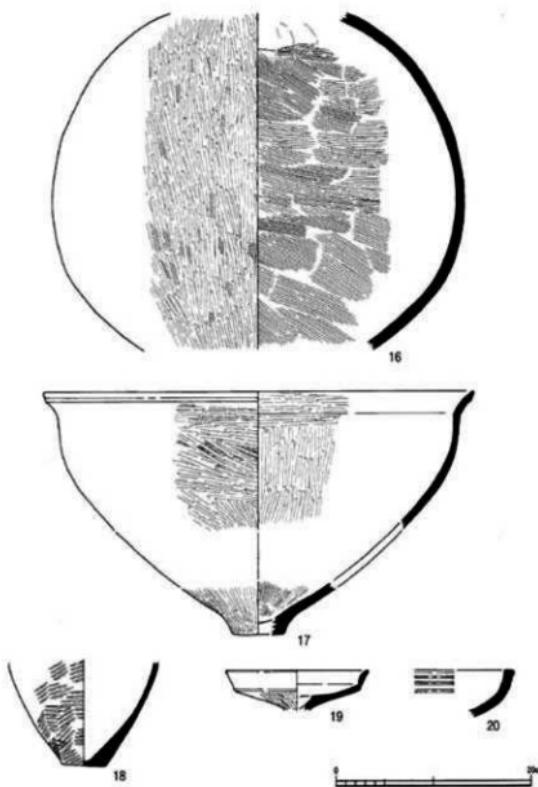
12は小型の壺部を持つ高壺である。口縁部は屈曲して立ち上がるが外反はわずかである。連続成形技法により、壺中央部には粘土板が充填される。ヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に作られるが、壺外部のミガキは若干粗く、砂粒の動きが頭部に残る。脚部は壺部に比して大きく開き、幅径は口径を少しぐれ。脚柱部の縱方向のヘラミガキは幅広で強く、模様を残している。小円孔が上下2段に互違いに穿たれ、上段は2個残存し推定3方向、下段は1個のみの残存である。脚部内側は上部に絞り目が残り、下部はヘラケズリにより薄くするが、端部は厚く残して端面がしっかりと形成される。壺部の容量は0.42リットルである。

13～15は浅い皿状の受け部から屈曲、外反して開く口縁部を持つ高壺である。いずれも図上復元によるものが、ヘラミガキにより丁寧に仕上げられ、簡約の脚柱部から脚端部が屈曲気味に大きく開く。13の壺部は他に比して深く、脚部とのバランスに違和感があるが、精良な胎土・とりわけ丁寧なヘラミガ



第6図 土器実測図(4)

キが他の個体と区別されることから、同一個体とした。14・15についても、胎土・調整技法等から同一個体と判断して図上復元した。壺部の推定容量は、13が2.16リットル、14が1.56リットル、15が1.28リットルである。



第7図 土器実測図(5)

16・17：突出部北側出土土器

16は蓋であるが、口縁・底部を欠き、ほぼ球形の体部のみである。厚手・大型で、土器館に使用されたものかと思われる。外面はハケのちヘラミガキで丁寧に仕上げられ、内面はハケ調整による。前報告で「突出部北側東端付近（正確な位置は不明）で出土した土器館の可能性のある一群の土器片で、図示できず」との記載のあるものであろう。分析を行ったが、表面と断面の差が認められず、赤色顔料は認

められなかった。

17は鉢である。くの字状にゆるやかに屈曲して聞く外反口縁を持つ。大きさの割に薄手で、内外面ともに丁寧にヘラミガキされた精製品である。突出する底部は平底で内面には蜘蛛の巣状のハケメがみられる。胎土・調整技法等から同一個体と認定し、図上復元した。土器全体の推定容積は17.60リットル、体部の推定容積は14.51リットルである。

18：石櫛肩部出土土器

18は外縁にタタキを施した壺である。「石櫛の南長便壁の西より地点の上部に近い石壁に引っかかるようにして」出土したものである。底部は平底であるが不安定で、内面からの剥離により薄く作られている。

19・20：出土位置不明

19は12と同様、小型の壺部を持つ高环である。口縁部は屈曲して立ち上がるが外反しない。連続成形技法による粘土板の充填の剥離が环中央部に残る。ヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に仕上げている。

20は内湾して立ち上がる壺部で、端部は水平方向に肥厚させ、外面に3条の凹線をめぐらせる。弥生時代中期の混入物であろう。

前報告としたものは、松本正信・加藤史郎「西条52号墓発掘調査の記録」西条古墳群発掘調査団〔『弥生墓からみた接庭』第9回考古学研究集会の記録 同実行委員会刊行 2009〕に特別報告として収録されたものである。

第2表 土器一覧

報告番号	出土位置	器種	残存部位	法量 (cm)				赤色顔料分析	前報告		
				口径	器高	腹径	底径		土器	傳國	写真図版
1	石櫛西側	壺	底部	26.3+		7.6		○	土器柄1	26	—
2	石櫛東側	壺	頭部・体部	58.0+	57.0	6.8			土器柄2	28	PL31-32
3	石櫛東側	鉢	全	(45.0)	26.1	39.2	6.2		土器柄3-1	29上	PL33
4	石櫛東側	壺	底部	16.3+		10.0			土器柄3-2	29下	
5	石櫛東側	壺	底部	2.7+		(6.2)			土器柄3-3	—	
6	石櫛南側	壺	底部	19.4+		8.2			土器柄5	33	PL35
7	石櫛南側	壺	口縁・肩・底部	(40.0)	(83.0)	6.8		●	土器柄4-1	31	PL34
8	円錐堆内	広口壺	口縁・肩・底部	(15.8)	(26.8)	6.4		●	壺1	35	PL25
9	円錐堆内	細底壺	口盤部	6.6	15.9+				壺2	36-9	PL26
10	円錐堆内	長颈壺	頸部・休部	13.0+	(16.0)						
11	円錐堆内	番台	口縁部	(27.8)	3.0+						
12	円錐堆内	高杯	全	15.0	13.8	19.1			高杯1	36-1	PL27
13	円錐堆内	高杯	全	(25.6)	(19.0)	(18.0)			高杯3-8	36-3-6	PL28
14	円錐堆内	高杯	全	(28.0)	(17.1)	(18.0)			高杯2-4-6	36-4-5-7	PL28-29
15	円錐堆内	高杯	杯・脚柱部	(26.8)	13.6+				高杯5-7	36-2-8	PL29
16	突出部北側	壺	体部	(34.5)	(42.4)			○			
17	突出部北側	鉢	口縁・底部	(44.0)	(25.0)	(5.5)					
18	石櫛肩部	壺	底部	10.7+	15.3	4.0			壺	37	PL30
19	不明	高杯	坪部	(14.4)	4.2+						
20	不明	高杯	口縁部		4.9+						

● 水添未 ○ ベンダラの可能性

5.まとめ

今回の西条52号墓出土品の調査研究は、土器および鏡の再整理を行うとともに、自然科学的分析を行い、基礎的な資料提示を行った。土器については、前回、報告されている個体の再分類・再接合を行い、接合により明らかになった個体の再実測・復元を行い、赤色顔料等の付着物の分析を行った。

内行花文鏡は、銅鏡の形状・文様を正確に記録化するために三次元デジタル計測を行い、鏡片の配置の復原を行った。直径は約17.6cmである。また、鏡の成分分析および赤色顔料等の付着物の分析を行った。ここでは、遺物などから西条52号墓の位置付けを行う。

(1) 西条52号墓の時間的位置付けについて

西条52号墓から出土した土器の再整理によって、製作時の調整を追加した他、新たに全体の様相が判明したものの（8・13・14）と、新たに実測を行ったもの（10・11・16・17）がある。

石棺内に落ち込んだ円錐形から出土した壺8は、体部が扁球形で頭部は短く直立し、口縁部を鋸歯文帯で飾る特徴的な土器である。類例には唐宮大廈墳丘墓A地点から出土した壺（図18.8）があり¹¹、エビ上東とし、鬼川市Ⅲ式に位置付けている。口酒井遺跡1号円形削頭墓から出土した壺G5は頭部が外輪するが、口縁部の加飾は著しい。弥生時代後期末から古墳時代初期に位置付けられている¹²。また、久宝寺遺跡・竪草地区の第6-1面（弥生時代後期後半）の07001落込からは壺8と同様に頭部は長いが扁球形の体部を持つ壺（図130.4）が出土している¹³。口縁部や肩部を同心円文等で加飾しており、ミニチュア土器も共作していることから祭祀に使用されたと考えられている。頭部形態や体部最大径の突堤の有無、胎土などの差異はあるものの、口縁部を拡張させ鋸歯文帯を施すことや、体部の扁平率の特徴などから、特殊壺との間連性がうかがえる。

器台IIは壺8とセットになると考えられる。口縁部を拡張させ鋸歯文帯を施す器台は僧中南部地域を中心として分布しており¹⁴、その時期は弥生時代後期後半（後・II・Ⅲ期）に位置付けている¹⁵。

細頭壺9・10は細頭壺dに分類しており、弥生時代V-3期から庄内1期までの後期後半を中心に出土している¹⁶。9・10に類似するものには、明石川流域の日輪寺遺跡SH03から出土した壺があり¹⁷、口縁部の形態・長さ・太さはほぼ同一であり、Ⅲ期（弥生時代後期後半）に位置付けている¹⁸。また、百間川原尾島遺跡6の井戸1から出土した345も口頭部の法量・形状が同一であり、百・後・IIに位置付けられている¹⁹。

高杯IIは小型有高杯で、東播磨地域では客体的である。類似するものに、西播磨地域の新宮宮内STD01から出土したY619²⁰があり、V-4期に位置付けられている²¹。

土器32に類似するものには、川除・藤ノ木遺跡SK63から類例が出土している²²。二重口壺蓋739は底部を欠き、一回り小振りであるが、口頭部まで残っている。川除5期に位置付けられている²³。また、SH52から874・875が出土しており、874はやや細身であるが、底部の形態や突堤の位置が土器2と同一である。874・875とも口頭部が残存しており、頭部の傾きは緩やかである。口縁端部は拡張し、円形浮文を貼り付けており同一の属性を有する。川除3期・5期は弥生時代後期後半に位置付けられており、庄内期より前に位置付けられている²⁴。

主要な土器から見ると、西条52号墓は弥生時代後期後半に位置付けることができる。

播磨地域で同時期の遺構から内行花文鏡が出土している遺跡には、西条52号墓の他に、岩見北山1号墓があり竪穴式石槨から採集されている²⁵。集落からは大中遺跡、7-A号住居跡から内行花文鏡の破鏡が出土²⁶し、夏孔を穿たれている。大中Ⅱ式（古）に位置付けられている²⁷。いずれも後期後半である。

(2) 西条52号墓の空間的位置付けについて

遺物などから、弥生時代後期後半の年代を位置付けたが、西条52号墓の被葬者が掌握した空間領域はどうであろうか。母体と考えられる集落には脚下に広がる平野部の手末遺跡⁽¹⁰⁾があり堅穴住居が調査され、讃岐地域の窓が搬入されており注目される。しかし、漢鏡を入手し得たことを考えると、より広域的に掌握していたと考える必要がある。加古川下流を広域的にとらえ、中期から継続して営まれる溝之口遺跡⁽¹¹⁾や美乃利遺跡⁽¹²⁾などの遺跡が、その中心であると考えられる。

遺物から交流を見ると、壹8・器台11などは吉備地域、高环12は西播磨地域、壹7は東からの影響を受けており、広域からの影響が読み取れる。

以上のように、西条52号墓の出土遺物の再整理により、初期古墳出現前夜に位置付けられる重要な弥生時代の墳墓であることを、あらためて提示できたのではないかと思う。

なお、本調査研究にあたり、西条町内会、佃正晴、奥村正人、松本正信、加藤史郎、岸本道昭、奥山誠義、持田大輔、増永光令、森岡秀人をはじめ多くのの方々にお世話になった。記して感謝申し上げます。(敬称略)

註

- 1 関智志彦・間瀬俄子・島田重司「岡山県岡山大塚古墳」『食敎考古学研究集報』第13号 真教考古館1977年
関智志彦「土器式年から見た各地の初期古墳」『歴史公報』第7巻2号 岩山屋出版 1981年
- 2 六甲山麓遺跡調査会「口添丹波遺跡 - 第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要 -」伊丹市教育委員会 2000年
- 3 『財』大阪府文化財センター「『宝寺遺跡・堺東地区の発掘調査報告書』」2007年
- 4 福井元廣「『備の弥生窓跡 - 古谷の考古学的研究』(上) 山陰新聞社 1992年
- 5 大塚重政「『谷台形土器』『吉備の考古学的研究』(上) 山陰新聞社 1992年
- 6 稲宮正「『東播磨地域の土器窓跡』『弥生土器窓跡と縄手 - 接觸器 -』大手前大学史学研究所 2007年
- 7 神戸市教育委員会「『輪寺寺跡発掘調査報告書』」2002年
- 8 山田清朝「『弥生時代後期 - 古墳時代初期の土器』『日輪寺寺跡発掘調査報告書』」神戸市教育委員会 2002年
- 9 岡山県備文化財センター「『官営岡原馬鹿遺跡』岡山県教育委員会 2004年
- 10 新宮市教育委員会「『新宮宮内遺跡』新宮市文化財調査報告書』2006年
- 11 萩友樹子・田中元治「『西播磨地域の土器窓跡』『弥生土器窓跡と縄手 - 接觸器 -』大手前大学史学研究所 2007年
- 12 兵庫県教育委員会「『輪・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告書106号 1999年
- 13-14 斎藤一彦「『弥生時代 - 古墳時代前期の土器』『日輪・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告104号 兵庫県教育委員会 1992年
- 15 松本正信「『蘿原市とその周辺の考古資料』『蘿原市史』第4巻 1984年
- 16 播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館「『播磨大穴遺跡の研究』」1990年
- 17 山本三郎「『大中遺跡の後題 - 丹末窓跡と土器』『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館 1990年
- 18 加古川市教育委員会「『手末遺跡発掘調査報告書』」2003年
- 19 加古川市教育委員会「『溝之口遺跡発掘調査報告書1』」1992年
兵庫県教育委員会「『溝之口遺跡』兵庫県文化財調査報告書30号 2006年
- 20 兵庫県教育委員会「『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告書166号 1997年

全体にかかる参考文献

- 松本正信・加藤史郎「西条52号墓の記録」「『吉備からみた播磨』第9回播磨考古学研究会の記録 第9回播磨考古学研究会実行委員会 2009年
西条古墳群発掘調査会「『西条古墳群発掘調査』」1994年
齊谷英宜「『吉備の古墳』神戸市立考古館 1973年
穂定洋介「『播磨における弥生時代青銅器の特質』『今治城次先生古希記念播磨考古学論叢』1990年

あとがき

東播磨地域史懇話会の考古部会として遺物調査をはじめてから半日ごとの作業でしたが3年が過ぎました。その間、コロナ禍の影響を受け遅々として調査は進まない時期が続きましたが、ようやくその成果を公表する運びとなりました。今回の遺物調査では多数の遺物が確認できましたが、実測図として公表できたのは、弥生時代から古墳時代にかけての遺物になり、中世の遺物は公表することができませんでした。

西条古墳群調査報告書をまとめるにあたって、多くのの方々および関係団体のご支援やご協力がありました。皆様方からいただいたご厚意に深く感謝いたします。

まず、遺物の保管者である西条町内会の皆様方には、調査を行うことに対してご理解をいただき、さらに西条会館の一室を長期間にわたり使わせていただきました。また陵北小学校の一室も遺物整理の場所として使わせていただきました。

次に本調査事業を遂行するにあたっては、平成30年度には、兵庫県の東播磨流域文化協議会の地域活性化事業の助成をいただきました。その成果は「西条古墳群 一出土遺物の実測調査報告」として報告をさせていただきました。さらに、令和3年度には加古川市協働のまちづくり推進事業補助を活用させていただき本調査報告書の刊行に結びつけることができました。その過程で市の関連機関として加古川市教育委員会文化財調査研究センターとの連携を図りながら事業が遂行できたことも大きな力になりました。

そこで、私どもは、当時の調査に関わられた方々のお名前を本報告書に載せたく思い、昭和39年6月に発刊されました「西条古墳群調査略報」、当時の「調査日誌」、「遺構の実測図や墳丘測量図」にお名前のある方、また「第9回播磨考古学研究集会の記録」の特別報告「西条52号墓発掘調査の記録」に記載されたお名前を本報告書に載せさせて頂き、当時の労をねぎらいたいと思います。

調査参加者について

○昭和39年6月「西条古墳群調査略報」西条古墳群発掘調査団に記載のある「調査員及び調査参加者」の方々（31人）

是川 長・葛野 豊・松本正信・上田哲也・喜谷美宣・松岡秀樹・正木明男・河野通哉・村上紘揚・加藤史郎・多淵敏樹・伊藤久嗣・岡村 稔・葛原克人・奥崎保子・丸山竜平・堀江門也・福西康至・大井邦明・細川真樹・萩原儀征・平村友明・庄司 克・福井英治・尾崎泰子・和田敏子・木川幸二郎・土井伸一郎・溝潤耕三・山下 健・立花由和

○発掘調査日誌にお名前のある方々（順不同）（49人）

是川 長・村上紘揚・葛原克人・堀江門也・奥崎保子・葛野 豊・松本正信・福西康至・大井邦明・丸山竜平・河野通哉・松岡秀樹・尾崎泰子・加藤史郎・中原敏定・正木明男・福井英治・庄司 克・伊藤久嗣・和田敏子・喜谷美宣・岡村 稔・奥田哲通・佐田 茂・中島 泰・野上丈助・磯田義賢・吉田茂樹・熊倉房明・大塚ひろみ・小田君子・萩原儀征・吉田雅子・平村友明・萩本 勝・吉岡信丈・田中・市村・井口・大工大高生6人（畠間・蘇・永谷・上田・三上・山形）

協力者・・・松岡秀夫・島田 清・野地修左・多淵敏樹

○遺構実測図にお名前のある方々（順不同）（37人）

是川 長・村上紘揚・葛原克人・堀江門也・奥崎保子・葛野 豊・松本正信・福西康至・大井邦明、

丸山竜平、河野通哉、松岡秀樹、尾崎泰子、加藤史郎、中原敏定・正木明男、伊藤久嗣、和田敏子、喜谷美宣、岡村 稔、佐田 茂、中島 泰、野上丈助、福井英治、磯田義賢、吉田茂樹、熊倉房明、大塚ひろみ、小田君子、萩本 勝、細川、都藤、立花、西谷、山形・大工大高生（三上）

○ 2009年「弥生墓からみた播磨」一附・特別報告「西条52号墓発掘調査の記録」— 第9回播磨考古学研究集会実行委員会に氏名の記載のある方々（団長1人・調査員13人・調査参加者31人・支援者10人と寺院）

調査団長 武藤 誠

調査員（順不同）

多淵敏樹、是川 長、葛野 豊、松本正信、上田哲也、喜谷美宣、松岡秀樹、正木明男、河野通哉、村上紘揚、伊藤久嗣、加藤史郎、中原敏定

調査参加者（順不同）

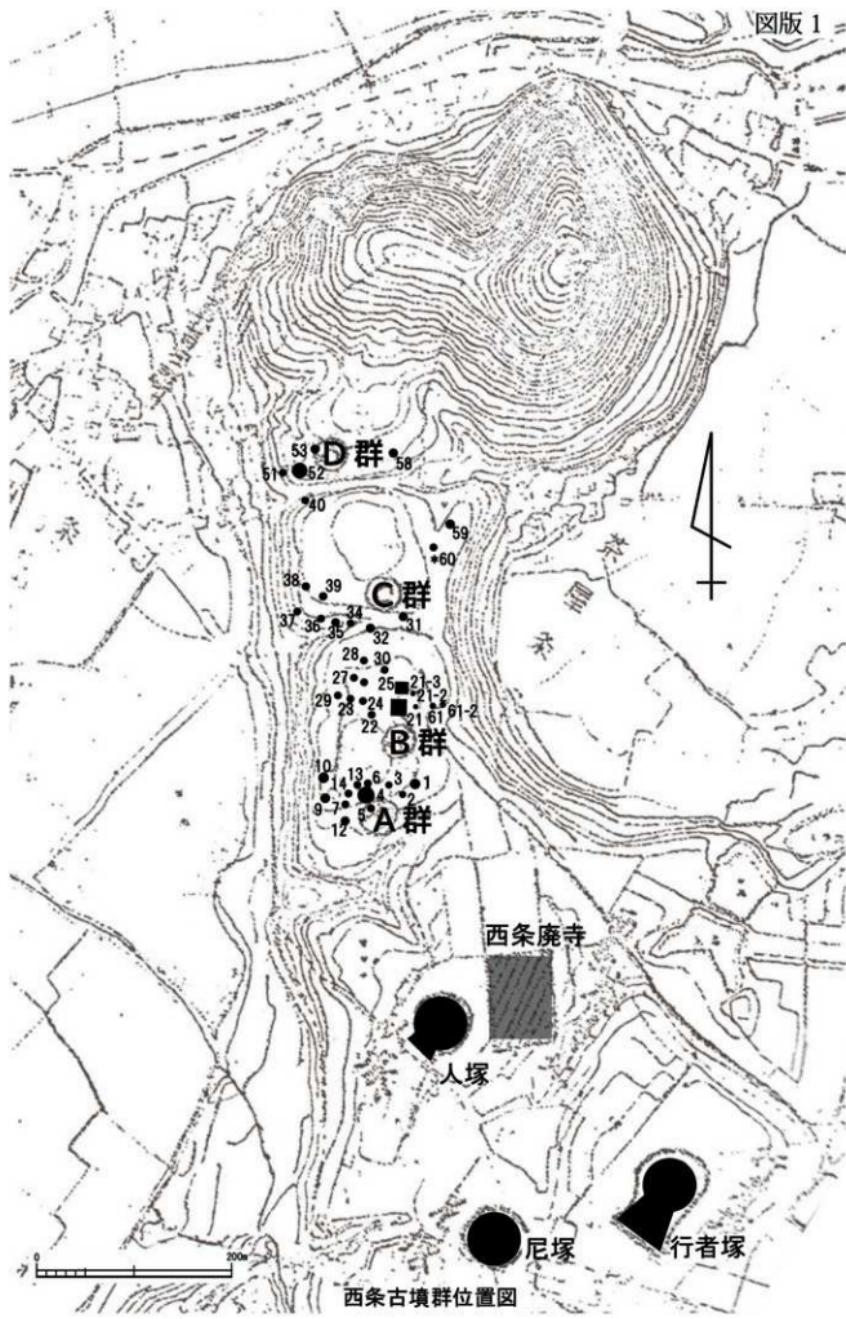
岡村 稔、葛原克人、奥崎保子、丸山竜平、堀江門也、福西康至、大井邦明、細川真樹、萩原儀征、平村友明、庄司 克、福井英治、尾崎泰子、和田敏子、伊藤 晃、日野朝子、磯田義賢、奥田哲通、佐田 茂、吉田茂樹、熊倉房明、大塚ひろみ、小田君子、吉田雅子、中島 泰、野上丈助、吉岡信丈、岡村 礼、西阪義雄、田中、徳岡

調査支援者（順不同）

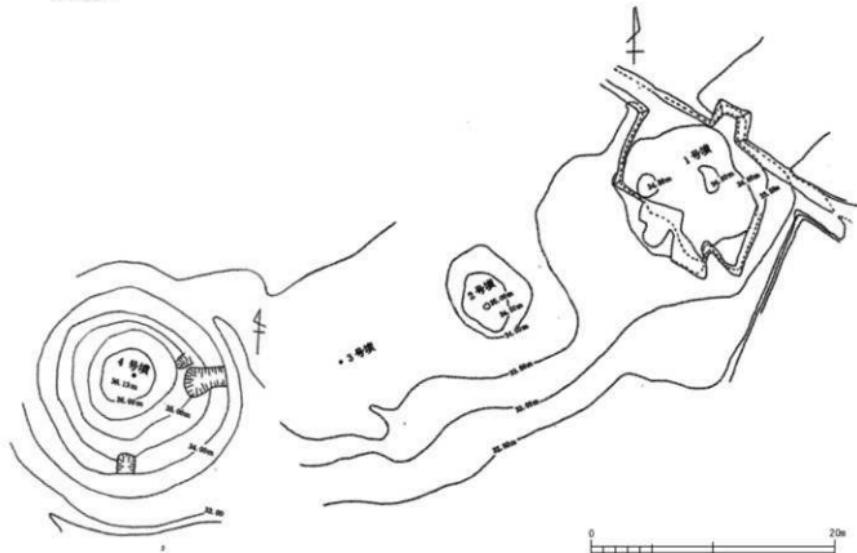
和島誠一、野地脩左、永江幾久二、赤松啓介、松岡秀夫（有年考古館）、黒崎基一、榎上重光、島 五郎、今里幾次、永昌寺、奥村俊治氏をはじめとする地元自治会役員各氏および自治会会員のみなさま



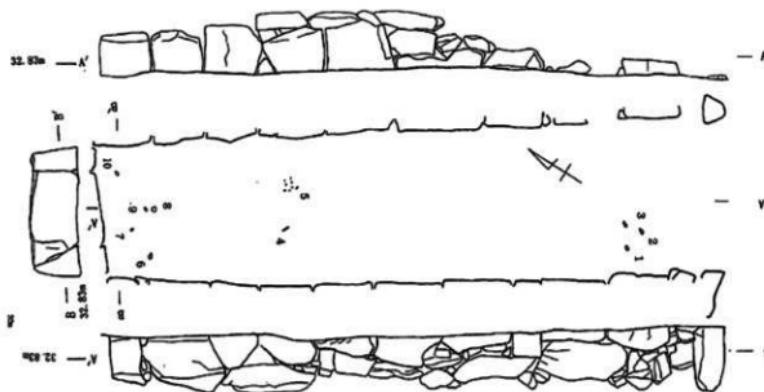
図版



図版2



1~4号墳と周辺の地形測量図

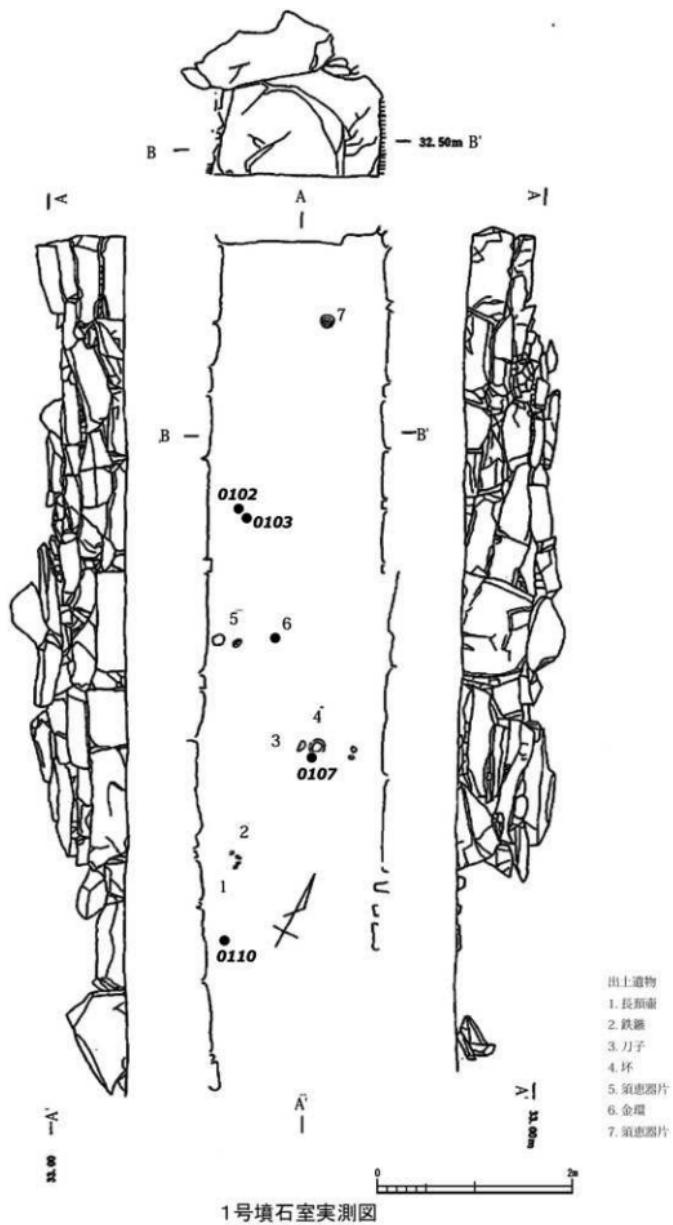


出土遺物

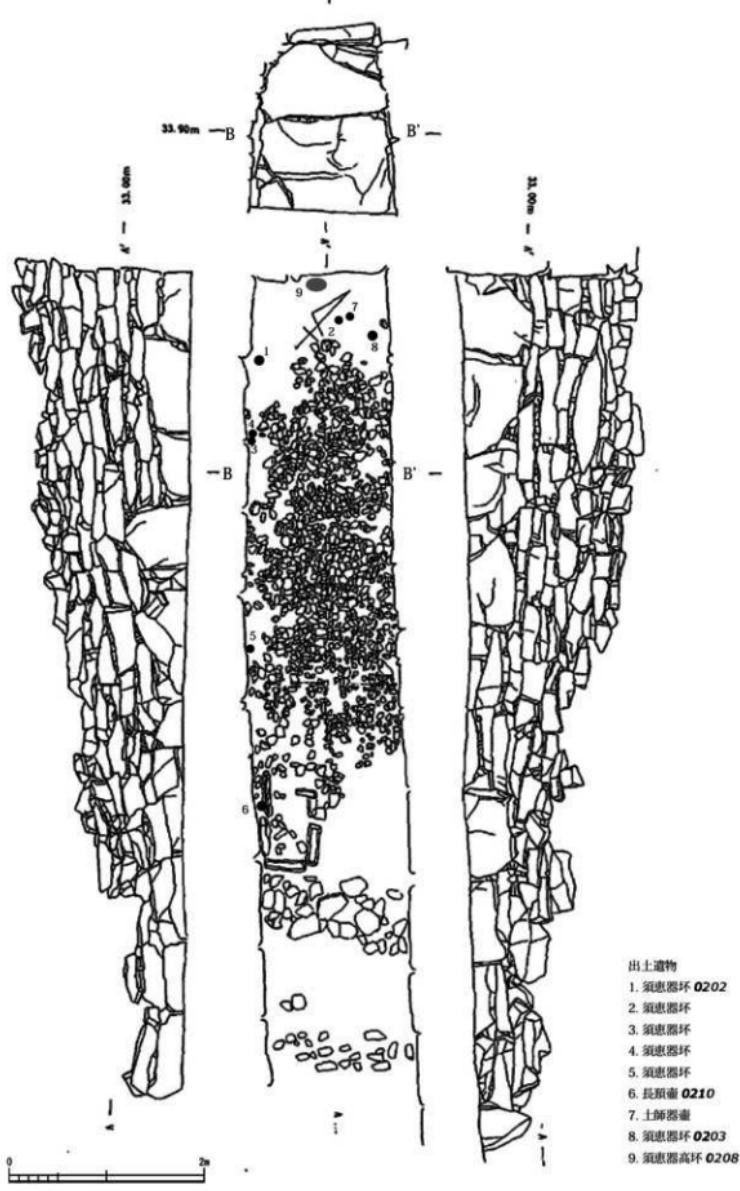
- | | |
|---------|----------|
| 1. 須恵器片 | 6. 鉄片 |
| 2. 上部器片 | 7. 須恵器片 |
| 3. 須恵器片 | 8. 鉄片 |
| 4. 鉄釘 | 9. 須恵器環片 |
| 5. 人骨片 | 10. 患器環片 |



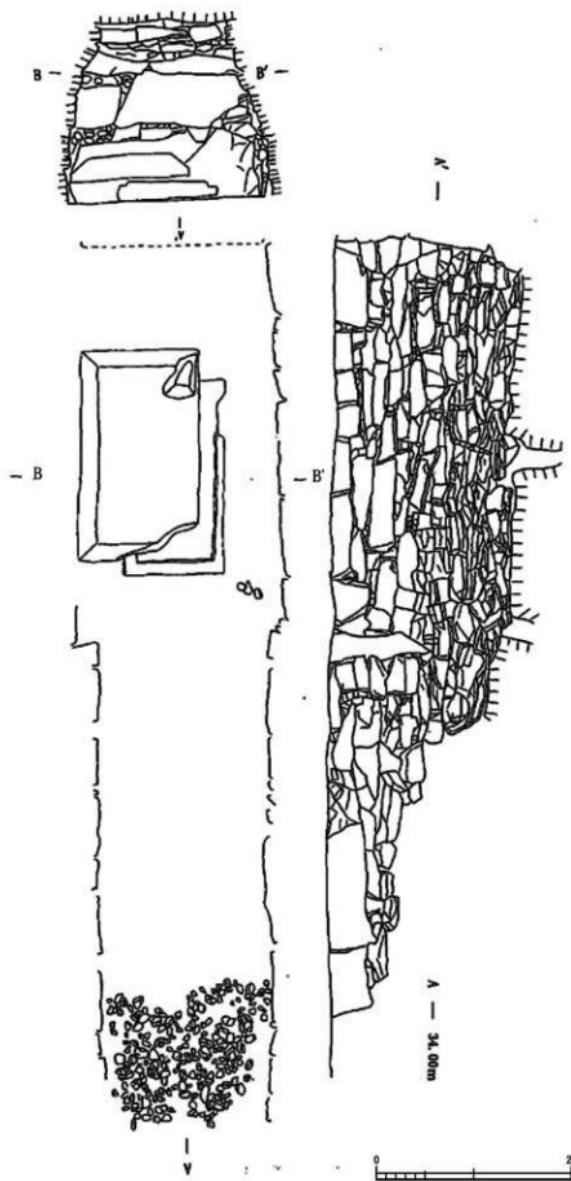
3号墳石室実測図



図版 4

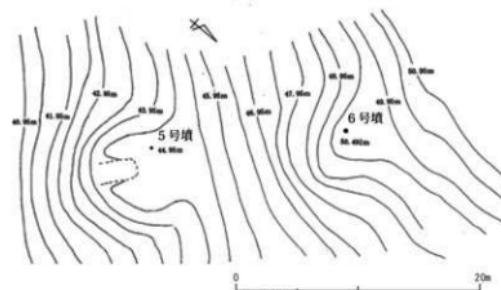


2号墳石室実測図



4号墳石室実測図

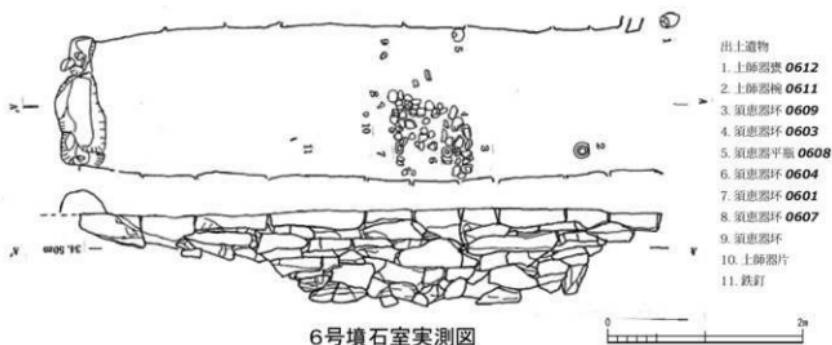
図版 6



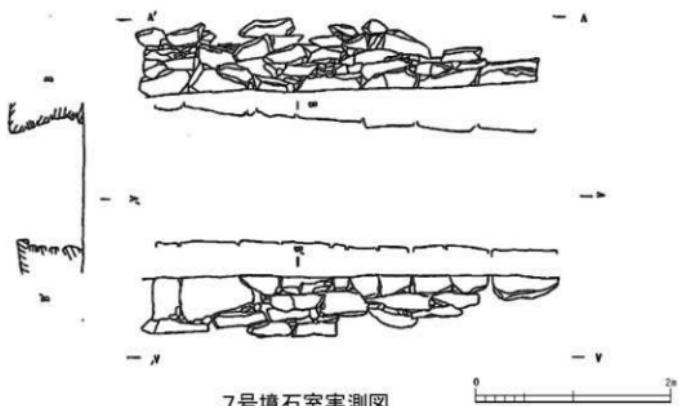
5・6号墳と周辺の地形測量図



5号墳石材残存状況図

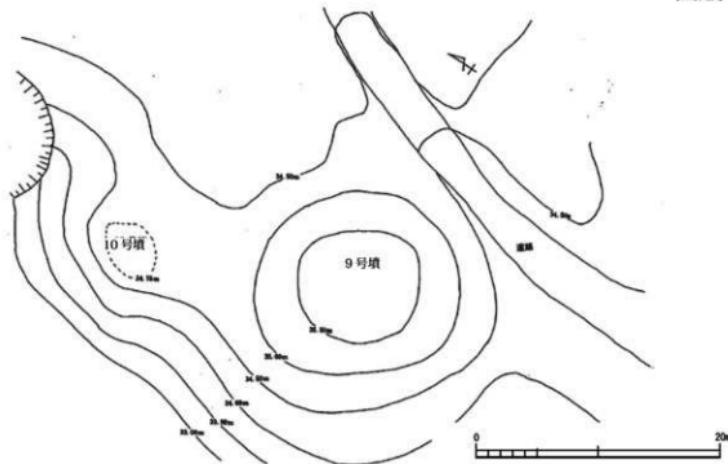


6号墳石室実測図

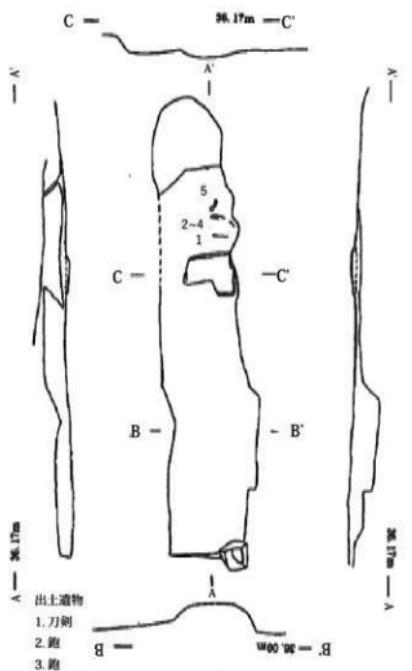


7号墳石室実測図

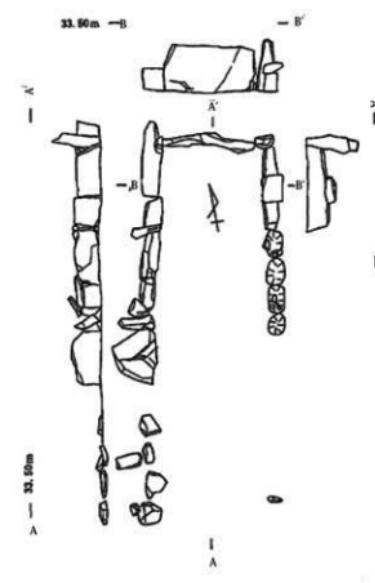
- 出土遺物
1. 上師器皿 0612
2. 上師器皿 0611
3. 須恵器壺 0609
4. 須恵器杯 0603
5. 須恵器平皿 0608
6. 須恵器壺 0604
7. 須恵器壺 0601
8. 須恵器杯 0607
9. 須恵器壺
10. 上師器片
11. 鉄釘



9・10号墳と周辺の地形測量図



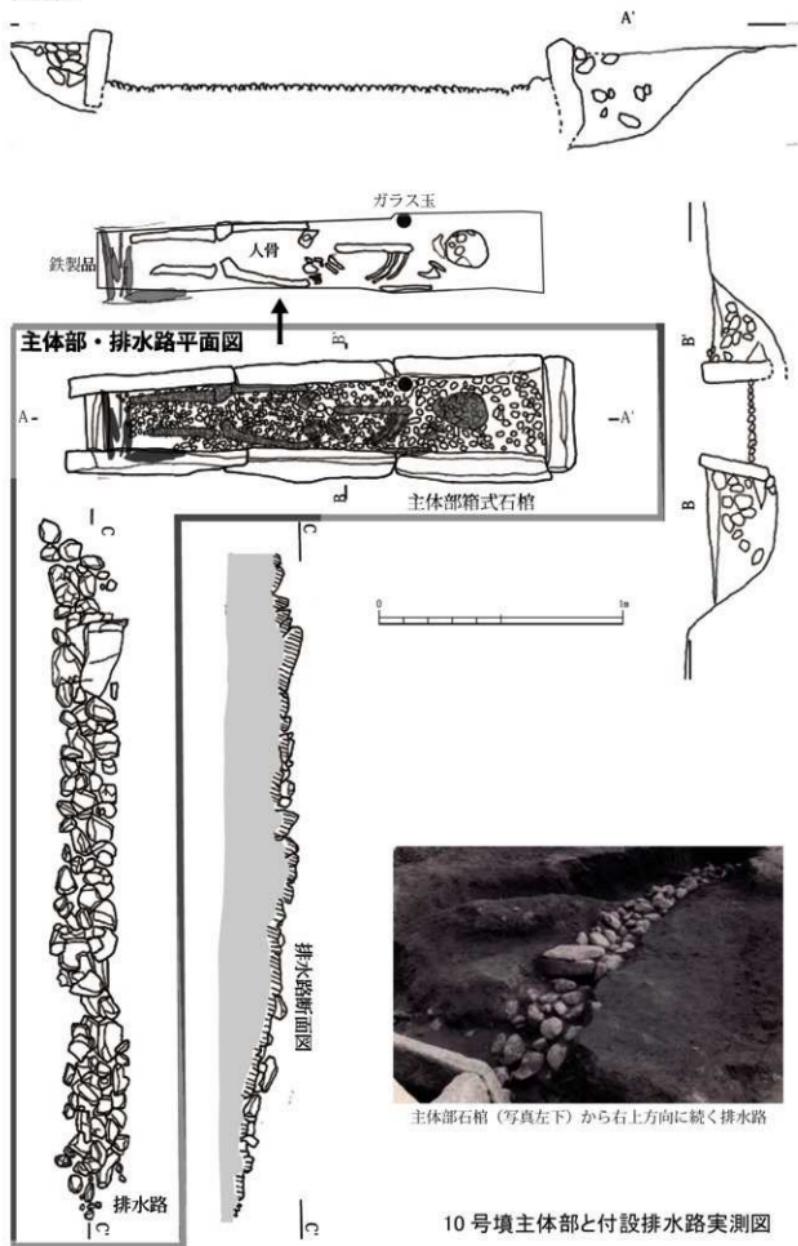
9号墳主体部実測図

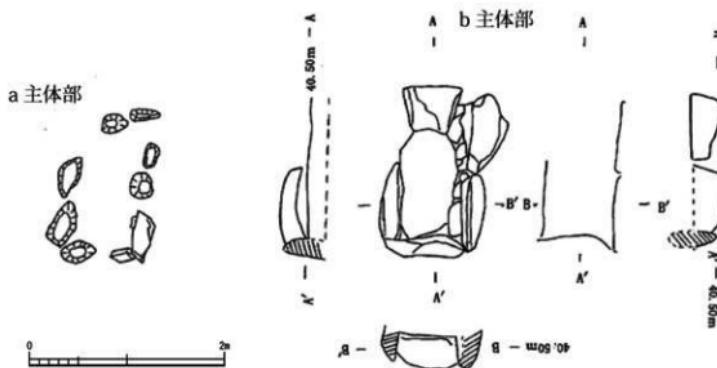


12号墳石室実測図

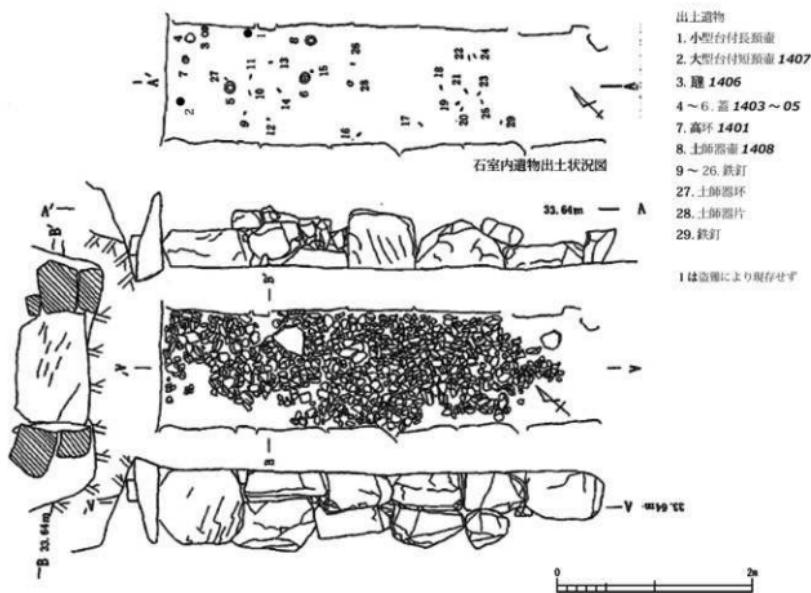
- 出土遺物
1. 刀劍
2. 鑓
3. 鏡
4. 鏡
5. 繩

図版 8

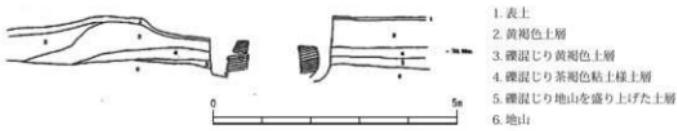




13号墳 a・b 主体部実測図

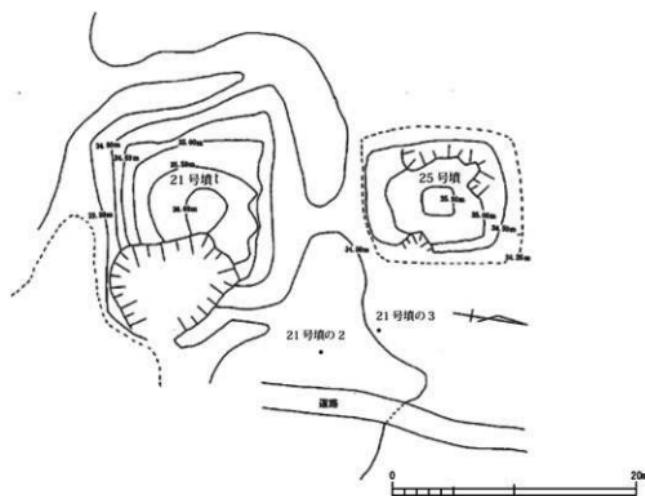


14号墳石室実測図

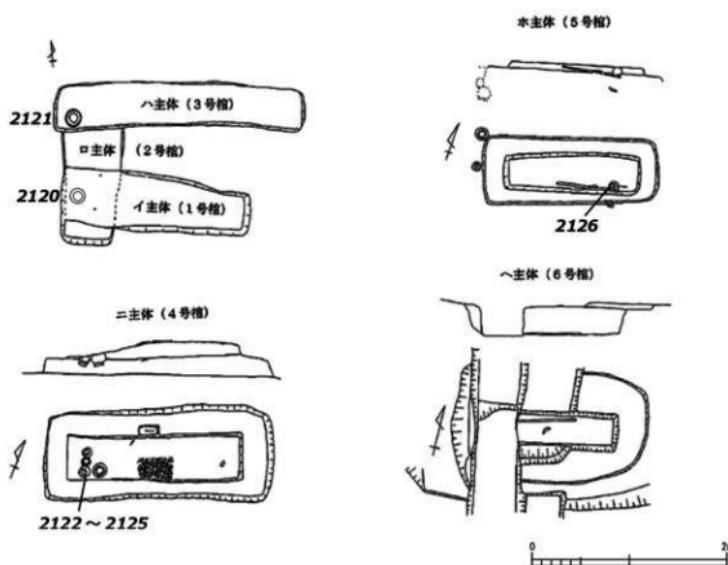


14号墳填丘断面実測図

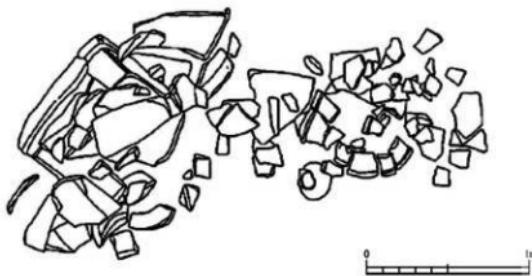
図版 10



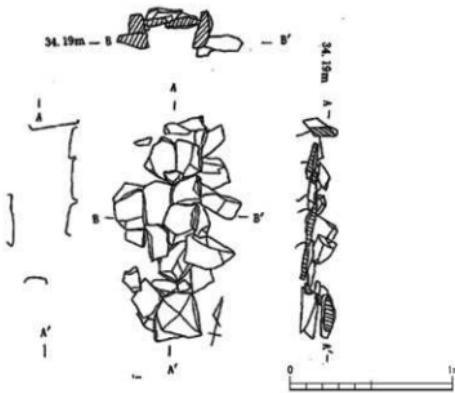
21・25号墳と周辺の地形測量図



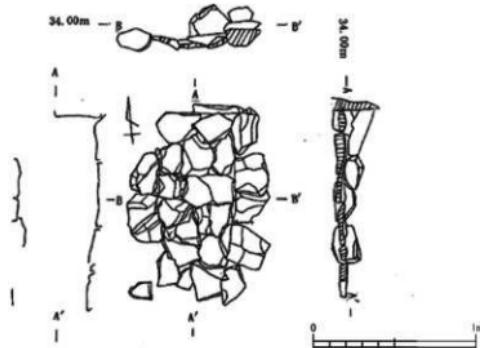
21号墳主体部(イ~ヘ)検出状況図



21号墳 家形埴輪他出土状況図



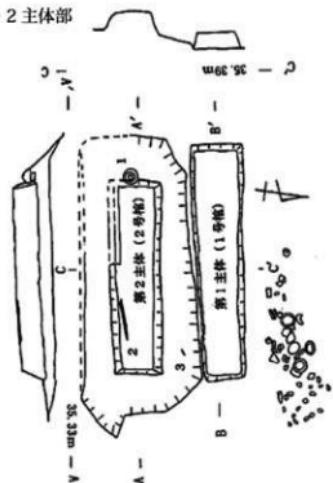
21号墳の2 小石室実測図



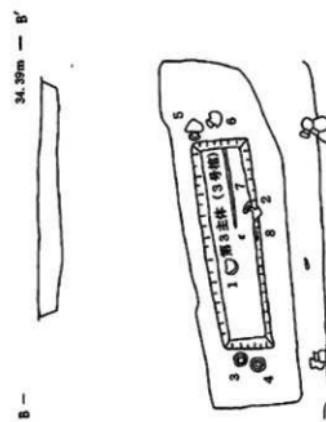
21号墳の3 小石室実測図

図版 12

第1・2主体部



第3主体部



第2主体部出土遺物

1. 磁
2. 鉄劍

第3主体部出土遺物

1. 須恵器環蓋 2521
2. 上飾器高环
3. 須恵器壺
5. 須恵器磁 2522
6. 上飾器壺 2525
7. 鉄刀

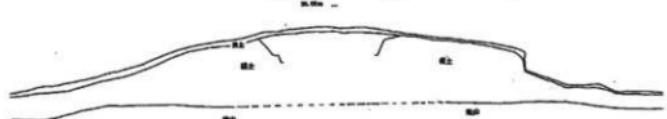
2523 - 2524

25号墳主体部（1～3木棺直葬）実測図

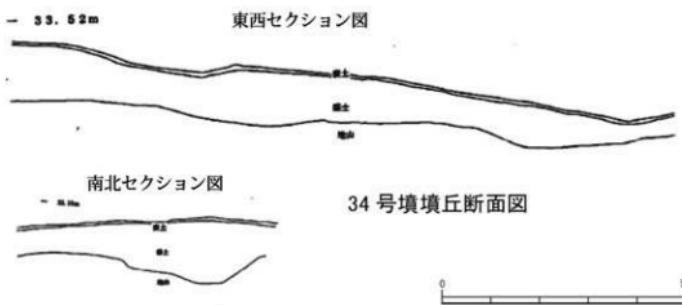
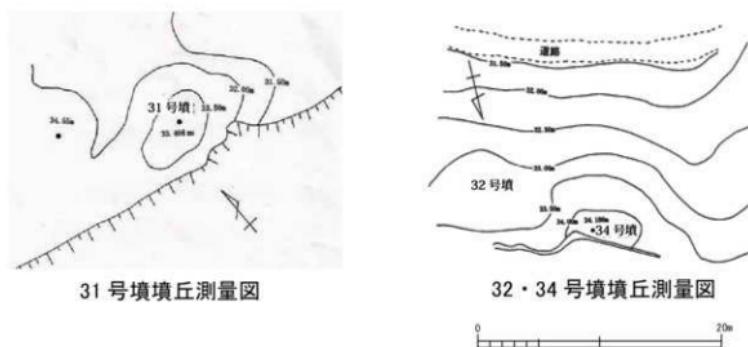
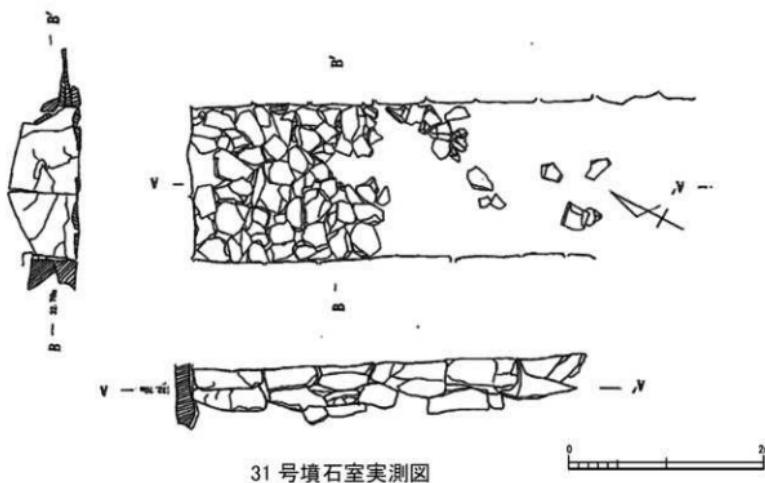
南北セクション図

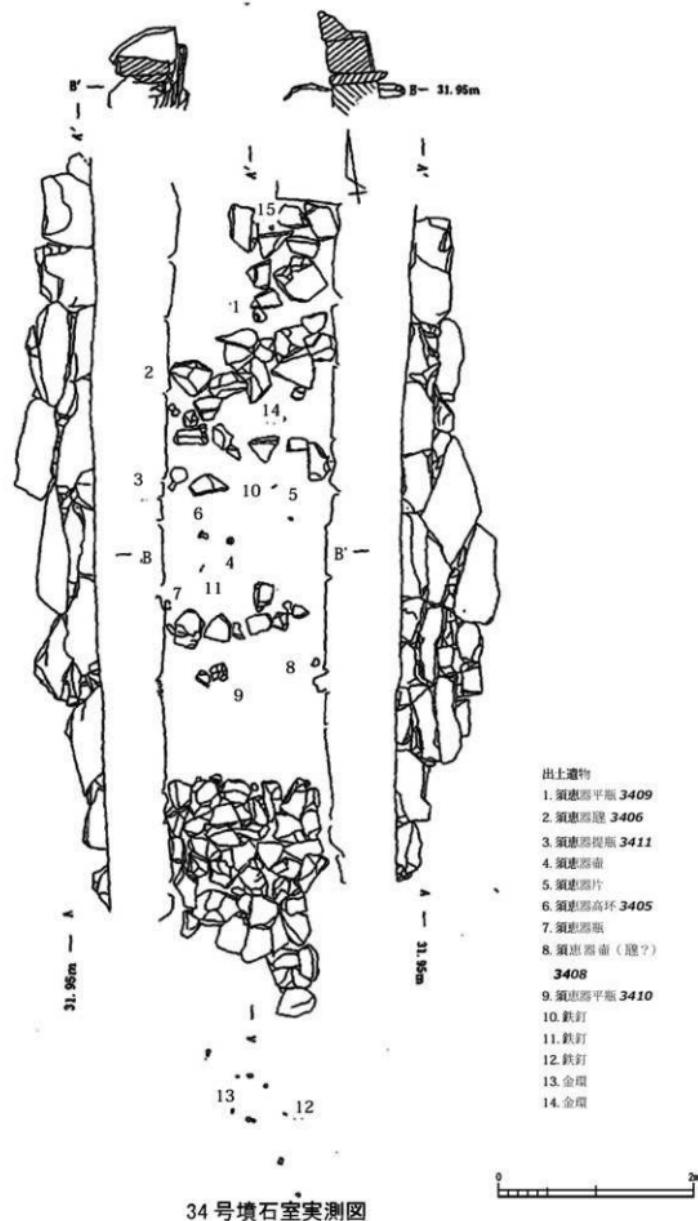


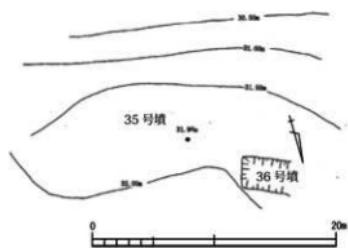
東西セクション図



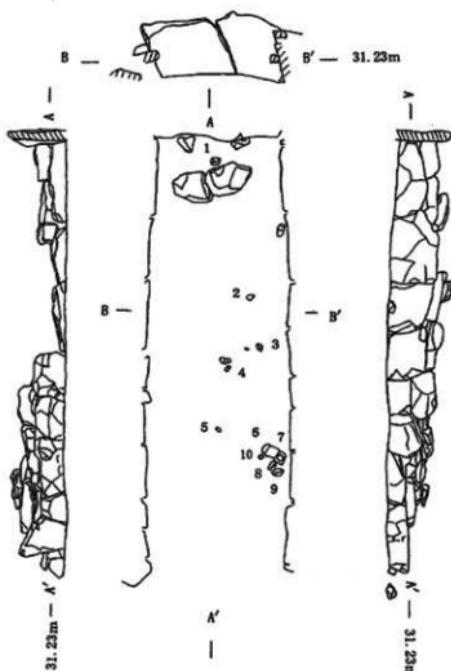
25号墳墳丘断面図







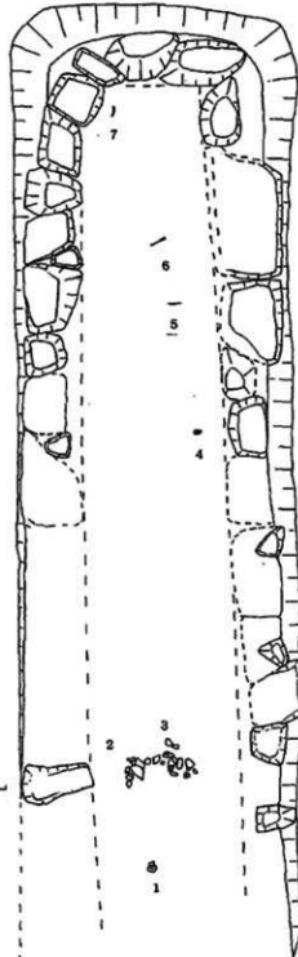
35・36号墳墳丘測量図



出土遺物

1. 須恵器 1 長頸壺 **3501**
 2. 須恵器 2 平瓶 or 短頸壺
3502
 3. 須恵器 3
 4. 上師器 1
 5. 上師器 2

35号墳石室実測図

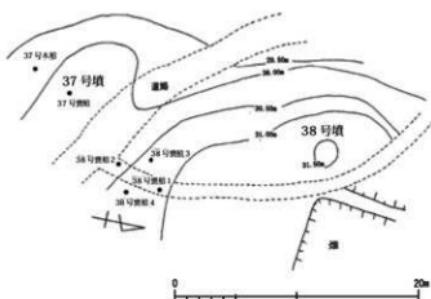


出土遺物

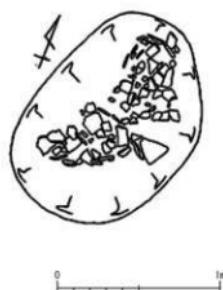
1. 須恵器高环
 2. 上師器
 3. 須恵器
 4. 須恵器高环
 5. 鉄釘
 6. 鉄器
 7. 鉄器

36号墳石室実測図

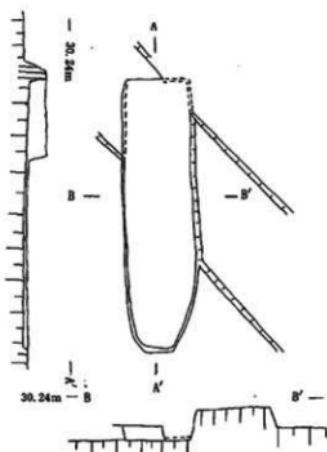
図版 16



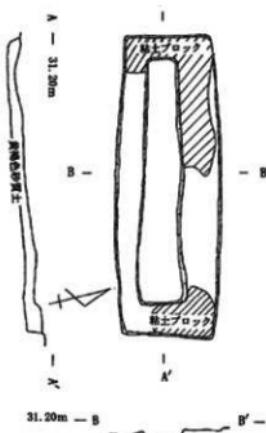
37・38号墳墳丘測量図



38号壺棺出土状況図



37号墳主体部実測図



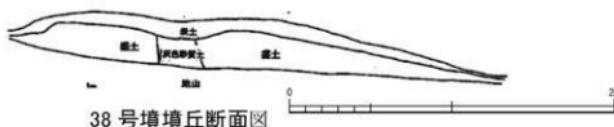
38号墳主体部実測図



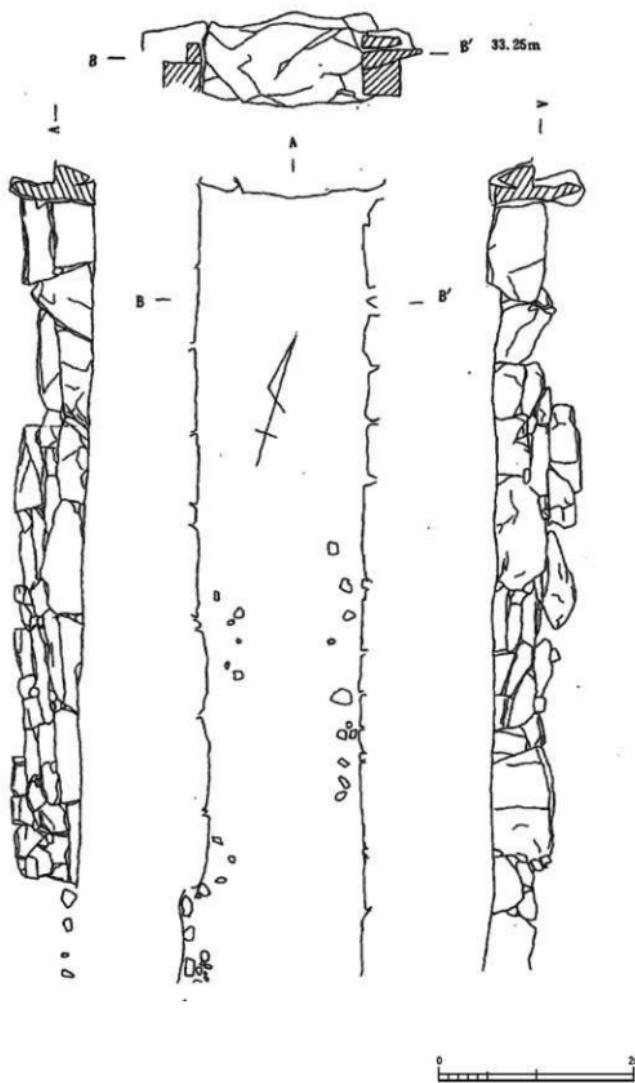
南北セクション図



東西セクション図

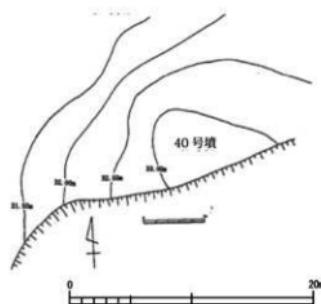


38号墳墳丘断面図

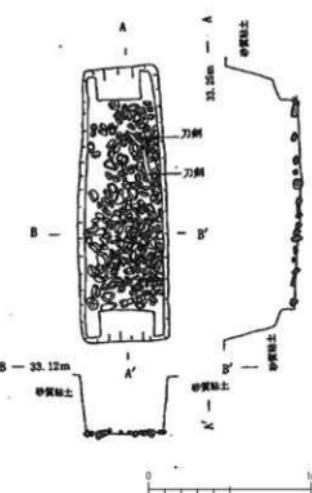


39号墳石室実測図

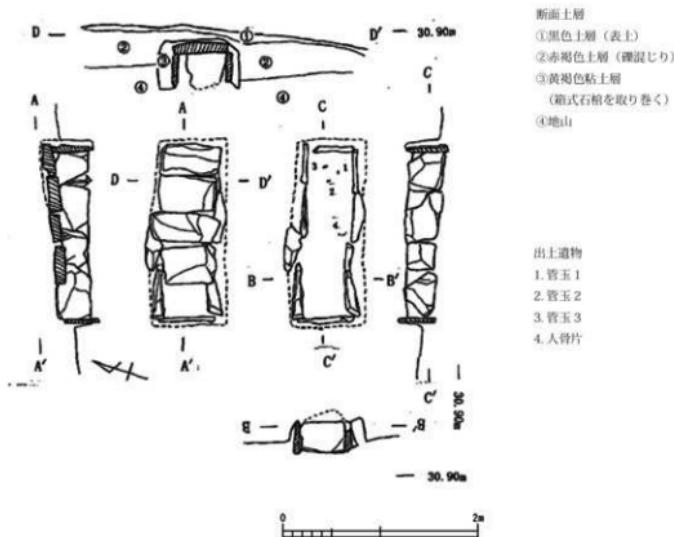
図版 18



40号墳墳丘測量図

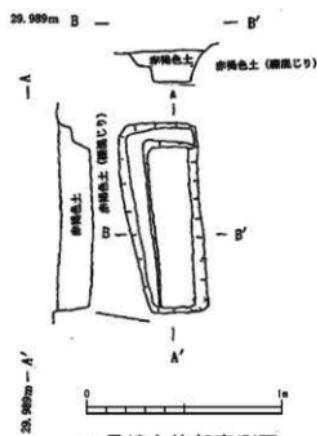
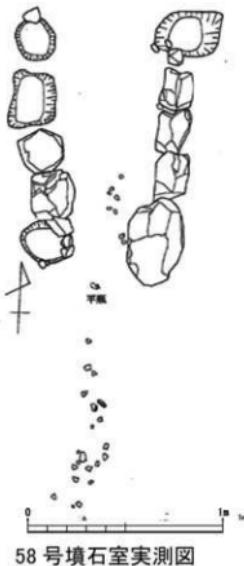
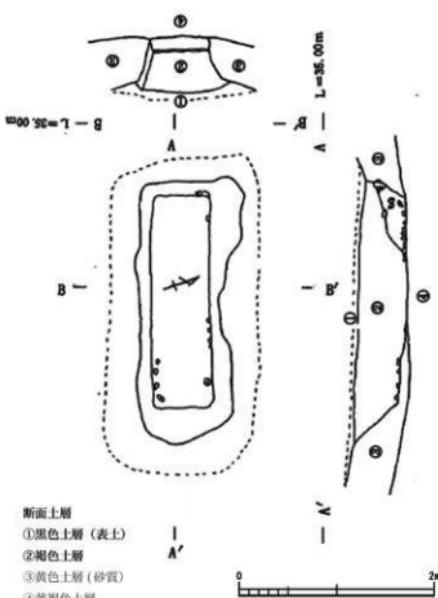


40号墳主体部実測図

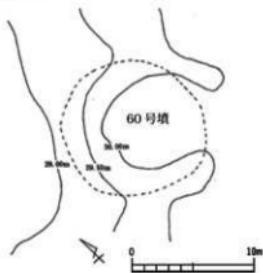


51号墳主体部（箱式石棺）実測図

図版 19



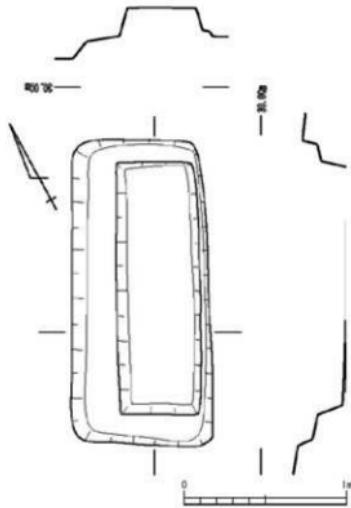
図版 20



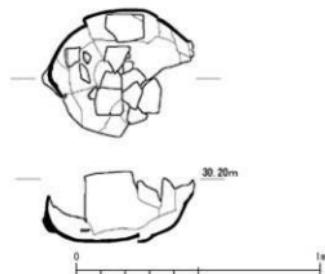
60号墳墳丘測量図



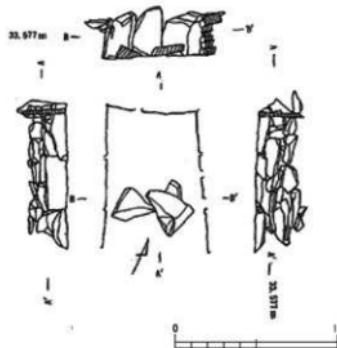
61・61の2号墳墳丘測量図



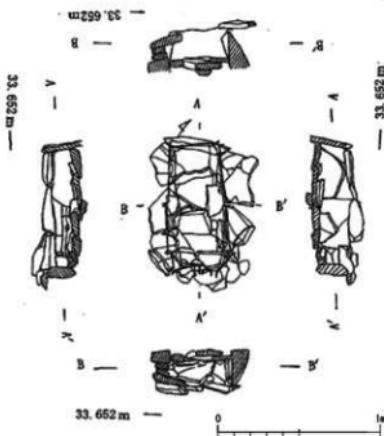
60号墳主体部実測図



60号墓土器棺出土状況実測図

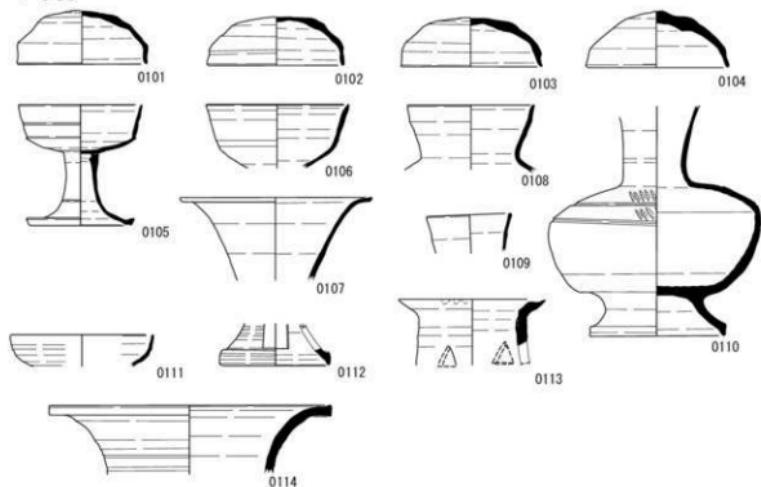


61号墳小型石室実測図

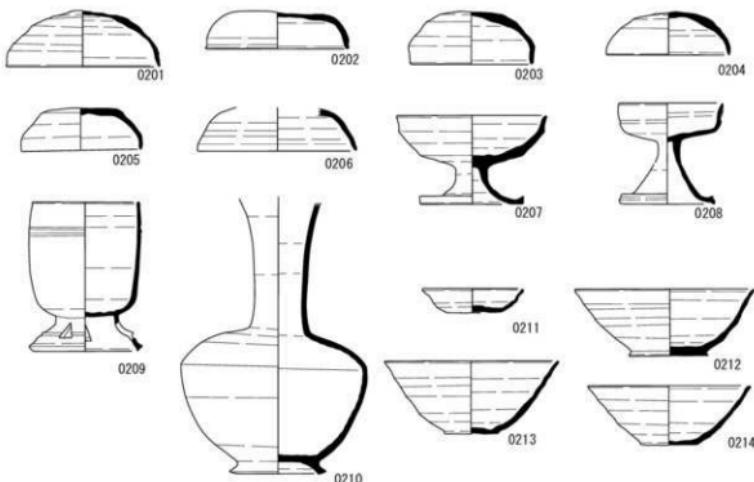


61号墳の2石棺実測図

1号墳



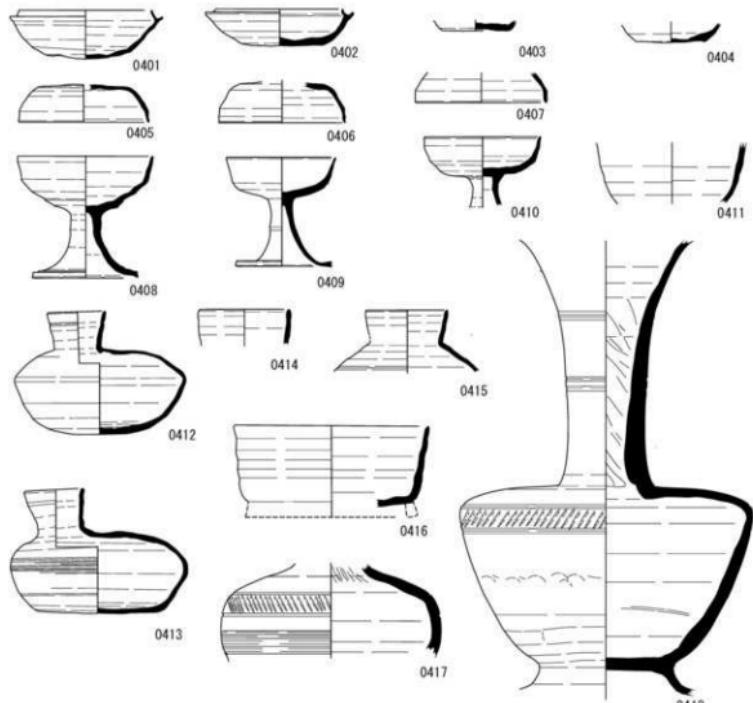
2号墳



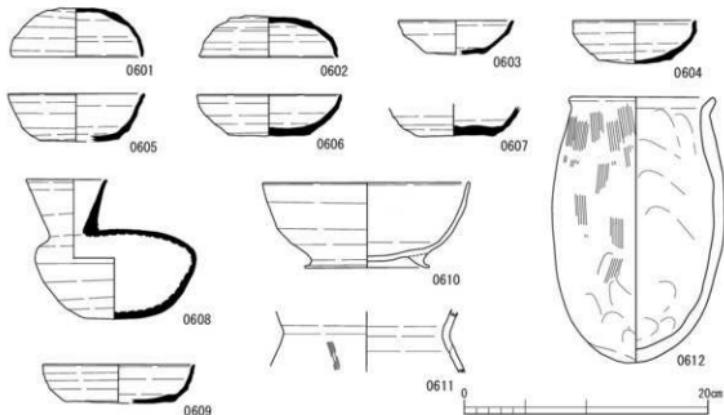
1・2号墳出土土器実測図

図版 22

4号填



6号填



4・6号填出土土器実測図

図版 23

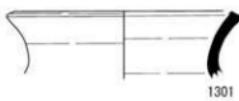
7号墳



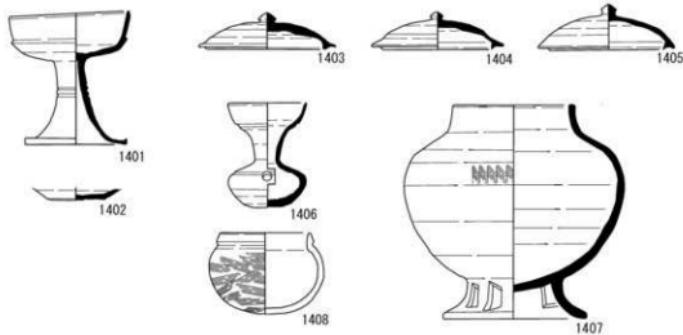
11号墳



13号墳



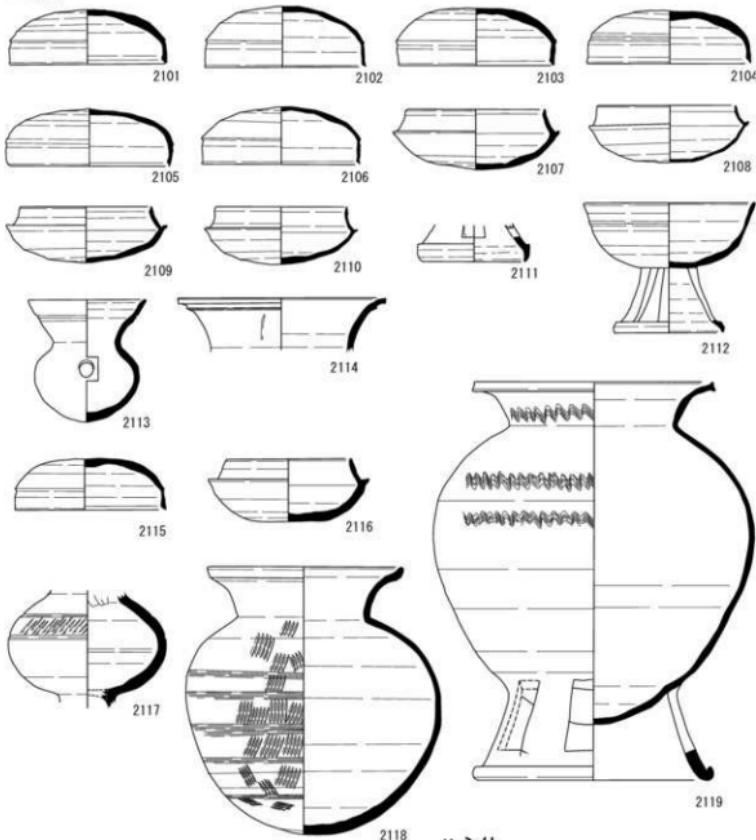
14号墳



7・11・13・14号墳出土土器実測図

図版 24

土器群



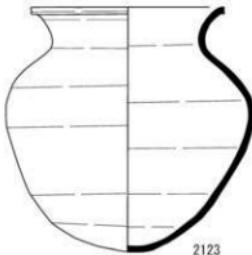
21号墳出土土器実測図(1)

0 20cm

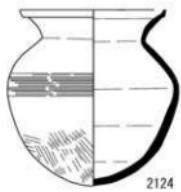
二主体



2122



2123



2124

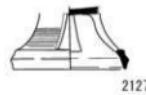


2125

木主体



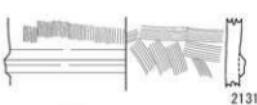
2126



2127



2129



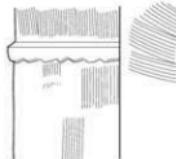
2131



2132



2133



2134



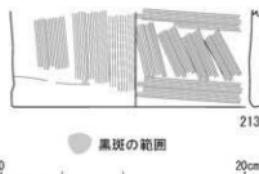
2135



2136



2137



2138

黒斑の範囲

0

20cm

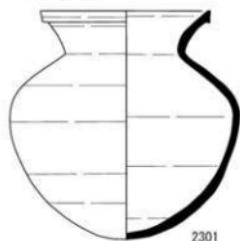
21号墳出土土器・埴輪実測図(2)

図版 26

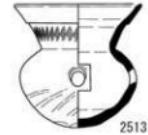
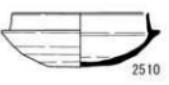
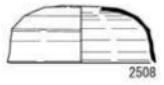
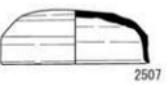
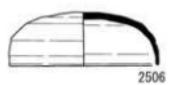
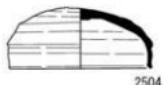
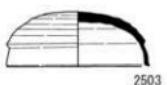
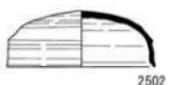
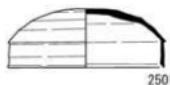
22号墳



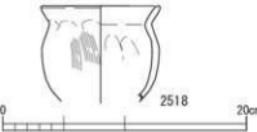
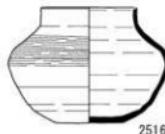
23号墳



25号墳土器群

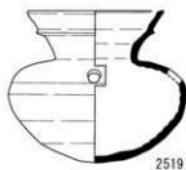


25号墳封土



22・23・25(1)号墳出土土器実測図

25号墳第2主体



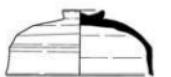
2519

東西セクション



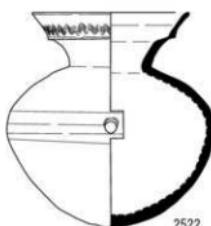
2520

25号墳第3主体 棺上部

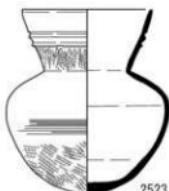


2521

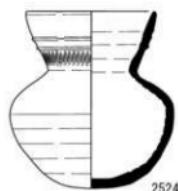
25号墳第3主体 棺内



2522



2523

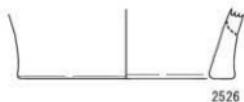


2524



2525

25号墳封土



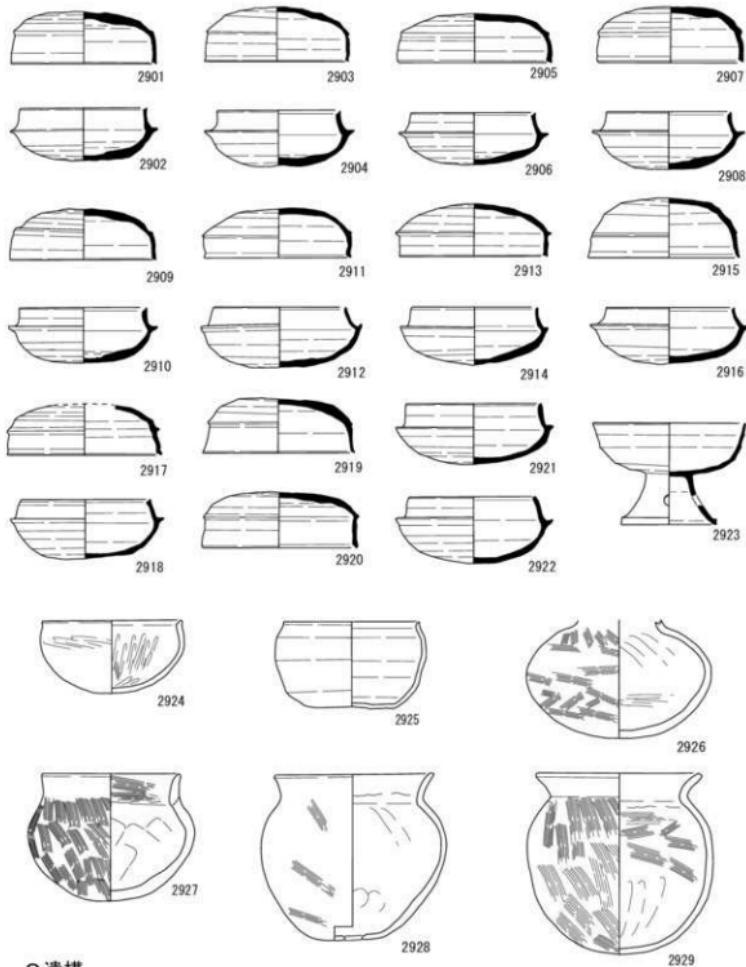
2526



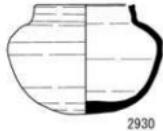
25号墳(2)出土土器実測図

図版 28

A 遺構

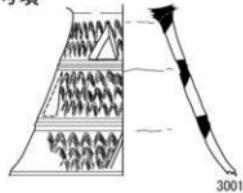


C 遺構

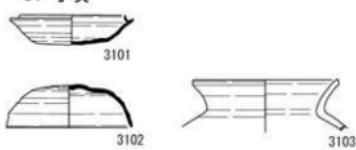


29号墳出土土器実測図

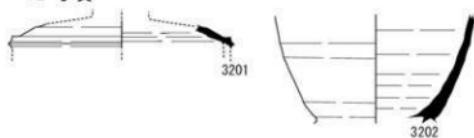
30号墳



31号墳



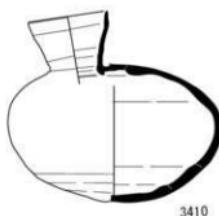
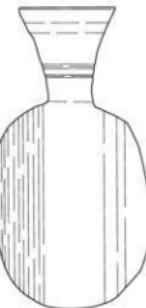
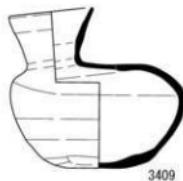
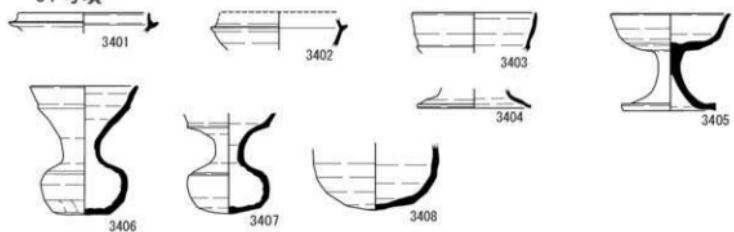
32号墳



33号墳



34号墳

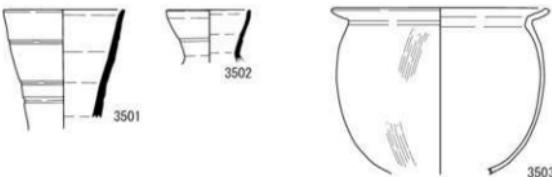


0 20cm

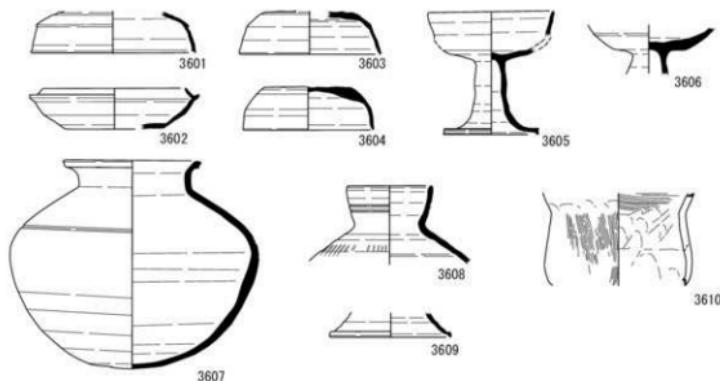
31・32・33・34号墳出土土器実測図

図版 30

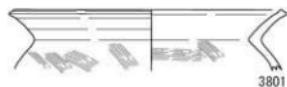
35号墳



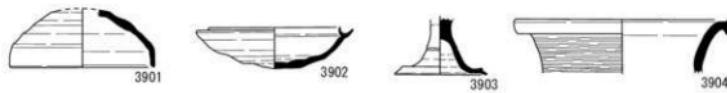
36号墳



38号墳



39号墳

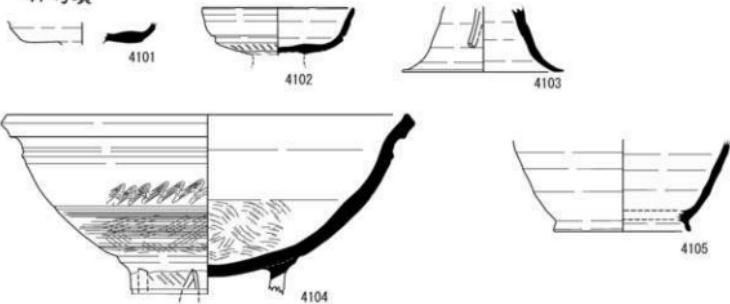


40号墳

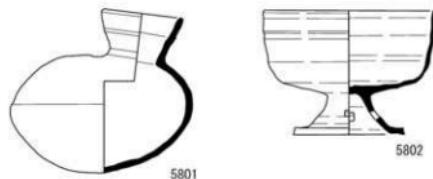


35・36・38・39・40号墳出土土器実測図

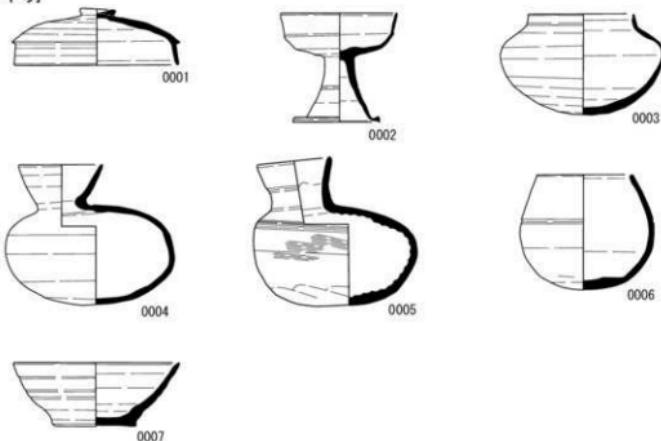
41号墳



58号墳

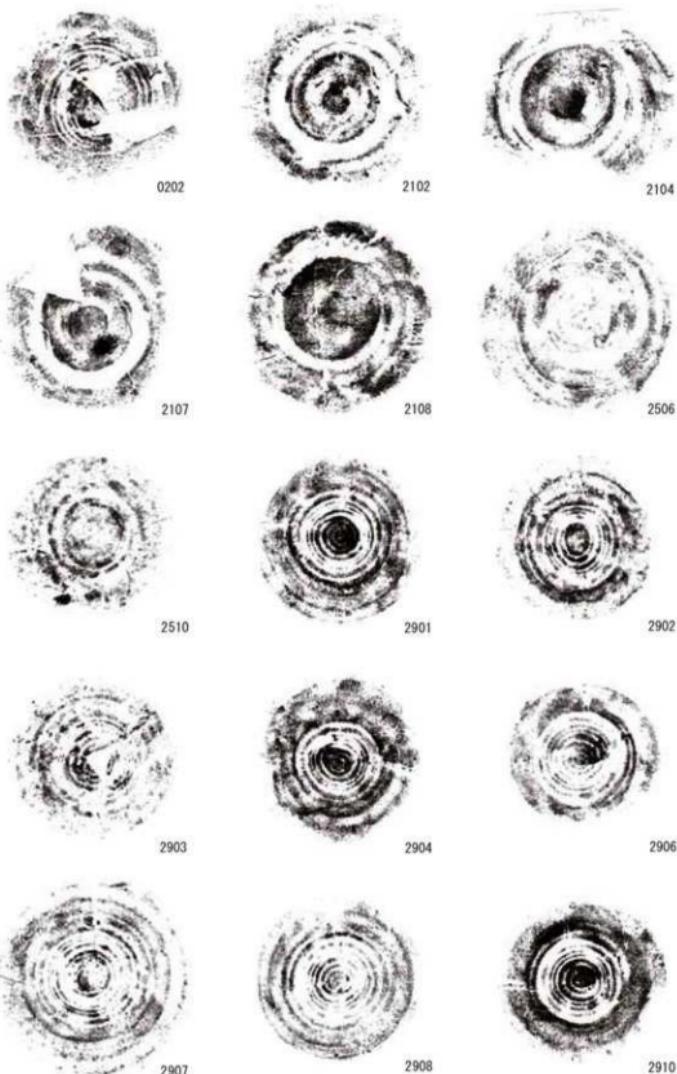


不明



41・58号墳・無注記土器実測図

図版 32



出土須恵器拓影

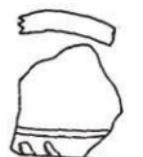
1. 蓋（身との接合部）



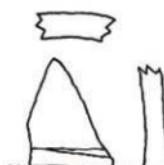
3. 蓋（凸帯）



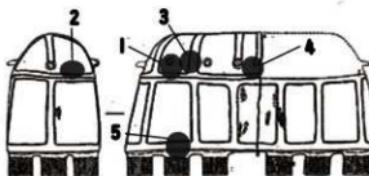
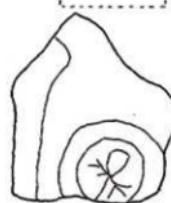
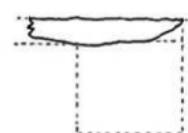
2. 蓋（身との接合部）



4. 蓋（身との接合部）



5. 身（底） 脚部が剥がれた痕跡



注1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 44 「塚の前古墳」2号陶棺 岡山県教育委員会文化課

土師質亀甲形陶棺片実測図

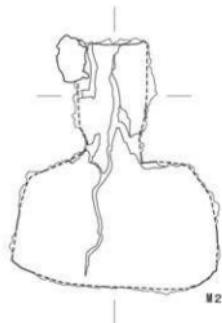
図版 34

1号墳



M1

2号墳



M2



M3



M4



M5



M6

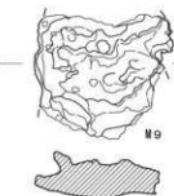


M7

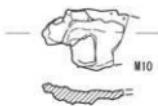
4号墳



M8



M9



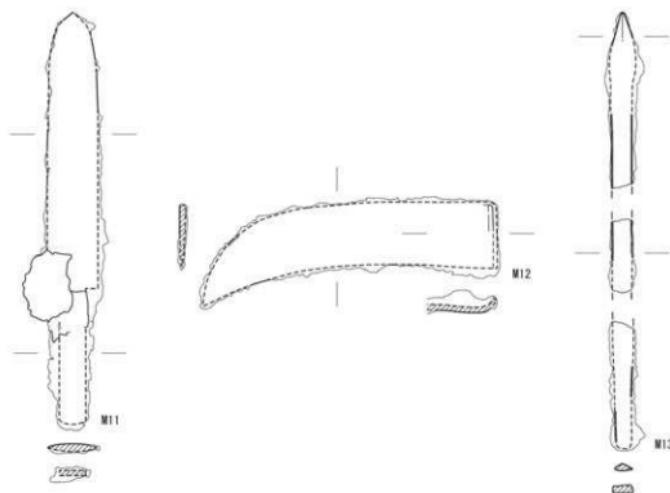
M10

木質

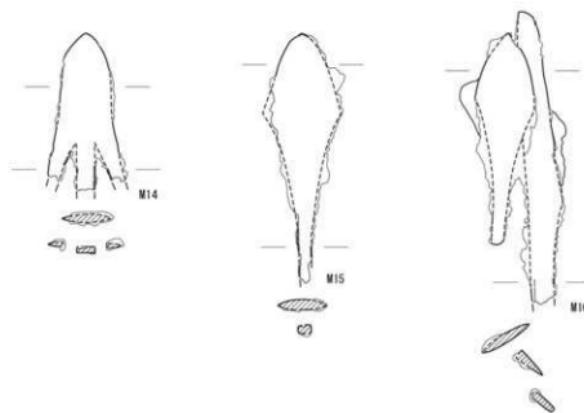
0 5-1/2 10cm

出土金属製品実測図 (1)

9号墳



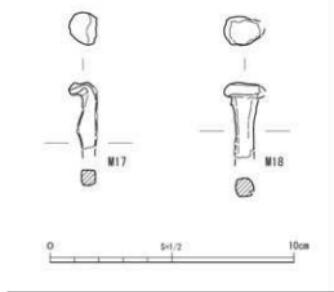
10号墳



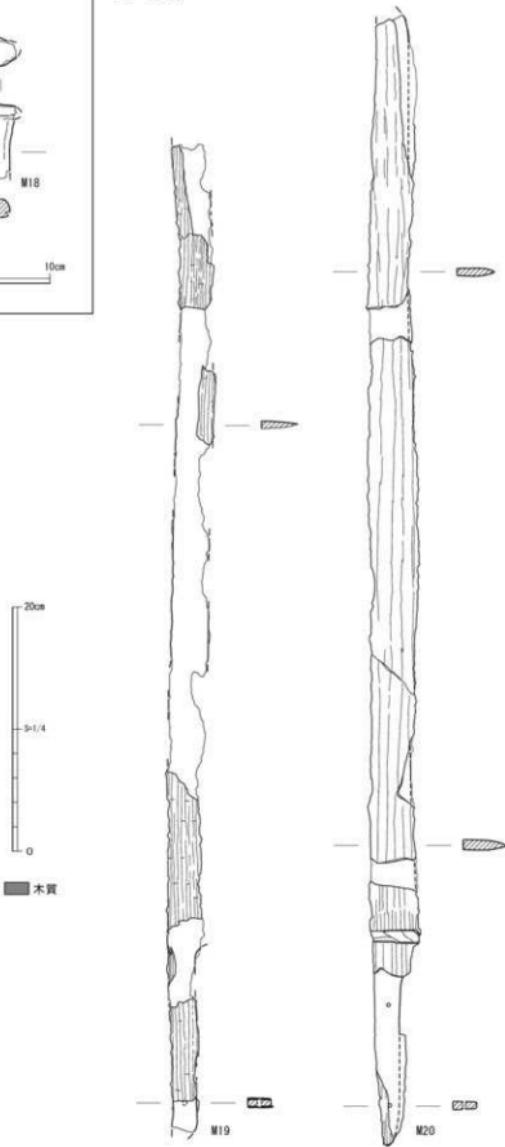
出土金属製品実測図 (2)

図版 36

14号墳

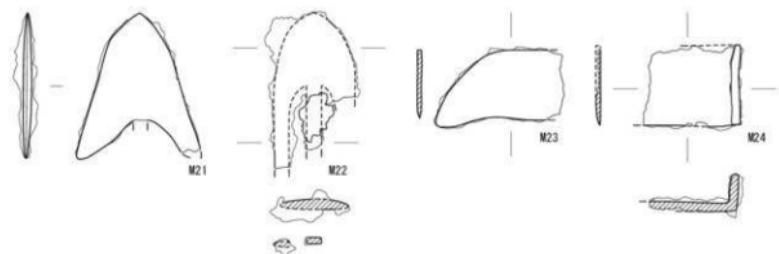


21号墳

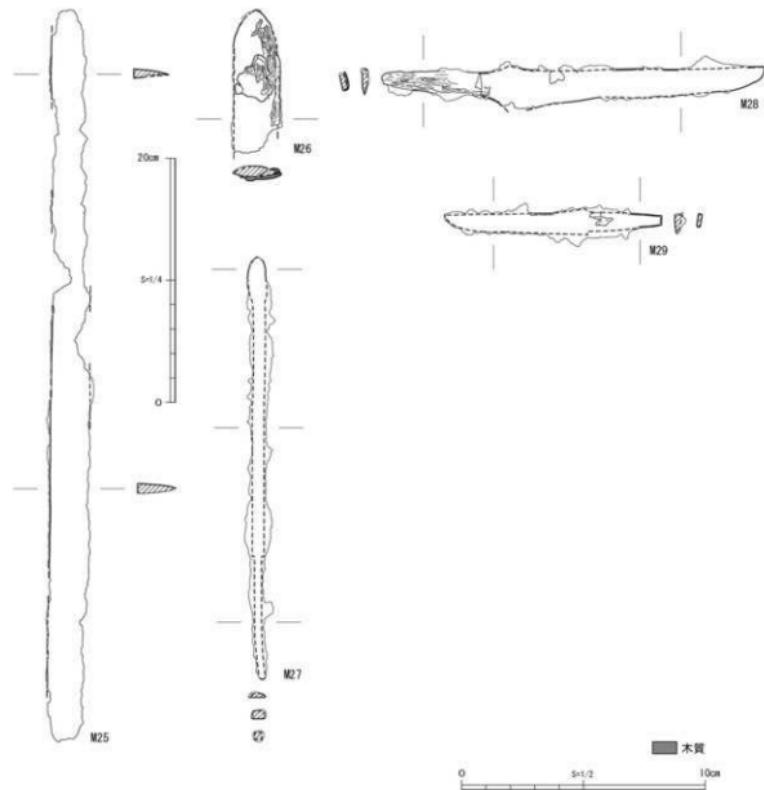


出土金属製品実測図 (3)

23号墳



25号墳



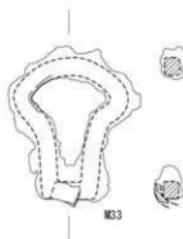
出土金属製品実測図 (4)

図版 38

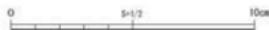
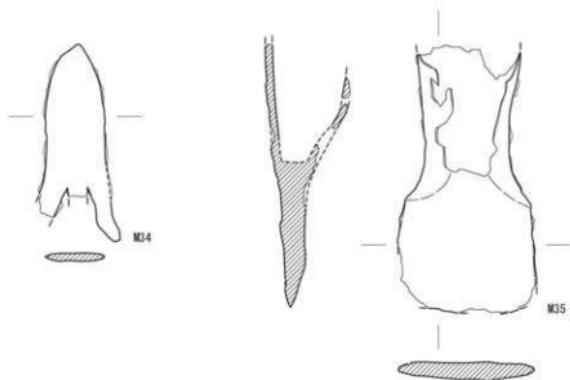
34号墳



36号墳



出土古墳不明

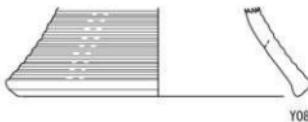
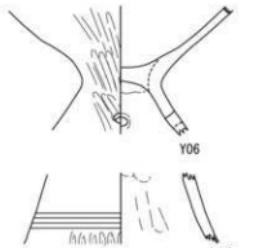
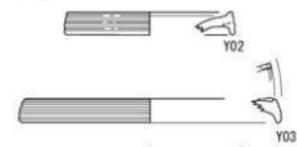


出土金属製品実測図 (5)

(4号墳)



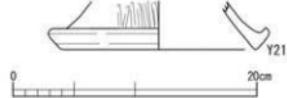
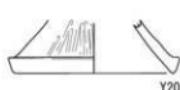
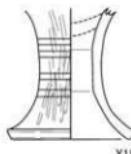
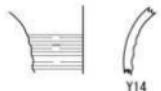
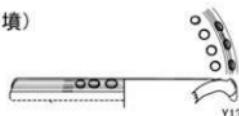
(21号墳)



(23号墳)



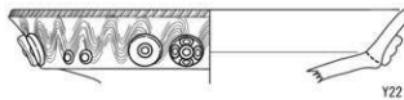
(25号墳)



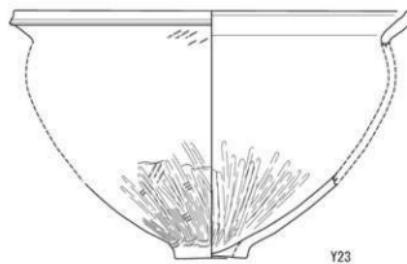
出土弥生中期土器実測図

図版 40

32号墓

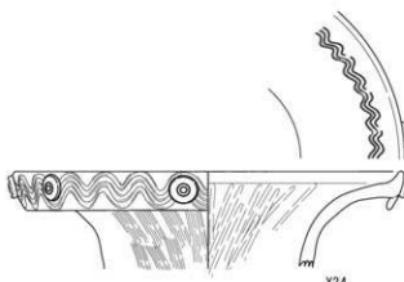


Y22



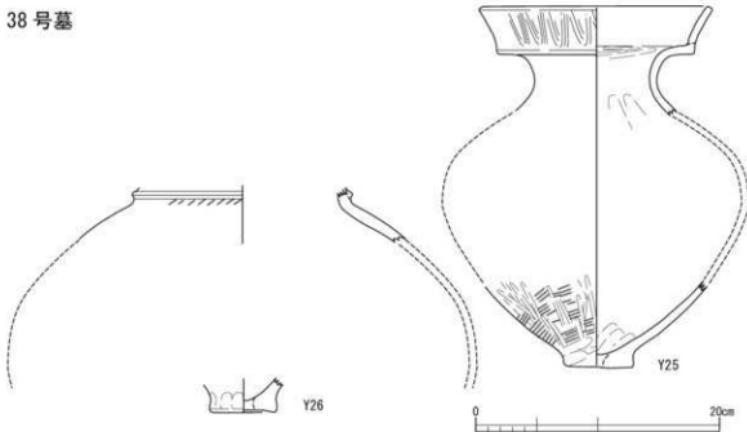
Y23

37号墓



Y24

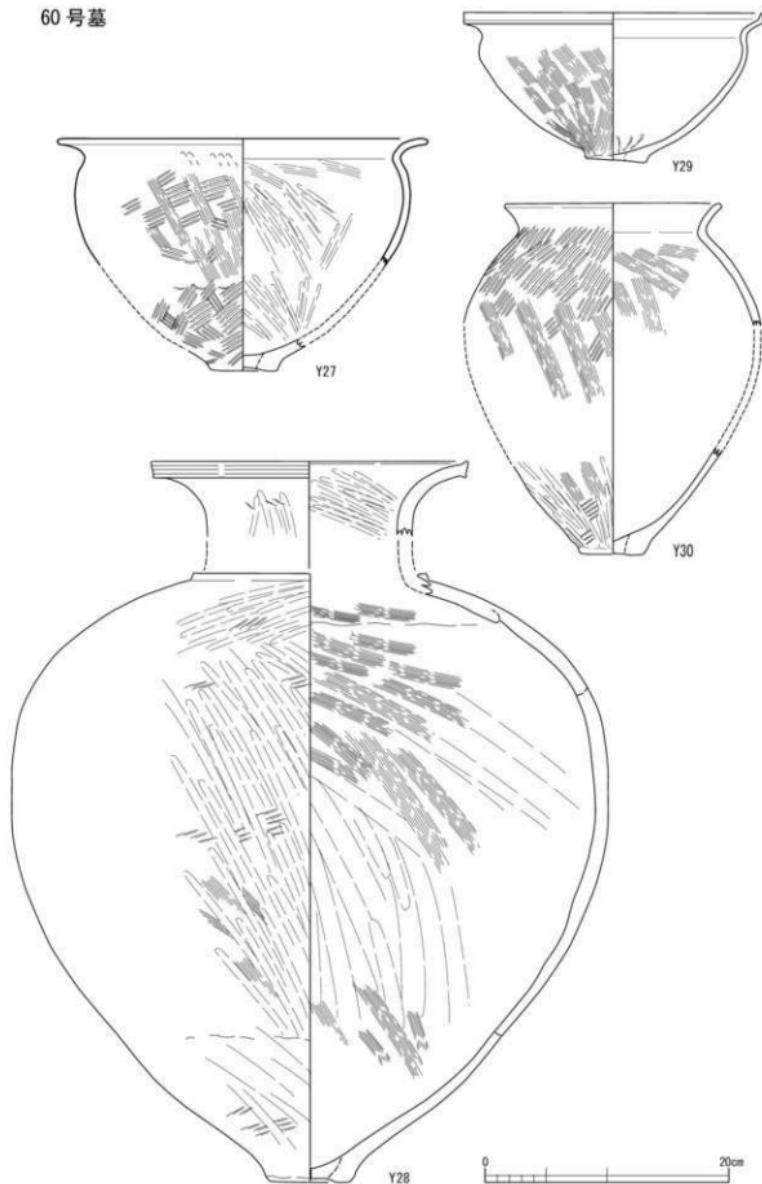
38号墓



0 20cm

出土弥生後期土器実測図（1）

60号墓



出土弥生後期土器実測図（2）

写真図版



1号墳石室



写真図版 2



2号填石室



3号填石室



4号墳石室



写真図版 4



6号墳石室



写真図版 5

7号墳石室



10号墳箱式石棺出土状況



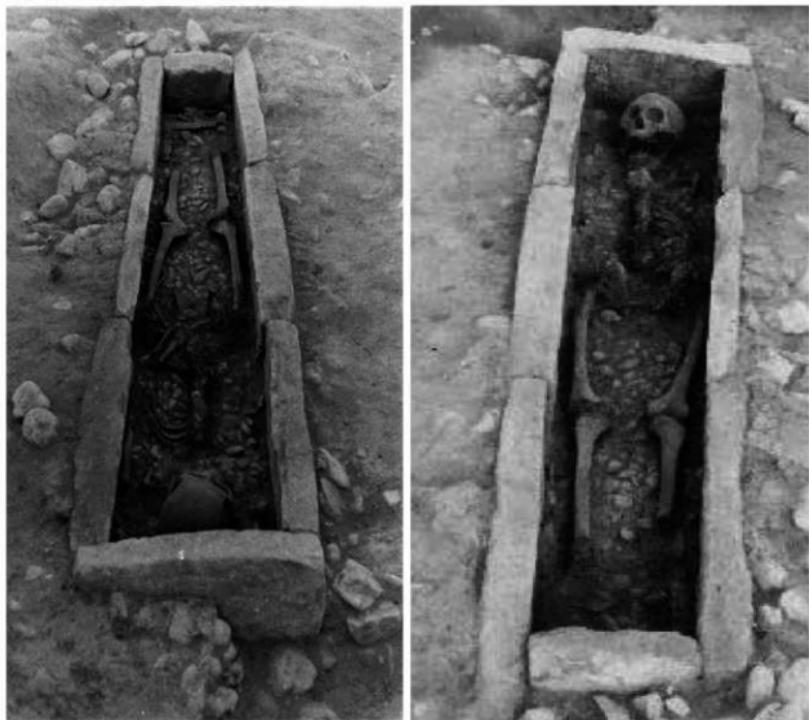
9号墳主体部



10号墳箱式石棺人骨出土状況



写真図版 6



10号填箱式石棺人骨出土状況



石棺内鉄器出土状況



10号填付設排水路出土状況

12号填石室



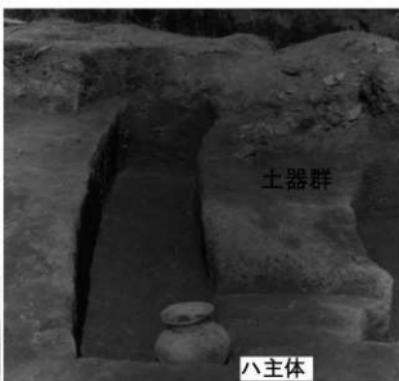
13号填小石室



写真図版 8



14号墳石室



21号墳主体部

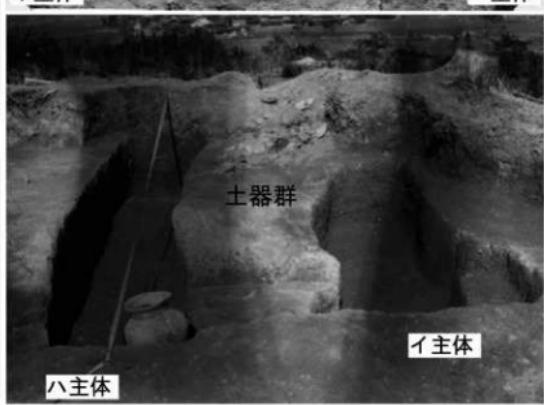


二主体



二主体

21号墳主体部



21号墳土器群出土状況

写真図版 10



25号墳第3主体

25号墳第1主体と
土器群



31号墳石室



34号墳石室



写真図版 12



35号墳石室



37号墳壺棺
出土状況



39号墳石室

40号墳主体部



40号墳主体部



51号墳箱式石棺

52号墓主体部

検出状況



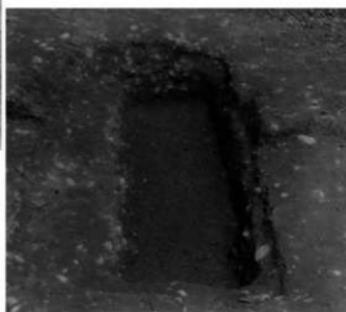
写真図版 14



52号墓主体部小石椁



52号墓壺棺出土状況



60号墳主体部



写真図版 15

1号墳



2号墳



6号墳



14号墳



58号墳



1407

34号墳



1401



3406

3411

写真図版 16

21号墳



21号墳出土家形埴輪



23号墳



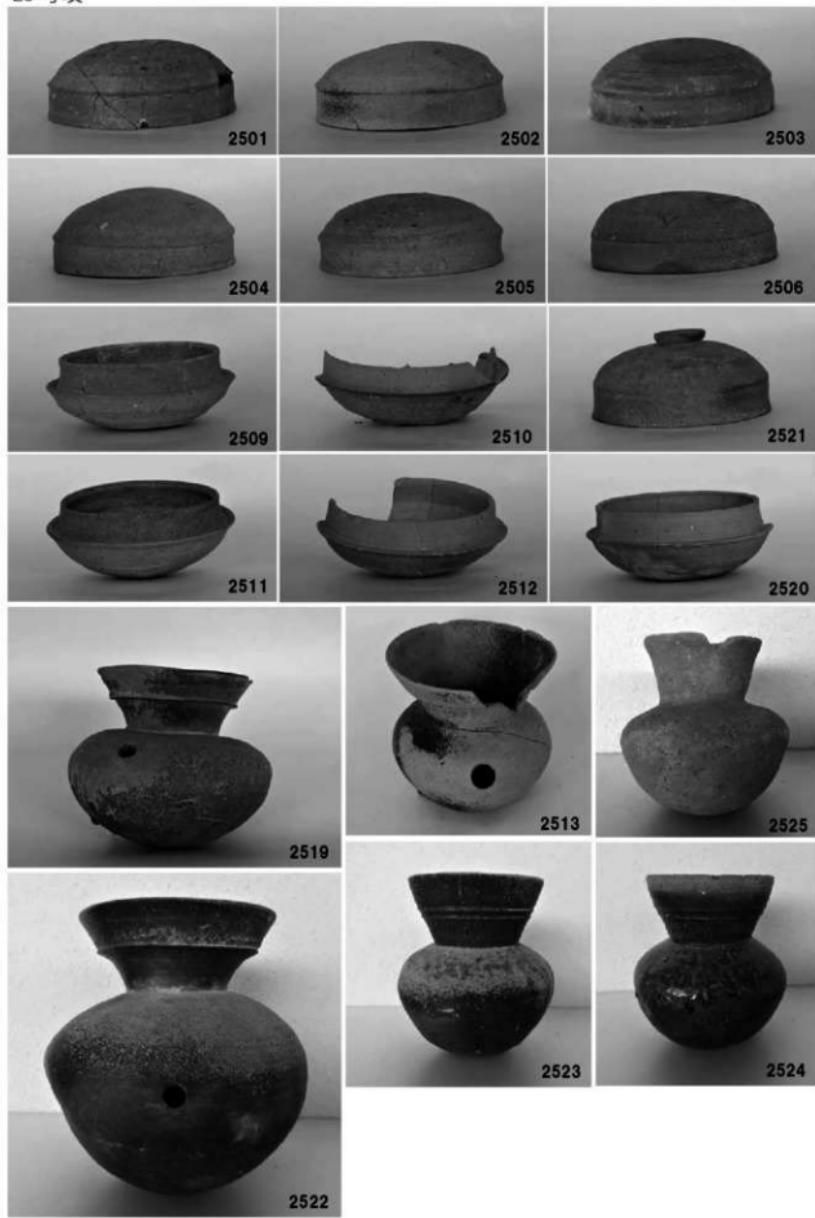
2302



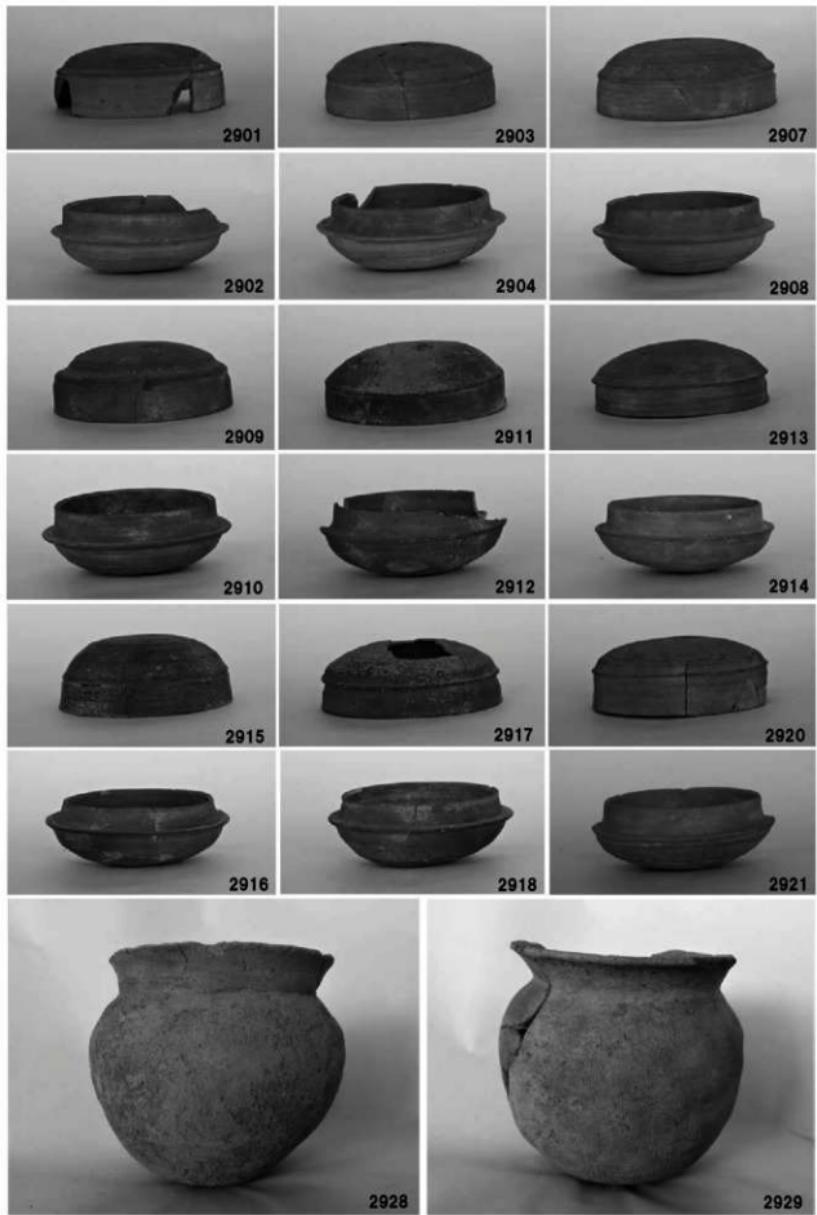
2301

写真図版 18

25号墳



29号墳



作業風景

2018.6.1～



土器洗（西条会館）

2018.10.26



木箱の遺物整理（西条会館） 2018.6.1



地元説明会 2019.1.12

発掘調査日誌 2019.5.20



接合作業（西条会館）

2019.1.18



接合作業（西条会館）

2019.5.10



接合作業（陵北小学校）

2020.6.5



土器実測（西条会館）

2018.7.20

西条古墳群

兵庫県加古川市神野団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査
(1963～1964年)の成果

発行日 2022年3月31日

企画・編集 東播磨地域史懇話会考古部会

印刷 日坂印刷所

*この調査研究は加古川市協働のまちづくり推進事業補助金
を活用しての取組みです。

